一橋大学　言語社会研究科

イソップの寓話における翻訳の問題

コバニ・マリア

2011

東京都

イソップの寓話
における
翻訳の問題

前書き

This study is a doctoral thesis for the Graduate School of Language and Society of Hitotsubashi University. First of all, I would like to express my deepest and sincere gratitude to my supervisor Professor Keisuke Kasuya, whose continuous guidance and encouragement made this study possible. It is also my pleasure to thank Professor Furusawa Yuko for her useful suggestions and advice, which enabled me to develop a deeper understanding of Greek-Japanese Translation. Many thanks are owned to all my professors of Japanese language in Hitotsubashi University. I would also like to thank my Japanese professor in Greece Ms. Masako Ozawa for helping me understand not only the Japanese language but also the Japanese way of thinking.

Finally, I would like to thank my family for all their support from the beginning through the end of my research. I dedicate this study to my Japanese host family for making me feel that Japan is also my home.

To Mr. and Ms. Ashizawa,

Thank you!

目次

0. 序論 7

1. 翻訳 11

1.1. 翻訳という科学 12

1.2. 再翻訳 14

1.3. 先行研究 15

1.4. 文化的テクストの翻訳についてのアプローチ 22

1.5. 方法論 23

15.1. Delisle 23

1.5.2. Tatilon 25

1.5.3. Nida 27

1.5.4. Baker 29

1.6. 目的 31

2. イソップ 35

2.1. 初めに 35

2.2. イソップの生活 36

2.3. おとぎ話、たとえ話、寓話 37

2.4. イソップの寓話 39

2.5. イソップの言語 40

3. アリストパネース 44

3.1. アリストパネースの生活 44

3.2. 喜劇 45
3.3. アリストパネースの創作 47
3.4. アリストパネースとイソップ 49
4. 日本語への翻訳 51
4.1. イソップと日本 51
4.2. イソップの『寓話』について 53
4.2.1. ギリシャ語の文献 53
4.2.2. 日本語の文献 53
4.3. アリストパネースの『蜂』について 55
4.3.1. ギリシャ語の文献 55
4.3.2. 日本語の文献 56
5. 分析 59
5.1. イソップの『寓話』 59
5.1.1. 言語的な分析 61
5.1.2. 文化的な分析 106
5.2. アリストパネースの『蜂』 111
5.2.1. 言語的な分析 111
5.2.2. 文化的な分析 124
6. 結論 130
後書き 139
参考文献 140
索引 148

名前 148

専門用語 149

イソップ寓話伝承系統略図 154

0. 序論

言語と文化と社会は三つの関連する要素である。文化は社会の価値や考え方によって影響を受けるので、文化を理解するためには、人々の価値観と考え方を理解しなければならない。さらに、言語は文化によって構成されたものなので、言語を理解するためには、文化の内容について認識しなければならない。

文化は価値観のシステムとして、個人の振る舞いを形成したり、個人の世界観を構成したりする。また、個人のレベルだけでなく、社会についても同じことがいえる。あらゆる文化には、普遍的法則には還元できない特別な規則と規範がある。そのことは異文化コミュニケーションの場面で、はっきり現れる。異文化コミュニケーションに参加するためには、言語的な能力以外に、異なる集団に属する人々の考え方に関しての知識も必要である。人々の言語と身振りが異なるため、言語及び非言語的な表現を誤解すること A が往々にしてあり、そのことが異文化コミュニケーションの障害となっている。異文化コミュニケーションの参加者は、全ての文化には独自の特徴があり、したがって互いの文化には相違があることを理解しなければならない。

このような異文化性とその翻訳の問題を理解するために、本論文ではギリシャと日本の文化における相違点と類似点に関する研究を行った。特に、色々な理論に基づいて、ギリシャ語から日本語への翻訳の際に起こる問題について検討をした。同じものを指す言葉が、それぞれの言語では異なる意味をもつことがある。そして、単語は指示対象的な(referential)意味とは別に、語用論的(pragmatic)な意味を持っている。論文の目標は、ギリシャ語で書かれた作品の翻訳の在り方を通じて、ギリシャ人と日本人の考え方や表現法の違いについて理解するということであった。ギリシャ語と日本語の翻訳を学ぼうとする学生は、まず最初に、この二つの文化と言語の相違点と類似点について認識しなければならない。さらに加えて、具体的な実例に基づいて考えるなら、学習者は言語の実際の使用法を学ぶことができる。

論文のテーマはイソップの寓話である。特に、寓話を使用しながら、ギリシャと日本の文化について比較文化の観点から検討をした。最初に、口承文学の特徴について検討

して、その普遍的性質に関して論じた。イソップの生い立ちには、まだよく分からない点が残っているが、彼の作った寓話は有名になっている。そして、彼の物語は様々な言語に翻訳された。イソップは彼の寓話を通じてギリシャ社会の価値観を明らかにした。彼は、偉大な教師として、風紀を正したり、悪を非難したり、美徳を賞賛したりした。そして、彼の物語はギリシャ人にとって、誰もが知っている教訓となった。ギリシャの学校では教材として、イソップの寓話が使われている。また、日本でも、イソップの寓話は学校の教科書に載せられて、教材として使われている。現在は、ギリシャと日本に寓話の多くの翻訳がある。この翻訳を用いて、ギリシャ思想と日本思想を理解しようとした。

本論文は、次の六章からなる。(1)翻訳、(2)イソップ、(3)アリストパネース、(4)日本語への翻訳、(5)分析、(6)結論。各章の概要は以下の通りである。

（1）「第一章 翻訳」の概要

第一章では、翻訳の科学とそのプロセスについて述べる。スピーチの通訳や書物の翻訳は、異なる言語の人々の間のコミュニケーションを可能にする技術として歴史的に重要な役割を果たしてきたが、アカデミックな問題として翻訳に関する研究が始まったのは、わずか五十年前からにすぎない。約五十年前に翻訳の科学が生まれ、多くの翻訳に関する理論が作られて、Translation Studies という新しい分野が開けた。本論文では、紙面の制限から全ての翻訳理論について詳しく述べることはできないが、Hatim、Mason、Newmark という代表的な研究者の等価性の理論について検討し、その理論を使ってギリシャ語の原本と日本語の翻訳テクストを比較し、原本の作家の Vouloir Dire（意味作用＝言おうとすること）と翻訳者の翻訳ストラテジーを分析する。研究対象としては文学的なテクストの翻訳を取り上げる。

（2）「第二章 イソップ」の概要

第二章では、イソップという人物について述べる。イソップは、自分の寓話を書物に著さなかったが、他の作家の作品を通して彼の寓話が伝えられてきたので、今では世界中に広まっている。イソップの生涯に関しての情報は多くないが、後世の著作家の手に

よって、古代から伝えられている多くの寓話からそれらの情報が集められた。イソップの寓話は昔から子供や大人の教育のための教科書として使われてきた。ギリシャでは、それらが重要視されて、ギリシャ人の考え方や社会的な価値観に大きな影響を与えてきた。それ故に、「一匹でもレオンだ」などのイソップ寓話の表現は今でも日常的な会話で使われている。この章では、イソップの言語と方言についての検討も行う。

（3）「第三章 アリストパネース」の概要

第三章では、イソップの寓話に基づいた作品を初めて著した劇作家アリストパネースについて述べる。アリストパネースには、イソップと異なる特徴と共通する特徴がある。異なる特徴としては、イソップが奴隷であったために政治家について自由に話せなかったのに対して、アリストパネースは自由人として政治的な問題について風刺できたという点である。共通する特徴としては、二人ともギリシャ人の教育に興味を持っていたことである。アリストパネースは、自分の教育的な劇(例えば、『蜂』という喜劇)でイソップの寓話を使っている。

イソップの生涯と寓話に関する情報の多くはアリストパネースの作品から収集された。イソップの寓話はアリストパネースの時代でも人気があったので、アリストパネースはイソップをモデルにして擬人化した動物の劇を作り、イソップの寓話を語られている。アリストパネースによると、イソップはギリシャの偉大な教育者であるので、イソップの寓話を知らない人は教養のない人であるという。

この章では、アリストパネースとイソップの関係と、『蜂』というアリストパネースの喜劇について検討する。

（4）「第四章 日本語への翻訳」の概要

第四章では、イソップの『寓話』とアリストパネースの『蜂』の原本がどのように日本語に翻訳されたかを検討する。とくに、最初に行われた翻訳と現在の翻訳について述べる。

（5）「第五章 分析」の概要

第五章では、Delisle、Tatilon、Nida、Baker という四人の研究者の理論を使って、原本の情報(textual information)と翻訳された情報についての分析を行う。分析の事例としては、原本としてイソップの四つの寓話と『蜂』を選び、それらの日本語への翻訳本を取り上げる。

（6）「第六章 結論」の概要

最後の第六章では、第五章の分析から得られる結論として，本論文の目標であるギリシャ語と日本語の概念、ギリシャ人と日本人の考え方の類似点と相違点について述べる。

翻訳は、科学や芸術であるだけではなく、思想や感情を交換するための語用論的なツールでもある。翻訳の重要性は、異なる文化を持っている民族の間の接触と交流によって高められてきた。言語の障壁以外にも文化の相違があるため、東洋と西洋のコミュニケーションの問題はより難しい側面を含むことになる。多くの研究では、翻訳が言語学的な見地から考察されているが、本論文の目的は文化論的な観点も含めて翻訳過程を研究するものである。

1. 翻訳

翻訳はある言語から別の言語へ意味を変換することであるが、それだけではない複雑な過程が翻訳にはある。書くということは、考えや感情を言葉というコードに翻訳することであり、読むということは、言葉というコードを考えや感情に翻訳することである。つまり、考えや感情とコードの間の相互の変換が翻訳という行為である[1]。文学においては、意味内容の移し替えだけでなく、どのように翻訳するかということが問題になる。つまり、忠実に翻訳するか、自由に翻訳するかという問題である。

しばしば、ある言語と別の言語の間では翻訳が不可能(untranslatability)なことが起こる。原本によっては完全な翻訳(translatability)が不可能な場合がある。つまり、 翻訳されたテクスト(B Text)が原本(A Text)の完全な再生にはなり得ないことがある[2]。そのような場合に、翻訳者は不完全な等価性、あるいは「違いの中の等価性」(equivalence in difference)に基づいて翻訳を可能にしている[3]。

ホラティウス、キケロ、クインティリアヌス、テレンティウスが fidus interpres(忠実な翻訳家)という概念をあざけったときから、 忠実な翻訳とイミテーションに関して、文法派と自由派の間で論争が始まった[4]。

原本の作家は一人であるが、翻訳者は二人以上いることも多い。翻訳は、創造的な仕事と考えられているが、翻訳されたテクストは創造物ではなく、二次的な産物、もしくは改造物であると言われることがある。要するに、オリジナリティは原本だけにあるというのである。しかし、翻訳するためには、特に文学的な翻訳では、翻訳者は自分の想像力を駆使している。翻訳の独創性という観点も、翻訳理論には必要だと思われる。

---

[1] Willis Barnstone (1993) *The Poetics of Translation: History*, *Theory*, *Practice*, Yale University Press, New Haven & London (p.10)
[2] 数学によると、A=A であるが、A≠B である。
[3] Ibidem (p.16)
[4] Ibidem“This endless conflict of close or faithful literary translation versus imitation, between “grammarians” and “libertines” began as we know with the Roman writers Horace, Cicero, Quintilian, and Terence who freely mocked the notion of a fidus interpres.”(p. 85)

1.1. 翻訳という科学

「翻訳」を科学的にとらえると、翻訳には二つの側面がある。翻訳という過程が進行する「時間＝タイム」という側面と翻訳という作品を構成する「空間＝スペース」という側面である。また、翻訳の過程は、「原本の読者」、「テクストという情報の媒体」、「翻訳されたテクストの読者」といった異種の、そして、連続した実体に関連している[5]。

「テクスト」のコミュニケーションという観点から「翻訳」の定義を述べてみると、[6]:「翻訳は、伝達力と意味を持っている記号の組み合わせを別の記号の組み合わせに取り替える過程である」と言うことができる。

もちろん、翻訳に使う媒体のカテゴリーには、様々なものがある。例えば、同じ媒体の記号内での翻訳(記号内的－intrasemiotic)、異なる媒体の記号への翻訳(記号間的－intersemiotic)、同じ言語内での翻訳(言語内的－intralingual)、異なる言語への翻訳(言語間的－interlingual)、同じ記号での翻訳(同記号的－isosemiotic)、異なる記号への翻訳(通記号的－diasemiotic)、上位の記号体系への翻訳(超記号的－supersemiotic)、より下位の記号体系への翻訳(下記号的－hyposemiotic)などのカテゴリーに分類されている[7]。

さらに、翻訳には、選ばれたストラテジーによって、次の二つのタイプがある。

- Conventionalized－慣習化された翻訳：一定のやりかたで慣例化された翻訳のストラテジーである。原本と目標テクストの間にある程度明示的な結びつきがあるので、翻訳された作品に関する評価をすることが簡単にできる。
- Inspirational－創造的翻訳：翻訳者のインスピレイションに基づいて翻訳するストラテジーである。このストラテジーの翻訳では、翻訳されたテクストから原本を推測することができない。一方、慣例化された翻訳では、それは難しいが、不可能ではない。

[5] Henrik Gottlieb (2005) “Multidimensional Translation: Semantics turned Semiotics” In EU-High Level Scientific Conference Series MuTra 2005-Challenges of Multidimensional Translation: Conference Proceedings (p.2)
[6] Ibidem (pp.3-4)
[7] Ibidem (pp.4-5)

普通に想定される翻訳というと、interlingual、conventionalized、isosemiotic の翻訳のことである。つまり、異なる言語の間で行われ、ある程度慣習化され、言語という同じ記号を用いた翻訳である。また、翻訳業務に際しては、往々にして十分な時間の余裕がないので、テクストの翻訳可能性の障害を克服する場合に、多くの解決方法を参照してその中から一つを選ぶということではなく、翻訳者が当面する問題について一つの解決方法を考えつくだけでも幸運である。そのとき翻訳がぎこちないものになるかもしれない。このようなことを考えると、翻訳されたテクストが原本と比べて異なったテクストになることは必然的である。一番重要なことは、TLT (Target Language Text・翻訳された作品)が目標言語として受容可能なテクストであるということである[8]。翻訳で一番大切な原則は、「受容性」である。つまり、読者に受け入れられるテクストということである。「受容性」という原則に従えば、翻訳されたテクストは目標言語で理解できなければならない。そのために、原本の内容とスタイルが変ってしまう場合がある。ただ、文化的なテクストの場合には、読者にとって翻訳が原本の“鏡”となっていなければならない[9]。ただし、その“鏡”の忠実性は、コンテクストに応じて変わりうる。

最後のカテゴリーはリレー翻訳である。原本の A 言語から B 言語へ翻訳する場合に、中間的なピボットとして第３言語の C 言語をリレー言語として使って翻訳することがある。これは、翻訳者の不在などの理由により、A 言語から B 言語に直接翻訳することが難しい場合に起きる。そのピボット翻訳は、C 言語を話している読者に向かっての翻訳ではなく、唯一の読者は C 言語から B 言語への翻訳者である。 言い換えれば、ピボット翻訳は、翻訳者に向けての翻訳である[10]。

[8] David Horton “Literary Translation Between Equivalence and Manipulation: Lawrence Norfolk’s Lemprière’s Dictionary in German”, *Neophilologus 78* (1994) (pp.175-194) Kluwe Academic Publishers, Netherlands (p.193)
[9] Ibidem (p.16)
[10] Ibidem (p.18)

1.2. 再翻訳

「再翻訳」という言語行為に関する研究と理論上の議論はあまり多くない。再翻訳についての Yves Gambier[11]による定義は、同じ言語で何回も翻訳すること、または、A 言語から B 言語へ翻訳されたテクストを C 言語に翻訳する(例えば、ギリシャ語からラテン語へ翻訳して、さらに、ラテン語から日本語へ翻訳する)ことである。どんなテクストが再翻訳に選ばれるかということについては色々な理由があるが、その重要な理由の一つは、翻訳されたテクストの使用というものである。例えば、イソップの寓話が現代の日本人の関心の意味を対象となっているなら、翻訳の必要は高まるだろうが、しばしば原典から翻訳できる適任者が不足しているために、再翻訳、特にリレー翻訳が必要になる。

その上、普通は、テクストの時代とそのテクストの中の用語とか地名などの言葉のせいで、翻訳することが難しくなってしまう。その難しさを克服するために、翻訳者は脚注をつけなければならない。そのようにして、読者がテクストを理解できるようにする。

同じ言語による再翻訳の主な理由は、以前の翻訳を改訂して、または誤りを修正して、改良するということである。例えば、寓話は、教訓をもつ物語であり、初めは特定の聴衆に向けられていたが、しだいにそれらの翻訳がより一般的な聴衆に向けて行われるようになった。それに応じて、テクストを現在の社会に順応させる必要が生じた。

Venuti[12]によれば、翻訳者は外国文化と自分を“表現しない”ようにしなければならないと言う。その規則は、再翻訳にも当てはまるだろう。再翻訳の目的は、 以前の翻訳の誤りを修正すること以外にも、テクストの新しい解釈を提供すること、翻訳学の基準に従って翻訳のストラテジーとか方法を変更すること、読者の文化に順応させることなどがある。

それでは、どうして再翻訳するのか。再翻訳をしなければならない理由や必然性は何か。それには以下のようなものがある。

---

[11] Yves Gambier, “La Retraduction, Retour et Détour” *META* 39.3, Sept. 1994 (p.413)
[12] Lawrence Venuti (1995) *The Translator’s Invisibility: A History of Translation*, Routledge, London (pp.8-9, 44-50)

- 翻訳されたテクストを翻訳するほうが、原典を最初から翻訳することに比べると、より簡単な仕事である
- 以前の翻訳に取って代わることによって、自らの権威を高めたいとする願望
- 学究的世界における派閥主義
- 流行
- 翻訳に対する認識の変化

しかし、再翻訳によって作られた作品は、原典を訳した翻訳に代わることはできない。古典的なテクストの場合には、通常の翻訳だけでなく、再翻訳によって生まれた作品がたくさんあるが、原典からの翻訳という用語は、そのなかの一つにしか使えないのである[13]。

1.3. 先行研究

How do we judge the translation?
I think we can and should measure and describe the degree of achieved equivalence.
(Willis Barnstone)[14]

翻訳はまさに、一つの言語から他の言語へメッセージを移し変える行為である。原典は元の言語の規則に従って作成されるが、翻訳は原典の言語的な特性と言葉の意味を尊重しながら、目標言語の規則に従って作成されている。そして、原典と翻訳は、なんらかの形で「等価」でなければならない。従って、翻訳の過程で最も重要な概念は等価性(equivalence)の概念である。それでは「等価性」とは何であろうか。Mary Snell Hornby[15]は、翻訳学に関する様々な文献を調べた結果、58 の異なった等価性の概念を見つけた。この数の多さは、等価性の現象に関して学者たちの間に色々な意見が存在することを立証する。以下の分析では原典と翻訳の対照研究における等価性の主要な範疇に焦点を合わせる。

[13] Henrik Gottlieb (2005) (p.17)
[14] Willis Barnstone (1993) (pp.11-12)
[15] Γιώργος Κεντρωτής (2000) *Θεωρία και πράξη της μετάφρασης*, Δίαυλος, Αθήνα (p. 265)

単独で単語だけを考えるなら、L1 (原典の言語)の単語と L2(目標言語)の単語において、多くの場合に意味が等価でないことは、明らかである。同じ指示対象（外延）を指す単語でも、言語が違えば、意味内容の範囲（内包）がずれることがある。おそらく、技術的、科学的な分野において標準化された専門用語のみが、等価の意味を有すると言える。つまり、それらの単語は一対一の対応を作っている。しかし、これらの用語でさえ、文章に挿入される時や、論述の一部に組み込まれる際には、新しい意味合いを帯びる場合がある。翻訳が巧みになされた時に、目標言語の読者は、それを有効な原文の実例として受容し、そして、その人が理解するべき内容を再現させることができる。

原典の文章における意味と目標言語の文化のパターンが、翻訳者によって独特な形で結び付けられることにより、翻訳を通じたコミュニケーションが可能になる。では、この翻訳を通じて新たに書かれた文章は、原典の言語の文章とどのような関係にあるのだろうか。我々は、新しい文章が「原典の代役を果たす」ということができる。原典の言語をよく知らない読者には、原典がもっていた情報をそのままの形で伝達することができない、しかし、翻訳された文章は、原典が伝達しようとしていた情報を、別の言語を媒介にして目標の読者に伝達する。表面上は文章が異なっていても、また、意味構想が変更されたとしても、原典が書かれた言語と目標言語の両方のテクストは、本質的には同様の対象について、読者に向けて同一の情報を送るのである。コミュニケーションという観点から等価性の概念を定義するなら、このように言えるのではないだろうか。

すなわち、等価性は原典の効果とコミュニケーションの有用性の関係から成り立つ。翻訳学者は、言語学的な対応関係を測定することだけでは、等価性の有無を決定することはできない。翻訳されたテクストを用いる者は、コミュニケーションの基礎的な有用性に基づいて翻訳を受容したり、拒絶したりすることによって、等価性の有無を判断する。

問題は、L2 の単語の言語的意味が、L1 の単語と実際に同じであるかどうかと言うことではない。テクストとして同じ意味であると理解することで、コミュニケーションが活性化されるということが重要なのである。そして、等価性とは、形式的な「一致」ではない。翻訳されたテクストは、他の言語で書かれたテクストと完全に等しい意味内容

を表すものではない。なぜなら、意味内容は個別の言語（ラング）に内在的であり、それをそのまま他の言語に移し変えることはできないからである。

等価性という概念については色々な理論がある。Snell-Hornby[16]によると、現在、翻訳における等価性という概念が曖昧になりつつあり、ほとんど役に立たない概念になっているという。さらに、彼女は、現在の翻訳理論が原本に対する説明的・遡行的な理論ではなく、目標文章に向かっての予想的な理論になっていると指摘している。

Kade は、翻訳における等価性に関して新しい区分を提唱した。等価性には、「完全な等価性(total equivalence)」「選択的な等価性(optional equivalence)」「近似的な等価性(proximate equivalence)」「無効な等価性 (null equivalence)」の四つのタイプがあるというのである。

「完全な等価性」とは、原本言語（SL）と目標言語（TL）の両方に同じ意味の言葉が存在する場合の等価性である。名前、専門用語、数字などがこれに当たる。「選択的な等価性」とは、原本の単語の意味が目標言語で複数の単語に対応する場合の等価性である。その場合には文脈とコミュニケーションの状況によって正しい意味の単語が選択される。「近似的な等価性」とは、原本の単語の意味と完全に等価な単語が目標言語にはなく、部分的に等価な単語しかない場合の等価性である。その場合には、翻訳文章に注釈をつけて説明する。「無効な等価性」とは、原本の単語の意味と等価な単語が目標言語にない場合である。その場合には、目標言語にはない外来の単語を使うことになる。

Kade は語彙的な等価性に関する理論として、次のような定性的かつ定量的なモデルを作った。(Kade 1968、p.77)

- 一対一の等価性(one-to-one equivalence): SL の単語の意味＝TL の単語の意味
- 一対部分の等価性(one-to-part-of-one equivalence): SL の単語の意味≈ TL の単語の意味
- 無効な等価性(null equivalence): SL の単語の意味≠TL の単語の意味

[16] Mona Baker (ed.) (2001) *Routledge Encyclopedia of Translation Studies*, Assist. Kirsten Malkjær, Routledge, London & New York (p. 80)

House によると[17]、翻訳文章が原本と同じ役割を果していれば、その翻訳文章は原本と等価であるという。House は、翻訳には次の二つのタイプがあると言っている。

1. 明白な翻訳(Overt Translation): SL と TL が文化的に緊密な関係にある場合の翻訳である。その場合には明白な翻訳のストラテジーが使える。
2. 潜在的な翻訳(Covert Translation): SL と TL が文化的に疎遠な関係にある場合の翻訳である。その場合には、原本が文化特定的（culture-specific）のものでなければ、密かな翻訳のストラテジーが使える。潜在的な翻訳は、明白な翻訳と比べると機能的な等価性が難しくなる。そこで、翻訳者は自分の cultural filter を通して SL と TL の文化的な相違点を翻訳することになる。

Vinay と Darbelnet は、等価性は原本のコミュニケーション状況を再生する方法として使われると言っている。通常、等価性は連辞(syntagmatic)レベル(表現、諺、格言などのレベル)にある。Vinay と Darbelnet は「適応(Adaptation)[18]」と「明示(Explicitation)[19]」という専門用語を提示した。「適応」は、原本の文化的要素が目標言語の文化に存在しない場合に用いられる手法である。「明示」は、「暗示（implication）」の反対の概念である。

Hatim と Mason[20]は、Halliday の理論に影響を受けて、文章の要素についての翻訳のストラテジーを検討し、文章の「ダイナミックな要素」と「安定的な要素」についての理論を提唱した。翻訳者は、原本の安定的な要素では文字通りの翻訳ができるが、ダイナミックな要素では、色々な難しさを克服するために、翻訳ストラテジーとして工夫された比喩的な方法を選択しなければならないという。

Hatim と Mason[21]は「対照分析」(Contrastive Analysis)についても述べている。対照分析は，翻訳のプロセスで使うための分析ではなく、翻訳された文章を分析するための理

[17] Mona Baker (2001) (p.199)
[18] Ibidem (p. 6)
[19] Ibidem "*Explicitation* というのは、'the process of introducing information into the target language which is present only implicitly in the source language, but which can be derived from the context or the situation'であり、*implication* という概念は 'the process of allowing the target language situation or context to define certain details which were explicit in the source language" である。(p.80)
[20] Jeremy Munday (2001) *Introducing Translation Studies: Theories and Applications*, Routledge, London & New York (p.101)
[21] Mona Baker (2001) (p.78)

論である(Hatim&Mason, 1990)。対照分析をするときは、言語、社会、文化などさまざまな要素を考慮に入れなければならないので、翻訳作業それ自体には対照分析をほとんど利用できない。

Catford によると、二つの文章の等価性は両方の文章を比較分析した結果として決まるという。Catford は、その分析方法について、言語の微小システム(micro-system)を研究して、「形式的な等価性」を提唱した。例えば、フランス語の「oui」と英語の「yes」の相違点として、「oui」が「si」と「non」の二つの反意語を持つのに対して、「yes」は「no」という一つの反意語を持つだけであることを示した。しかし、こうした Catford の等価性に関する理論は翻訳には適用できないと思われる。翻訳に適用できる理論とは、等価性を比較分析する理論ではなく，形式的な等価性と意味的な等価性を探すための理論でなければならないからである。

Catford によると[22]、原本と翻訳文章の指示対象(referent)が似ていれば、翻訳の等価性(translational equivalence)があるという。Catford は、等価性について「形式的な等価性」と「文章的な等価性」の二つを挙げ、次のような図表を提示した。

1. 形式的な対応(formal correspondence[23]):言語の要素の間の仮定的な対応を示す図表(langue)
2. 文章的な等価性(textual equivalence[24]):原本と目標文章の観察された要素の間の等価性を示した図表(parole)

Catford は[25]、翻訳された文章の広さについて、次の二つの用語を提示した。

1. 全翻訳(full translation):原本の全部の要素が目標文章に翻訳される。
2. 部分的な翻訳(partial translation):原本の幾つかの要素が目標文章に翻訳され，残りの要素は翻訳されない。

Catford は、翻訳を言語的なレベルで次の二つに区別した。

[22] Mona Baker (2001) (p.78)
[23] Ibidem “any TL text or portion of text which is observed on a particular occasion… to be the equivalent of a given SL text or portion of text” (p.229)
[24] Ibidem “any TL category which can be said to occupy, as nearly as possible the “same” place in the “economy” of the TL as the given SL category occupies in the SL” (p.229)
[25] Ibidem (pp.121-122)

1. 全体的な翻訳(total translation):全てのレベルで原本が目標言語へ翻訳され、文法的、語彙的な等価性が成立する翻訳。
2. 限定的な翻訳(restricted translation): 限定的なレベルだけで等価性が起こる翻訳。限定的な翻訳には二つの区分がある。音韻的な翻訳(phonological translation)と書記素的な翻訳(graphological translation)である。

Catford は、文法的で音韻的なレベルの翻訳を次の二つに区別した。「同ランクの翻訳（rank-bound translation）」と「無制限の翻訳（unbounded translation）」である。「同ランクの翻訳」とは、原本と目標文章の要素（例えば、形態素、単語、文など）の中で同じランクの要素の間で翻訳するものである。「無制限の翻訳」では、翻訳者は原本と異なるランクの要素の間で翻訳することができる。

Catford は[26]、翻訳専門用語としてのシフト(shift)という概念について述べている。シフトには、「レベル・シフト(level shift)」と「カテゴリー・シフト(category shift)」の二つがある。原本の単語と等価な目標言語の単語が異なるレベルに属する場合にはレベル・シフトが起こり、翻訳者が原本のカテゴリーを変更して翻訳する場合にはカテゴリー・シフトが起こる。

Jakobson は[27]、「言語内の翻訳(intralingual translation)」、「言語間の翻訳(interlingual)」、「意味的な翻訳(intersemiotic)[28]」の三つの翻訳区別について説明し、それらの等価性と意味という概念について述べている。彼は、“there is ordinarily no full equivalence between code-units”(Munday, p.36)と述べ、原本と目標文章では言語体系が異なるのだから、 code-units も異なるのが通常であると述べている。このような相違点は、意味、名詞の性や動詞のアスペクトのレベルでも起こっている。Jakobson によると、

[26] Mona Baker (2001) (p.229)
[27] Jeremy Munday (2001) (pp.36-37)
[28] “These three kinds of translation are to be differently labeled: (1) intralingual translation or rewording is an interpretation of verbal signs by means of other signs of the same language, (2) interlingual translation or translation proper is an interpretation of verbal signs by means of some other language (3) intersemiotic translation or transmutation is an interpretation of verbal signs by means of signs of nonverbal sign systems” Roman Jakobson “Linguistic Aspects of Translation” In Schulte, R. & Biguenet, J. (eds.) (1992) *Theories of Translation*, University of Chicago Press, Chicago & London (p.145)

「違いの中の等価性」(equivalence in difference)という概念が全ての翻訳の特徴であるという[29]。

Nida は[30]、翻訳が成功するための必要条件として次の四点を挙げている。

1. 意味があること
2. 原本の精神と同じであること
3. 分かりやすい書き方
4. 受容性が原本と同じであること

この成功の必要条件は、翻訳された文章を判断するためではなくて、その文章を社会的・言語的に評価し解釈することが目的である。

Newmark は[31]「意味の翻訳」と「コミュニケーションの翻訳」という専門用語を提案した。「意味の翻訳」と「コミュニケーションの翻訳」は、それぞれ、Nida の「形式的な等価性」と「ダイナミックな等価性」に似ている。「意味の翻訳」の場合には、原本言語の文化が中心になるが、「コミュニケーションの翻訳」の場合には、目標文章の読者が中心になる。Newmark によると[32]、翻訳者が母語かよく使っている言語へ翻訳するときは成功するという。

Newmark は「適応(adaptation)[33]」と「補償(compensation)[34]」という用語についても述べている。「適応」は、翻訳者が目標文章の読者の知識に基づいて翻訳することである。「補償」は、翻訳者が原本の文にある暗喩、頭韻などを理解できない場合に、別の比喩的な表現を探して補うことである。

[29] Mona Baker, “languages differ essentially in what they must convey and not in what they can convey” (2001) (p.275)
[30] Jeremy Munday (2001) (p.42)
[31] Ibidem (pp.44-45)
[32] Mona Baker (2001) (p.64)
[33] Ibidem (p.6)
[34] Ibidem (p.39)

1.4. 文化的テクストの翻訳についてのアプローチ

文学の翻訳において重要なのは、原典に忠実な翻訳か、それとも創造に基づく翻訳かという問題が古くからある。文学の翻訳には、翻訳者が原典の表現を尊重しながら、目標言語の適当な表現を選ぶということが必要になる。そして、文学的なテクストを翻訳することは、原典を模倣しながら創造的な複製を行うことである。その際に翻訳者は翻訳の方針ともいうべきストラテジーを作動させることが多いが、一般的に、翻訳者によって選ばれたストラテジーは明示的に表わされてはいないので、翻訳されたテクストを検討することによって、具体的に採られたストラテジーを推論するしかない[35]。文学的なテクストの翻訳では、他のテクストの翻訳に比べて、起点言語テクスト（SLT） と目標言語テクスト（TLT） の間の等価性を達成するために、選択の過程と優先順位の過程が関連してくる。つまり、原典が含むあらゆる要素を目標言語に移し替えることはできないので、そのなかで翻訳すべき要素を選択する必要があるし、それらの間に衝突が起きる場合は、どの要素を重視するかという優先順位を付ける必要も出てくる。これらの過程と翻訳された文章の形式を理解するためには、SLT と TLT の間の等価性についてのアプローチが必要になる。そうすることによって、研究者は、翻訳されたテクストの誤りだけでなく、翻訳者の動機も解明できる[36]。しかし、文学的文章の翻訳の評価には、エラー分析、言い換えれば誤りの分析、は使えない。エラー分析は翻訳評価の重要な部分ではあるが、Van de Broeck によれば、研究者は、エラー分析を使いながら、同時に翻訳されたテクストを批評することはできないという[37]。

こうした点を考えて、本論文の方法として、Delisle、Tatilon、Nida と Baker という研究者の理論を採り上げたいと思う。彼らの理論によれば、巧みな翻訳を行うために、翻訳者はさまざまなレベルで原典から提供される情報をまとめて、目標言語に合わせてこの情報の翻訳をしなければならない。言い換えれば、彼らの理論によると、原典の文体

[35] David Horton (1994) “Literary Translation Between Equivalence and Manipulation: Lawrence Norfolk’s Lemprière’s Dictionary in German”, Neophilologus 78, Kluwe Academic Publishers, Netherlands (p.180)
[36] Ibidem (p.181)
[37] Raymond Van de Broeck “Second Thoughts on Translation Criticism: A Model of its Analytic Function” In *The Manipulation of Literature*, ed. By T. Hermans, 54-62 (p. 58) In David Horton (1994) (p.183)

や語用論的特徴だけではなく、その背景となる文化と社会的な情報について理解することで、翻訳者は翻訳を成功させることができる。

1.5. 方法論

私は、Delisle、Tatilon、Nida と Baker の理論を使用しながら、起点言語テクストと目標言語テクストの関係を分析したいと思う。従って、分析を始める前に、その四つの理論の主な特徴に関して説明することが必要になる。

15.1. Delisle

Delisle[38]によれば、翻訳過程には三つの段階がある。一番目の段階では、翻訳者が原本の作家、読者、内容、機能と読者に関する情報を集める。二番目の段階では、辞書を使わないでテクストを読んで、文章全体の流れとそれぞれの言葉の意味を理解する。そうした理解をしながら読むと、テクストの特性と難しさが分かってくる。三番目の段階では、参考文献などを使って、原本の曖昧な意味とか分かりにくい部分を理解できるものにする、というものである。

繰り返すが、最初に起点言語テクスト（SLT） の特性を理解することが重要である。Delisle によれば、“理解”するということは、原本の言い換え(paraphrase)ではなく、言葉の文脈上の意味、テクストの言外の意味と文体について理解することである。言い換えれば、原典の作家の“Vouloir Dire”［言おうとしたこと[39]］について理解することである。そうした理解をした上で、翻訳者は原典を目標言語へ翻訳する。そのときに、翻訳者は辞書、他の文献、専門用語のデータベースなどを利用する。この段階での翻訳は最初の下書きであるので、翻訳者は夫々の単語を翻訳するのではなく、文脈のレベレで翻訳しなければならない。もちろん、原典を尊重しなければならないが、同時に、目標言語の規則に従わなければならない。そのあと、翻訳者は自分の翻訳から距離を置くことが必要になる。翻訳過程の三番目の段階は、“立証の段階”と呼ばれる。翻訳者は

[38] Jean Delisle (1998) *La traduction raisonnée,* Presses de l'Université d'Ottawa, Québec (pp.84-88)
[39] 原本の作家の意志

もう一度、自分の翻訳を読み直して、特に数、日付、単語の書き方、句読点を確認する。最後に読むときの目的は、自分の翻訳を批評することである。

Delisle[40] は、原典の難しさについて、「翻訳者は原典の文化的、言語的、社会的、文法的、文体的、印刷上の特性について理解すべきである」と言っている。そうした理解をするためには、翻訳者は翻訳過程それ自体と A 言語・B 言語について深い知識を持たなければならない。

さらに、翻訳過程には三つのストラテジーがある[41]：

- 照応(anaphora)：全てのテクストには単純に照応する単語がある。例えば、数、日付、名前、タイトル、数学的な記号、郵便番号、専門用語などの単語と記号は anaphora の要素として考えられる。
- 暗記(memorization)：Anaphora の単語とは文脈の規定を受けない言葉であるが、それとは逆に、テクストには文脈上の意味を持っている単語がある。そのような単語を翻訳するために、翻訳者は自分の蓄えた知識、即ち、暗記された単語を使用している。翻訳者は自分の知識を使いながら、B 言語への翻訳をしているのである。
- 複製(reproduction)：辞書にのっている全ての A 言語の単語が B 言語の単語と等価的ではないので、翻訳者は自分の知識と想像力を働かせなければならない。そして、自分の知識を使って、目標言語への翻訳をしようとする。原本の翻訳の仕方には色々ある。

時には、文章にある単語の意味が文脈によって決まることがある。そのような場合には、単語の意味がそれぞれの文脈で違った意味になるのが普通である。A 言語から B 言語への翻訳をする場合に、翻訳者は原典にある単語と等価的な B 言語の単語を探す。しかし、等価性というストラテジーは、単語の翻訳だけではなくて、文の翻訳のためにも使われる。翻訳者は、特に、原典の作家の“Vouloir Dire” について理解し、それを目標言語で表現しようとする際に、等価性のストラテジーを使う。翻訳者は作家ではないが、翻訳は原本のコピーではないので、翻訳者なりの想像力を働かせなければならな

[40] Jean Delisle (1998) (pp.94-95)
[41] Ibidem (pp.122-128)

いのが普通である。そのためには、翻訳者は原典の作家の考え方を理解して、新しい文章を書くつもりで翻訳しなければならない。しかし、それには色々な困難を克服しなければならない。例えば、原典の表現の仕方を目標言語にどのように移し替えるか、などの問題である。

Delisle[42]は「節約(economy)」という点についても言及している。彼によれば、翻訳には三つの節約のタイプがあるという。それらは「集中」(concentration)、「包含」(implicature)と「簡潔」(brevity)である。要すると、簡潔な表現にして、言外に意味をもたせることである。翻訳を“経済的”にするためには、冗長な語句を使わないで、原本通りの表現をするとうまくいく場合がある。もし、原本に比べて翻訳された文章が長たらしければ、翻訳者は表現方法の節約をしなければならない。翻訳者の目的は読者に原典の作家のメッセージを伝達することだからである。そのためには、文章の結びつきと首尾一貫性を守る必要がある。だから、Delisle[43]は、翻訳者が「節約」というストラテジーに従って、冗長な、あるいは曖昧で不明瞭な表現を避けるべきであると言っている。

つまり、翻訳における冗語句や長たらしい表現は、通常、翻訳者が原本の意味と目標言語の違いについて無知であることや、原典に忠実なあまり訳す必要のないことまで正確に翻訳しすぎることを表している。

1.5.2. Tatilon

Tatilon[44]によると、原典の情報は翻訳を通じて異なる言語の読者に伝達されると言う。言い換えれば、目標言語によって読者に提供される情報は原典に含まれる情報と同じであるべきであるということである。また、Tatilon は、自分の著作『翻訳――翻訳の教育学のために (Traduire pour une pédagogie de la traduction) 』の中で、翻訳で取り扱うべき四つの情報について説明している。それぞれの情報の特性については、次のように区別している。

[42] Jean Delisle (1998) (pp.229-231)
[43] Ibidem (pp.345-350)
[44] Claude Tatilon (1986) *Traduire pour une pédagogie de la traduction*, GREF, Toronto (pp.7-13)

- 前方照応の情報(anaphoric)
- 語用論的な情報(pragmatic)
- 論理的な情報(dialectic)
- 文体的な情報(stylistic)

語用論的な情報のなかには、テクストのタイプと機能に関する情報のカテゴリーも含まれる。翻訳されるテクストがどのようなジャンルに属するのか、それはどのような目的のため書かれているのか、どのような読者を想定しているのか、などによって、テクストの情報の扱い方は異なってくる。

また、論理的な情報のカテゴリーの中には、社会的、地域的、通時的な情報も入る。Tatilon[45]は、とくに文化や宗教をあつかう文章のなかに現れる社会的、文化的な情報は翻訳しにくいと言っている。なぜなら、それらの情報は、個々の言語共同体に特有のものが多いからである。このようなテクストを翻訳するときには、翻訳者は社会的な情報を伝達するということ以外に、言語の差異に関わる別の障害を克服しなければならない。例えば、語彙の属する意味領域の違いや、専門用語の正確な意味内容を理解しなければならない。特に、語彙のレベルでは[46]、ひとつの単語が多くの意味を含ませて使われているときには、原本の忠実な翻訳が難しくなる。

さらに、統語のレベルでは[47]、起点言語に特有の文法的特徴が理由となって、翻訳者が目標言語に文法的な意味を正確に移し替えられないことが起こる。例えば、日本語では、動詞だけからは主語の性別が分かりにくいことがあるが、主語の性別が文法的関与性をもつ言語に翻訳するとき、このことは大きな難点となる。最後に、文体的なレベルでは、翻訳者は原典と目標言語のそれぞれに特有の表現方法について気を使わなければならない。例えば、A 言語に特有の表現法(略語や慣用句など)を B 言語に翻訳するときに起きるような問題である。

[45] Claude Tatilon (1986) (pp.21-27)
[46] Ibidem (pp.45-55)
[47] Ibidem (pp.61-69)

まとめると、Tatilon[48]によれば、翻訳の過程には三つの段階があるという。まず、翻訳者が原典の情報を集めて、それを理解する。二番目の段階は、目標言語で文章を書くことである。最後に、翻訳者は翻訳されたテクストを原文と照合する。言い換えれば、翻訳者が原典の機能と作家の意志を理解したうえで、その意味内容を B 言語に翻訳して、目標言語での文章が正しいかを確かめる。翻訳のストラテジーは、原典の特性、つまり原典のアイデンティティを守る、起点言語と目標言語のそれぞれの文化の特徴を理解する、目標言語で自然なテクストを書くということである。

一般的に、言語を学ぶ学生の能力を向上させるために、翻訳された文章が教材として使われている。特に、学生は、原典と翻訳を照合することによって、A 言語と B 言語の差異や、A 文化と B 文化の特性を理解するようになる。

1.5.3. Nida

原典のテクストを理解することは、目標言語への翻訳を成功させる鍵である。Nida[49]によると、翻訳者は言語を翻訳するのではなく、テクストを翻訳しなければならないという。さらに、翻訳者の一番大切な技能は、原典テクストの意味を正しく理解することである。同時に、翻訳者は、異言語間のコミュニケーションに関しての技能を持っていなければならない。

昨今、翻訳者は言語の専門家としての教育を受けなければならないと考えられている。しかし、翻訳者が異言語間のコミュニケーションを上手に行なうことができるためには、長期のトレーニングをしなくても、 他の翻訳者によって解決された形式的な問題を勉強することによって、自分の知識を広め、翻訳者としての能力を獲得できることが多い[50]。つまり、翻訳者が原本言語から目標言語への意味の転移を可能にする「異言語間のコミュニケーション能力」を持つためには、翻訳の専門家による指導と実際に翻訳を経験することが必要になる。

[48] Claude Tatilon (1986) (pp.133-139)
[49] Eugene A. Nida (2002) *Contexts in Translating*, John Benjamins, Amsterdam (p.3)
[50] Ibidem (p.4)

また、Nida[51]によると、 翻訳の教科書には上手にできたテクストだけが載っているので、翻訳を勉強する学生は、実際の文章にあたって翻訳するという練習をそれほど積んでいない。しかし、Nida はそれが翻訳研究には必要であると言っている。とくに、学生は自分で翻訳をすることによって、テクストを編集することを学べる。翻訳の学生はテクストを言語学の観点から分析することを学んでいるが、彼らは翻訳者としてテクストの意味、即ち原典のメッセージの意味を理解しなければならない。形式的な構造を理解することは大切ではあるが、まず、言葉の意味を理解することを最優先しなければならない。

さらに、もし原典がよく知られているテクストであれば、既に刊行されている翻訳が存在する可能性が高い。例えば、古代ギリシャ語とラテン語のテクストの場合などがそれにあたる。こうした場合には、 新しい翻訳はしばしば批判される。

多くの翻訳論は「言語」の観点から論じられている。しかし、翻訳というのは、二つの共同体の言語の接触であるから、当然、社会的な特性も持つことになる。このような考えのもとに、今まで、社会的な観点での翻訳論も行われてきた。Nida による翻訳論もその例である。

特に、Nida[52]は聖書翻訳を中心にして翻訳論を考えてきた。Nida は、翻訳が社会的な要因によって左右されると考えた。翻訳に対する Nida の関心は、他の共同体にキリスト教を広めたいという意志から発生した。聖書を翻訳しながら、色々な共同体と接触することを通して、Nida は、等価性の概念に基づく翻訳の一般的な理論を提示した。Nida によれば、等価性には二つのタイプがある。それは「形式的な等価性」と「ダイナミックな等価性」の二つである。「形式的な等価性」にもとづく翻訳とは、目標言語に原典の形式的構造を再生するということであり、原典中心に行われる翻訳のことである。一方、「ダイナミックな等価性」にもとづく翻訳とは、原本の意味を別のコンテクスト基づいて再生するということであり、目標言語の読者に向かっての翻訳のことである。

[51] Eugene A. Nide (2002) (p.9)
[52] Eugene A. Nida In Robert Larose (1992) *Théories contemporaines de la traduction*, éd. Presses de l'Université du Québec, Québec (pp.77-79)

また、Nida は全ての言語に共通する類似点について説明している。Nida によると、全て言語には、「時間」・「方法」・「空間」の表現があり、「必然の関係」(例えば、「原因」と「結果」の関係)についての表現もある。さらに、全ての言語には、「事件」・「関係」・「もの」・「曖昧な概念」という四つの意味的な区別がある。翻訳者はこのような類似点についての知識を持っていなければならない。また、言語の間に形式的な類似点もある。例えば、全ての言語では、受動態に比べると能動態の方が単純であり、 能動態から受動態が発生したというのである。このことは、異なる言語の間にもある種の形式的一致が起こる可能性を示している。

1.5.4. Baker

Baker[53]は、単語、文法、文の構造・結合などのレベルにおける等価性を検討し、「文章的な等価性(textual equivalence)」の概念を提示した。それは原本と目標文章の情報についての等価性のことである。同時に、彼女は、翻訳者によって情報が追加された翻訳の例を挙げている[54]。それは、文化的な不足を補うためのストラテジーである。Baker によれば、翻訳者は原本の意味を理解したうえで、目標言語の文章に新しい情報を追加することによって、文化的な不足を補うことができるというのである[55]。

さらに、Baker[56]は非等価性(non-equivalence)という概念について述べている。通常、非等価性は意味の下位領域(sub-field)で発生する。意味の全体的な領域(field)では、言語間に等価性が存在する可能性が高いが，原本言語の意味の下位領域(例えば、「動物」の意味の領域)が不明確である場合には、その下位領域で原本言語と目標言語の間で相違点が多くなり、非等価性が発生するのである。Baker[57]は非等価性が発生する場合として次の１１の項目を挙げている。

1. 文化的な概念(culture-specific concepts)

---

[53] Mona Baker (2001) (p.77)
[54] Ibidem (p.289)
[55] Ibidem “this means that one may either omit or play down a feature such as idiomaticity at the point where it occurs in the source text and introduce it elsewhere in the target text” (p.39)
[56] Mona Baker (1992) *In Other Words: A Coursebook on Translation*, Routledge, London & New York (p.18)
[57] Ibidem (pp.21-26)

2. 原本言語の概念が目標言語で語彙化(lexicalized)されていない場合
3. 目標言語の単語に比べて 原本言語の単語が意味的に複雑である場合
4. 原本言語と目標言語の意味的な区分が異なっている場合
5. 目標言語に上位語(super-ordinate)がない場合
6. 目標言語に下位語(hyponym)がない場合
7. 原本言語と目標言語の間で身体と人間に関しての概念が異なっている場合
8. 表現的な意味の相違点
9. 形の相違点
10. 色々な形の使い方と使用頻度が違っている場合
11. 原本言語の外来語の場合

次に、Baker[58]は、慣用語(idiom)を翻訳する場合の問題点として、次の４点を挙げている:

1. 原本言語の慣用語と等価な慣用語が目標言語にない場合
2. 目標言語では、原本言語と似た慣用語があるが、異なっている文脈と状況などで使われている場合
3. 原本の慣用語が比喩的(figurative)な意味と字義通り(literal)の意味の両方を持っている場合
4. 慣用語の使用に関しての規則が違っている場合

翻訳者は、最初に、原本を読んで理解し、次に、目標言語で“新しい”文章を描くために原本の文章のメッセージを分析する。その原本の分析方法として、Baker は[59]次の２つの方法を提示している。

1. 話し手指向(speaker oriented)の分析：話し手が伝えようとしているメッセージのテーマなどについての分析
2. 聞き手指向(hearer oriented)の分析：聞き手にとってメッセージの情報が既知か未知かというような分析

[58] Mona Baker (1992) (pp.68-71)
[59] Ibidem (p.144)

Baker は、翻訳の有効性について次のように述べている。翻訳者は、語用論的な等価性を求めるならば、原本の文章が全ての社会で有効であると考えてはいけない。それぞれの社会、それぞれのグループ、それぞれの集団によって世界観が違うからである。その考えに従えば、読者が翻訳された文章に示された事実を理解できるかどうかによって、その文章の受容性を判断しなければならない。

1.6. 目的

当論文の目的は、ギリシャ語の原本と日本語への翻訳文を比較することによって、ギリシャ人と日本人の考え方や価値観の相違点と類似点を解明することである。そのための実証研究の対象として、アリストパネースの喜劇『鳥』『騎士』『富の神』『平和』『蜂』に描かれているイソップの寓話を選定する。それらの作品のギリシャ語の原本と近代日本語への翻訳文を比較し、原本の読者であるギリシャ人と翻訳文の読者である近代日本人の考え方や価値観の相違点と類似点について分析する。

１６世紀にポルトガル人の宣教師が日本に来て、「伊曽保（イソップ）物語」を伝え、「天草本」として印刷されたのが日本での最初の翻訳本であった。それ以来、ギリシャの色々な文芸作品が日本語に翻訳されてきたが、イソップの寓話が一番多く翻訳され、日本人に一番よく知られるようになった。翻訳されたイソップの寓話は日本の学校の教科書に使われ、日本人は子どもの頃からイソップの寓話を聞いて育ってきた。ギリシャでも、古代から、高い教訓を含んだイソップの寓話が子どもたちの教育のため使われてきた。その結果、イソップの寓話はギリシャ人によく知られるようになり、ギリシャ人にとってイソップの寓話は皆が知っていなければならないものになった。例えば、アリストパネースの劇では、イソップの寓話を知らない人を無学な人として描いている。このように、日本とギリシャでは、昔からイソップの寓話が社会の大切なものになってきた。そういう歴史に基づいて、当論文の実証研究の対象としてイソップの寓話を選ぶことにする。また、イソップの寓話の原本は古代ギリシャ語で書かれているが、当論文の目的が「近代日本人の言語と考え方」について研究することにあるので、イソップの寓話の日本語翻訳文は近代日本語で書かれたものを選ぶことにする。

そこで、古代ギリシャ語から近代日本語への翻訳のモデルを作るために、原本と日本語訳の比較・分析を行うための方法論として、翻訳に関する Delisle、Tatilon、Nida、Baker の４つの理論を使うことにする。この４つの理論は、英語、フランス語などのヨーロッパ言語からの翻訳が中心になっているが、ギリシャ語から日本語への翻訳にも適用できると思われる。

原典から提供される情報に関する理論と翻訳のストラテジーについての理論を使うことによって、ギリシャ人と日本人の考え方が分かると思われる。例として、『女と雌鶏』というイソップの寓話の英語と日本語への翻訳を見ることにする。

原本 Αίσωπος (1997) Μύθοι, Μτφ. Αγνή Λιάπα, Αθήνα (p.96)	**γυνὴ καὶ ὄρνις** γυνὴ χήρα ὄρνιν ἔχουσα καθ᾽ ἑκάστην ἡμέραν ὠόν τίκτουσαν ὑπέλαβεν, ὅτι, ἐὰν πλείονα αὐτῇ τροφὴν παραβάλῃ, καὶ δὶς τῆς ἡμέρας τέξεται. καὶ δὴ τοῦτο αὐτῆς ποιούσης συνέβη τὴν ὄρνιν πίονα γενομένην μηκέτι μηδὲ ἅπαξ τεκεῖν. ὁ λόγος δηλοῖ, ὅτι πολλοὶ τῶν ἀνθρώπων διὰ πλεονεξίαν περιττοτέρων ἐπιθυμοῦντες καὶ τὰ παρόντα ἀπόλλουσιν.
英語への翻訳 Zipes Jack (ed) (2004) Aesop's Fables, Intro. Sam Pickering, Penguin Books, London (p. 19)	**The Women and the Fat Hen** A woman owned a hen that laid an egg every morning. Since the hen's eggs were of excellent quality, they sold for a good price. So, at one point, the woman thought to herself, "If I double my hen's allowance of barley, she'll lay twice a day". Therefore, she put her plan to work, and the hen became so fat and contented that it stopped laying altogether. Relying on statistics does not always produce results.
日本語への翻訳	女と雌鶏

中務哲郎訳 (2006) イソップ寓話集、岩波書店、東京 (p. 64)	末亡人が、毎日卵を産んでくれる鶏を飼っていたが、もっと餌を与えたら、日に二回産むだろうと考えた。そこでやってみたところ、鶏はぶくぶく肥えて、日に一度も産まなくなってしまった。 多くの人は貪欲さから余計なものまで欲しがって、現にあるものまで失ってしまうということをこの話は説き明かしている。

「翻訳のストラテジー」という観点から、上に述べた文章を検討することによって、それぞれの言語の基礎にある発想法と読者の考え方の関係を抽出することができると思われる。ギリシャ語原典を読むとき、Delisle と Tatilon の理論によれば，原典の作家の「言おうとすること(“vouloir dire”)」が分かり，原本が意志する情報、即ち，原本の「意志する情報（intentional information）」が「人々は強欲のせいで今持っているものを失ってしまうことがある」ということであることが分かる。つまり、この寓話を読んで、原本の読者であるギリシャ人は「貪欲は悪い結果をもたらす」ということを教えられる。

英語への翻訳を読むと、翻訳者が翻訳のストラテジーとして「ダイナミックな等価性」を選んだことが Nida の理論から明らかである。このストラテジーを使って、翻訳者は原本の意図に関する情報を「Relying on statistics does not always produce results.」と翻訳した。翻訳者は英語の読者が理解しやすいような表現にすることを優先して、文字どおりの翻訳ではなく、一種の意訳を行ったのである。しかしその結果、原典が意志した情報とは異なる情報に翻訳されてしまった。つまり、英語の翻訳文の読者は「仕事はいつも完璧にしなければいけない」ということを教えられる。これはギリシャ語原典にはない情報である。

一方、日本語への翻訳者はストラテジーとして「形式的な等価性」を選んで、原本の「意志する情報」を「 多くの人は貪欲さから，余計なものまで欲しがって、現にあるものまで失ってしまうということをこの話は説き明かしている」と翻訳した。その結果、

原典と日本語の翻訳文によって与えられる教育的な情報、つまり，「意志する情報」は同じになった。

以上のことをまとめると，Delisle、Tatilon，Nida と Baker の理論的な概念に基づく検討から，ギリシャ人の読者と日本人の読者へのメッセージが同じであるのに対し、英語の翻訳文の読者が受け取るメッセージが違っていることがわかる。特に、原典と日本語の翻訳文が道徳的な結論を導いているのに対して、英語の翻訳文では仕事についての語用論的な結論となっている。これらの結論から、各の言語の読者のもつ価値観と優先する基準が分かるだろう。

以上のような考えに基づいて、本論文では，状況的な情報[60](作家と読者の関係についての情報など)、語用論的な情報[61](テクストのタイプと作家についての情報など)、語彙的な情報[62](言葉の意味についての情報など)、文法的な情報[63](テクストの形態的，統語的な情報など)、意志に関する情報(作家の「言おうとすること(vouloir dire)」、文体的な情報[64](テクストのスタイルについての情報など)に基づいて原文を検討する。そして、それらの情報を総合的にとらえて、翻訳が形式的な等価性に基づくものかダイナミックな等価性に基づくものかを検討することにする。

当論文の最終的な目的は、ギリシャ語から日本語への翻訳のやり方を検討することによって，読者の考え方、価値観、世界観を解明することである。つまり、原本のギリシャ語と翻訳文の日本語の形態的、統語的、文法的、語彙的な類似点と相違点を検討することを通じて、ギリシャ人と日本人の社会的なレベルでの考え方，価値観，世界観の類似点と相違点を明らかにすることを目的とする。もちろん、「ギリシャ人」「日本人」は集合名詞であって、そのなかには個人差もあるので、単純に一般化はできないだろう。しかし、テクストのなかに現れた客観的な性質を調べるなら、ある程度の傾向や典型性を示すことはできるのではないかと思う。

[60] Claude Tatilon (1986) (pp.10-11)
[61] Ibidem (pp.9-10)
[62] Ibidem (pp.45-47)
[63] Ibidem (pp.63-64)
[64] Ibidem (p.12)

2. イソップ

2.1. 初めに

寓話は愉快で短い物語であり、架空の人物や植物や擬人化された動物を通じて暗示的に意味を伝えている。すべての寓話の終わりに教育的な結論(“επιμύθιο”)がある。イソップは寓話(“παραβολή”)という文学体系の創設者であると考えられている[65]。

ヘロドトスによると、イソップは「寓話作成者」として知られていた。 また、寓話以外に、イソップは多くの冗談及び逸話を語っていた。イソップは自身の直観力及び深い知識を使用しながら、物語を作成し、それらを聴衆に語っている。そうして、彼はますます有名になり、多くの人々が自分の問題などを解決するために、イソップに寓話を語ることを依頼した。詳しく言えば、寓話は、イソップによってまず物語られただけであって、長い間をかけて、口頭の伝承によって伝えられていて、ヘレニスティクの時代は、本に寓話が収めされた。

しかし、寓話作者イソップを歴史上たしかに実在した人物と考えてよいだけの証拠が残っているのであろうか。この点でイソップの人物については、ホメロスというのが実在の一個人であったのがどうかという、かの有名な「ホメロス問題」とよく似た疑問が絡まっている[66]。言語学の多くの研究者が、イソップは存在しないと考えているにもかかわらず、今まで、イソップが寓話の「父」として考えられている。さらに、紀元前 4 世紀に、Demetreus Phalereus の命令でその伝統的な寓話が書かれた。そして、何人かの研究者は、イソップは自身の寓話の筆者ではなく、彼は、古代ギリシャとか他の国から由来した物語を集め、それらを完成させて、語っていたと言う。

[65] Αίσωπος (1993) *Μύθοι,* Μτφ. Αγνή Λιάπα, Εξάντας, Αθήνα (p.22)
[66] 小堀、桂一郎 (2005)『イソップ寓話』講談社、東京 (p.27)

2.2. イソップの生活

これまでのイソップの生活史には、不思議な点が残っている。サルディス (Sardeis)、リディア(Lydia)の首都、サモス(Samos)、ギリシャの島、メセブリア(Mesembria)、トラキア(Thrace)の古代の居留地、そして Cotiaeum、フリギア(Phrygia)といった各州の主要な都市が、イソップの出生地の候補としてあがっている。多くの人々に知られているのは、彼が奴隷として紀元前 620 年頃に生まれたことである。最初に彼を所有したのは、Xanthus だった。Xanthus は市場で、音楽家や演説家とともにイソップも売られているのを見た。

Xanthus は、「何ができるのか？」と音楽家に尋ねた。すると、彼は、「何でもできます。」と返答した。Xanthus は演説家に同じ質問をした。すると、演説者も、「すべてできます」と返答した。イソップに質問したとき、イソップ自身は「何もできない」と返答した。Xanthus は「何もできない！」と繰り返した。イソップは、「私の仲間の一人は、何でもできると言い、もう一人はすべてができて、できないことは何もないと断言しています。」と答えた。Xanthus は、「お前を買えば、お前は優秀で正直な者であると約束するか？」と言った。イソップは、「私を買わなくも、私はそうなるでしょう。」と答えた。Xanthus が「お前は、逃げないと約束するか？」と尋ね、イソップは、「今までに、籠の中の鳥が逃げようと思っていることを、自分の飼い主に言うのを聞いたことがありますか？」と詰問した。Xanthus はイソップが機知に富んでいることに喜び、彼を買いたいと強く思ったが、彼は黒くて無様な格好をしていたので、迷いながら、「お前の哀れな身なりのせいで、私たちはどこに行っても、人々に野次られる」と言った。イソップは、「哲学者は、男性を身体ではなく、精神によって評価するべきです。」と返答した。これを聞いて、Xanthus はイソップを買った。

Xanthus の妻が口論の末に Xanthus を置いて去ってしまったときに、イソップは知恵を働かせて妻を連れ戻した。彼女が戻ってきたことによって、Xanthus はイソップに、ギリシャの主要な哲学者たちにご馳走をする準備をするように命じた。各が食事を始めたときに、彼らはそれぞれの皿に一つずつ舌肉があることに気づいた。Xanthus は立腹して、説明を求めた。イソップは、「私がこれらの優れた人々の楽しみのために、最も

良い持て成しを考えることを私に命じました。」と返答した。「舌はすべての知識に通じる鍵であり、哲学者のご馳走として、舌肉よりも相応しいものがあるでしょうか？」。

後に、Jadmon がイソップの所有者となり、彼の学識と機知に対する報酬として、自由を与えた。古代ギリシャの自由民の特権は、参政権を認められることだった。彼は、自らの学識によって学者になることを目的として、諸国を遍歴していた。例えば、リディアの有名な王の首都であるサルディスである。また彼は、クロイソスの法廷でソロン、テレス及び他の賢人に会っていた。

クロイソスに招かれて、彼はサルディスに定住し、政治に関わる様々な難しい仕事に携わった。この仕事によって、彼はギリシャの諸々の共和国を訪れた。しかし彼は、引き受けた任務の一つが切っ掛けとなって、亡くなってしまった。市民に配当するための大量のお金がデルフォイに送られたが、市民が強欲であったことに腹を立て、イソップは、お金を配分しないでクロイソスに送り返した。すると、デルフォイ人はこのようなイソップのやり方に立腹し、イソップが役人であるにもかかわらず、彼を処刑した。

確かに、公共の場で、イソップは何人かの知人にデルフォイ人が強欲であることについて、意見を言った。デルフォイの収入源は観光客によってもたらされていたため、行政当局がイソップの考えを耳にして、彼の意見が広く知られるようになれば、デルフォイの崩壊に繋がると悟った。そして、イソップを生かしたまま出国させるべきではないと思い、決心をした。当局は、イソップが神殿から杯を盗んだとして起訴し、軍人を送った。その杯は、イソップの鞄に押し込まれたものだった。イソップが鞄を調べさせたときに、杯が見つかった。彼は崖に連れて行かれ、有罪のため海の中に投げられるという判決を下された。イソップは自分の知恵を働かせて、自分を捕らえている人々に対し、次々と寓話を語ったが無駄だった。結局デルフォイ人は彼を崖に投げ落とした。

2.3. おとぎ話、たとえ話、寓話

おとぎ話、たとえ話及び寓話はすべて、メッセージを伝達する一般的な方法である。夫々は、それ固有の特性によって区別される。

- おとぎ話は、事実を叙述することに基づいて、または想像によって作られている。必ずしも、教訓的な考えと結び付けられているわけではない。
- たとえ話は、字義通りの意味ではなく、暗示的に意味を伝えることが意志されている言葉の使い方である。そのため、読者に対して特別な呼びかけがなされているわけではない。
- 寓話は、おとぎ話やたとえ話と共通する部分もあるし、両者と異なっている部分もある。おとぎ話のように、現実と関係がない物語が含まれている場合もある。また、それはたとえ話のように、架空の人物を通じて、暗示的に意味を伝えている。そして、それはおとぎ話やたとえ話などとはさらに異なり、格言、社会的な義務、または政治上の真実を説明すると言った目的が必ずある。

Fable はラテン語の fabula に由来し、植物や動物などの擬人化された自然の力を扱う短編や民話(人間の本質を考えるもの)である[67]。寓話の目的は教訓を伝えることである。教訓は、話の最後の格言として明確に表現される場合もある。通常は散文の形式で書かれるが、寓話は詩として表されることもある。寓話の目的は人間の欲求を表現することによって、人間の振る舞いを改善させることである。架空の登場人物を用いて、筆者のメッセージを隠すことによって、読者は教えを受ける。寓話の中では、獣、木及び鳥は話すことができる。したがって、筆者が高みから読者を見ていることが、読者には分からない。そして、読者は自分自身に導かれて無意識のうちに、純粋で、立派で、賞賛に値することに共感するとともに、卑劣で、価値がないことに対して憤りをおぼえる。そして、最大限にこの教訓を受け入れるのである。それゆえに、真の寓話作家は、物語作者としての最も重要な役割、つまり読者にメッセージを伝えるという役割を放棄しつつ読者に教訓を受け入れさせるのである。彼は偉大な教師であり、風紀を正す者であり、悪を非難する者であり、美徳を賞賛する者である。これによって、寓話の卓越性が成り立っている。寓話作家は、笑いを生み出すだけではなく、教訓を伝えているのである。

[67] Αίσωπος (1993) (p.21)

2.4. イソップの寓話

寓話はイソップによってまず物語られただけであって、長い間、口頭の伝承によって伝えられた。プラトンの『Phaedon』(60c-d)によれば、ソクラテスはこれらの寓話を覚えていたようであり、獄中でそのいくつかを朗誦した、ソクラテスはイソップが処刑を待っていた時の様子を詩にしている。ソクラテスはイソップの純朴な機知に魅力を感じていたように思われる。修辞学者と哲学者は、生徒たちが彼らの学問に慣れ親しむように、イソップの寓話を練習として生徒に与えた。しかし、寓話に引き付けられる中で、主要な古代の思想家たちは、公共の場で聴衆に対して、何らかの考え方を説得する際に使用する修辞法としてそれらを用いたいと考えていた。

- 紀元前四世紀：Demetreus Phalereus はこれらの寓話の最初の収集をしたと言われている。
- 紀元前四世紀：Aphtonius は、自分の論文で、これらの寓話のいくつかをラテン語の散文へ変換した。
- 1327 年: Maximus Planudes は、コンスタンティノープルの聖職者。およそ 150 の寓話の収集をした。
- 1475－1480 年：Bonus Accursius は Planudes の収集を印刷した。
- 1485 年：Caxton は 5 年の後に Abbey で Accursius の本を英語へ翻訳した。
- 1546 年：Planudes の収集は、いくつかの追加寓話が挿入されて、ロバート･スティーブンズの印刷機から発行した。
- 1610 年：Nevelet は、これらの寓話の三番目の印刷を発行した。
- 1692 年：Roger L'Estrange の 500 寓話の有名な収集が発行された。
- 1722 年：Samuel Croxall は新しい寓話の収集を発行した。
- 1757 年：Newbery の本は "Fables in Verse for the Improvement of the Young and the Old. By Abraham Aesop、 Esq; To which are added、 Fables in Verse and Prose、 with the Conversation of Birds and Beasts、 at their Several Meetings、 Routs and Assemblies. By Woglog、 the Great Giant: Illustrated with a Variety of Curious Cuts、 by the Best Masters" として発行された。

寓話は、道徳もしく価値判断によって教訓を伝えるように設計されている。教訓は、寓話自体の中に含意されている。イソップは、物語と寓話で有名になった。例えば、彼の最も印象的な寓話の一つが、

> 「窓を覗き見しながらオオカミは、羊飼いたちが羊の骨付き肉を食べているの見た。「神よ、彼らはなんという大騒ぎをしているのだろうか。彼らに捕られた自分は、あのようにされてしまうのだろうか。」と叫んだ。」というものである。

このように、イソップは有名になった多くの寓話の中で、動物を用いた。そして、紀元前 5 世紀以降、物語の語り手としてイソップの寓話は、人々の間で語り継がれて非常に人気になった。

西洋の作品の日本語への翻訳はイエズス会によって開始された。イエズス会は 3 つの活動を行った。まず彼らはヨーロッパに学校を設立した。イエズス会の教師は古典的な研究と神学の教育を十分に受けた。また、彼らはプロテスタンティズムが広まるのを止めようとしていた。最後に、イエズス会の 3 番目の任務が非キリスト教徒をカトリックに改宗させることであった。そのため、彼らは、他の国に宣教師を派遣した。宣教師は翻訳されたテクストを通して西洋の考えについての知識を広めた。特に、イソップの寓話は教訓的な考えと結び付けられる物語なので、イエズス会によって翻訳された。

2.5. イソップの言語

イソップの物語は、もともと子供のために語られたものではない。イソップは、分からずやの主人や、自分をみくびり、いじめる人たちを説得する武器として寓話を作っている。その教訓も、抽象的な道徳ではない、権力を持ったない弱者のために実生活の知恵、保身の術を説いている[68]。別の見方をすれば、昔も今もあまり変らない、弱肉強食

[68] 二宮、フサ (2006)『イソップ童話』(下)　偕成社、東京 (p.228)

の掟の支配する現実社会が反映していると言える。その意味でイソップ寓話は、子供にも知的な刺激を与え、厳しい現実の見方を自然に教えるだろう[69]。

従って、イソップは自分の話を通じて道徳、政治及び社会上の真価を明確に述べる。現在、日常的なギリシャ語、口語及び文語で、しばしば古代ギリシャ及びヘレニズムの時代から由来する表現を使用する。そうすれば、小さい頃ギリシャ人はそれらを契機に母語の過去の形式を学び、より古い表現の意味、使用及び由来を理解するので、良識と言語的な力を持つことになる。特に、その表現の使用のおかげで人々の話は活気と活力を持ち、逆に話し手がそのような表現を知らないと、時に後ろめたさを感じる。

そのような表現の五つの例を見てみよう。

- 「Αὐτοῦ γὰρ Ῥόδος καὶ πήδημα」(「ここでロドス島ではないにもかかわらず、跳躍を繰り返してください」)という表現は自分の達成されたものを鼻にかける人々に関して言われている。確かに、『Πένταθλος κομπαστής』(『自慢している男』)というイソップの寓話で話し手はロドス島の 5 種競技の試合で大きな跳躍をしたと主張していたので、相手はその表現を使い、彼に自身の跳躍をもう一回繰り返すように頼んだ。そして、「Αὐτοῦ γὰρ Ῥόδος καὶ πήδημα」という表現は、人々は自身の話が真実であることを立証すべきである、という意味を表す。
- 「Μερίς τοῦ λέοντος」 (「ライオンの分け前」)という表現の意味は、一番大きな分け前である。特に、それは『Λέων καὶ ἀλώπηξ』(『ライオンと狐』)という寓話に由来する。その寓話で、食べ物を分けるときは、兄さんはより大きな分け前を貰ったので、彼の分け前に関して「Μερίς τοῦ λέοντος」という表現が使われた。動物の世界でライオンは動物の王様としていつも先頭に立っており、人間の世界でも大切な人々は先に立っている。
- 「Σὺν Ἀθηνᾳ καὶ χεῖρα κίνει」という表現はミネルバの助けに頼りながら、人々は自分の手を使うべきことを意味する。したがって、彼らは努力するべきである。特に、『Ναυαγός』(『難破漂流した人』)という寓話でアテネ人が船で旅行をしたとき、悪い天候のために彼らの船は崩壊した。その後、船長は泳いだが、恐怖

[69] 二宮、フサ (2006) (p.229)

を感じてミネルバの助けを請うた。それを聞いて、他の人は船長に向かって「Σὺν Ἀθηνᾳ καὶ χεῖρα κίνει」と言った。つまり、古代ギリシャ人にとって、人々は神様の助け以外に自分自身で問題の答えを見つけなければならないのである。

- 「Οἶκος φίλος, οἶκος ἄριστος」という表現の日本語での意味は「家は嬉しい、家こそ都[70]」ものである。ある日、ゼウスは自分の結婚のために、すべての動物に自分の家に来るように命令した。しかしながら、ウミガメはゼウスの命令を無視してしまった。ゼウスはウミガメにその理由を尋ねたとき、ウミガメは彼に「私にとって、一番いたいところは自分の家である」と返答した。その表現は『Ζεὺς καὶ χελώνη』(『ゼウスとウミガメ』)という寓話に由来し、時々人々は贅沢の変わりに質素なものを望んでいるということを明らかにしている。
- 「Ἄλλα λέοντα」という表現の意味は「一匹でも、ライオン」ことである。それは『Λέαινα καὶ ἀλώπηξ』(『ライオンと狐』)という寓話での表現である。その寓話で、狐はライオンに「あなたは一匹しか子供がいないが、私はたくさん子供を産むことができる」と言ってから、ライオンは狐に「一匹だが、ライオンはライオンである！」と返答した。その表現によれば、質は量より大切なものである。

このような表現はイソップの寓話にたくさんある。ギリシャ人はそれらの使用を通じて自分自身の祖先の言語や考え方などを理解することができる。そうすれば、古代と現在の時代の距離は縮まり、今日になってもなお、彼らは自己の過去を忘れてしまうことはないだろう。

「Φύσει ὀρέγεται τοῦ εἰδέναι」(「すべての人間は知るを欲する」[71])というアリストテレスの格言によれば、人々はいつも物事及び事件などの意味を探ろうとし、それらの意味を理解しようとする。もちろん、その人々の望みに関して、各時代に異なる方法がある。例えば、19 世紀の社会学者 Comte[72]の有名な理論によれば、寓話の時代においては、寓話が現実に関しての理解、知識や認識などの方法として使用されていた。寓話の目的

[70] 中塚、哲郎 (2006)『イソップ寓話集・Αισώπειοι Μύθοι』岩波書店、東京 (p. 97)
[71] 出　隆(1968)『アリストテレス全集 12:形而上学』岩波書店、東京　(p. 3)
[72] Auguste Comte (1851) *Système De Politique Positive Où Traité de Sociologie, Instituant La Religion De L' Humanité,* L. Mathias, Paris

は聴衆に感銘を与えることではなくて、誤ったものについて詳しく語ることでもない。そうではなくて、寓話の目的は当時の言語的な方法とデータを通じて現実を理解することである。また、語り手は思想や感情を表現するための素晴らしい方法である詩を用いている。そして、寓話と詩というその言語的な形式は共存している。さらに、それらは表現や理解などの方法であり、それらの表面上の簡潔さのおかげで聴衆はそれらの意味を理解できる。その結果、寓話の基本的な目的は寓話を語る人によって認識された現実の解釈である。

3. アリストパネース

3.1. アリストパネースの生活

アリストパネースの生活に関しての情報は多くない[73]。何人かの研究者によると、彼は紀元前 445 年に Cydathenaus というアテネの地方自治体で産まれた。しかし、他の研究者によるとアリストパネースは紀元前 457 年に産まれたという。彼の両親はアテナイ人であったが、ジノドーラという名の母親はアテネで生まれ、父親はロドスまたはエジプトから来たと考えられている。アリストパネースは子供の時に両親と一緒に、クレールーコイ(klerouchoi[74])として、エギナに住んでいた。紀元前 390 年、あるいは、紀元前 380 年にアリストパネースは死んだ。アリストパネースは、アテネが経済的・文化的に開花した時代に産まれ、アテネとスパルタとの間で紀元前 431 年から紀元前 404 年に起こったペロポンネーソス戦争に負けたという結果をアテナイ人として経験した。

アリストパネースは、戦争によって破壊されたアテネを見て、平和の尊さを知ったのである。戦争中に発生した疫病でアテネの施政者ペリクレスが死ぬと、クレオーンがアテネの支配者になった。クレオーンは、田舎に住むアテナイ人が戦争で疲弊している状況を全く感知せず、戦争の続行を主張して、扇動的な政策をとった。紀元前 411 年にスパラタとの戦いでアテネが敗北し、アテネ・テーベ・アルゴスが三国同盟を結んだ。こうした状況は、アリストパネースの考え方と作品に影響を与えた。アリストパネースは、こうした状況に適切に対応する方法がわかっていた。彼の考えでは、政府が最優先でやらなければならないことは労働者の問題を解決することであった。だから、アリストパネースは風刺を使って、アテナイ人の権利、アテネの民主主義とギリシャ人の間の平和を守ることが政府の責任であることを示した。

アリストパネースは、悪い結果をもたらす概念や振る舞いなどを風刺することが詩人の務めであると考えていた。風刺の目的は、人々の教訓である。この意味でアリスト

[73] Αριστοφάνης (1997) *Σφήκες*, Μτφ. Κώστας Τοπούζης, Επικαιρότητα, Αθήνα (pp.22-25)
[74] 「(植民地での)土地の分配に与える人」古川　春風(1989)『ギリシャ語辞典』大学書林、東京(p.624)

パネースの喜劇は進歩的であり、鏡のようにアテネの政治的・社会的事実を反映していた。

3.2. 喜劇

喜劇[75]はディオニューソスのための式典から産まれた。この式典では、「豊穣」に関連する演劇が催されていた。最初、この演劇は即興であったが、特にシラクサとアテネでは、次第に詩的演劇になっていった。そして、古代アッティカの喜劇が形成された。当時、この喜劇という新しい演劇は、演劇の起源の主な特性を持っていた。例えば、巨大な陰茎、腹を出した滑稽な衣装、気ままで猥褻な話など。

喜劇の目的は、悲劇と同じように、「聴衆を楽しませる」ことだけではなく、アテネで起こった事件やアテネ人を風刺して、「聴衆を教育する」ことであった。アテネでは、ディオニューソスの劇場で喜劇が催された。特に、神の祝宴時には、コメディ競技会があって、競技会の勝者となった詩人が報酬をもらった。

喜劇は、無邪気なからかいと悪口から始まり、伝統的に時の制度・政策とその為政者の振る舞いをあざ笑うものであった。ギリシャ喜劇は紀元前 487 年にディオニューソスの祝宴で初めて上演された。それは紀元前 534 年に産まれたギリシャ悲劇の 50 年後のことであった。喜劇が誕生したころ、ギリシャでは以下の四つの変化が生じた。

1) 寡頭政治の廃絶
2) アッティカの自治体の代表者の中からアテネの主権者を選挙
3) 迫害された人々と田舎に住んでいる人々に対するいくつかの権利の認可
4) 自由と民主主義の発展

そして、喜劇は虚実的な創作であるという考え方から生まれてきた。

喜劇が誕生した紀元前 487 年から紀元前 300 年頃まで、200 人の詩人によって 1500 の喜劇が創作され、上演された。しかし、今までに記録されている創作者と劇の題目を見ると、1500 の喜劇の中で 11 の喜劇はアリストパネースの劇であった。

[75] Αριστοφάνης (1997) (pp.10-21)

「コメディ」は、kōmos と ōde という言葉に由来する[76]。コメディの歌う人は kōmastes と呼ばれていた。Kōmastes はおかしな服を着て、しかめ面のマスクをしていた。喜劇では、詩人が下品な言葉を使って、陰茎、陰部、同性愛の人などについての話を創作し、それを kōmastes が歌った。アリストパネースも、笑わせるためにたくさん卑猥な言葉を使った。

喜劇の形式は、悲劇の形式と同様に、六つの部分からなる。

1) プロロゴス[77]：始まりの場面。劇の最初の部分で、登場人物が作品の状況設定を提示する。登場人物は、人間のこともあれば神の場合もあり、独自の形をとることもあれば対話の形をとることもある。喜劇のプロロゴスは、悲劇のプロロゴスと異なり、周知の神話伝説ではなくオリジナルのストーリーを扱うのでとりわけ重要である。

2) パロドス[78]：本来はオルケーストラーに出入りする通路のこと。オルケーストラーの側面にあり、コロスは歌いながらここを通って入場/退場する。そこから、悲劇、古喜劇でのコロス登場の歌、及びその場面を指すようになった。パロドスはプロロゴスの次に続くのが普通である。

3) スタシマ[79]：オルケーストラーを聞いて、コロスが歌う歌のこと。

4) エピソード[80]：主としてイアンボストリメトロス韻律による対話が中心の場面のこと。悲劇ではコロスの歌(スタシモン)の後に進展する対話のことである。アゴーンのように一定の構造を持つ部分には適用しない。

5) エクソドス[81]：悲劇ではコロスのストロペー構成を持つ最後の歌以降を指すが、狭義にはコロスの退場の歌を指す。喜劇ではそのような明確な構成がないが、劇の末尾で俳優とコロスが退場する部分を指している。歌の韻律を伴うことが多い。

6) パラバシス[82]：古喜劇に特有の場面で、俳優がいったん退場したところでコロスが進み出て、コロスの長が直接観客に語りかけること。多くは劇中の役割を離れて作者の

[76] Αριστοφάνης (1997) (pp.16-17)
[77] 中務、哲郎、佐野、好則、久保田、忠利 (2008)『ギリシャ喜劇全集 2』岩波書店、東 (p.14)
[78] Ibidem (p.12)
[79] Αριστοφάνης (1997) (p.18)
[80] Ibidem (pp.4-5)
[81] Ibidem (p.4)
[82] Ibidem (p.12)

言いたいことを代弁する(例『アカルナイの人々』626−664 行)。悲劇にはパラバシスはない。

エクソドスは愛すべき部分であり、喜劇の特徴であるパラバシスは詩人が自分の考えを主張する部分である。パラバシスでは、俳優とコロスが詩人の代理として、観客に詩人の作品、意見、理論、主権者の振る舞いや決定などについて話しかけていた。喜劇の形式は次第に変わっていき、アリストパネースの時代の後になると、コロスの部分とスタシマの数が減らされ、パラバシスがなくなった。このような変化にしたがって、古代ギリシャ喜劇時代を区別すると、以下の三つの時代に分かれる[83]。

I.古喜劇時代：紀元前 487 年から紀元前 404 年まで。ペロポンネーソス戦争の末までの時代。

II.中喜劇時代：紀元前 404 年から紀元前 338 年まで。カイロネイアの戦までの時代。(または、326 年までで、アレクサンドロス三世の死亡までの時代)

III.新喜劇時代：紀元前 326 年から紀元前 30 年までのヘレニズム時代。

3.3. アリストパネースの創作

アリストパネースの作品の中で次の 11 の作品が現存している[84]。

i. アカルナイの人々 (レーナイア祭のコンテスト[85]：第 1 位、紀元前 425 年)
ii. 騎士 (レーナイア祭のコンテスト：第 1 位、紀元前 424 年)
iii. 雲 (大ディオニューシア祭のコンテスト[86]：第 3 位、紀元前 423 年)
iv. 蜂 (レーナイア祭のコンテスト：第 2 位、紀元前 422 年)

[83] Αριστοφάνης (1997) (p.21)
[84] Ibidem (p.28)
[85] 務、佐野、久保田 (2008)「**レーナイア祭：**がメーリオーンの月(現在の 1-2 月頃)に数日間催された酒神ディオニューソスの祭り。前 440 年代に喜劇、前 430 年代に悲劇のコンテストが行われるようになった。喜劇は五人の作家が各自 1 篇、悲劇は二人に作家が各自 2 篇の作品をもって参加した。[…]」中 (p.16)
[86] Ibidem「**大ディオニューシア祭・都市のディオニューシア祭：**アテーナイで催された酒神ディオニューソスを祀る祭礼で、前六世紀末から始まった。エラペーボリオーンの月(現在の 3-4 月頃)に数日間催される(時代により日数は異なる)。祭例行列と、ディーテュランボス(合唱抒情詩)・喜劇・悲劇のコンテストが行われる。喜劇は五人の作家が各自 1 篇で、悲劇は三人の作家が各自 3 篇の悲劇と 1 篇のサテュロス劇をもって参加した。[…]」(p.10)

v. 平和 (大ディオニューシア祭のコンテスト：第 2 位、紀元前 421 年)
vi. 鳥 (大ディオニューシア祭のコンテスト：第 2 位、紀元前 414 年)
vii. 女の平和 (紀元前 411 年)
viii. 女だけの祭 (紀元前 411 年)
ix. 蛙 (第 1 位、紀元前 405 年)
x. 女の議会 (紀元前 392 年)
xi. 福の神 (紀元前 388 年)

アリストパネースの 44 の作品のうち、40 は戦争のときに書かれた[87]。アリストパネースは、政治的なコメディ劇を作成して、それまでの喜劇の形式とテーマを変えた。例えば、彼は、社会的・哲学的な説明をせずに、政治的な事実についてコメントした。さらに、下品な言葉や民族主義的な言葉をあまり使わず、詩的な言葉で喜劇を作った。また、アリストパネースの風刺は不快感を与えず、事実に基づくものであった。

アリストパネースの劇は、全てアテネの現実についての劇であり、アテネの問題と事件についての話であった。例えば、『蜂』という喜劇では、社会的に高い地位を担っている人々を風刺した。特に政権を握った人々は自分の職権に影響されて考え方が変わってしまうこと、他人の権利を考えなくなり、自分のことだけを考えるようになることを風刺した。アリストパネースの作品を読むと、彼が平和を愛する人であることが分かる。彼は、平和とデモクラシーの維持が必要だと思っていたので、自分の喜劇を通じて、戦争を続けたい人々(例えば、ラマホという軍人)、平和を守りたくない人々(例えば、クレオーンという政治家)、真実を調べたくない哲学者(例えば、ソクラテスというソフィスト)、社会的な価値を脅している詩人(例えば、エウリーピデースという悲劇の作家)に対して風刺した。

以上のように、アリストパネースは自分の才能を使って、勇気を持って自分の価値観を示したのである。

[87] Αριστοφάνης (1997) (pp.22-25)

3.4. アリストパネースとイソップ

ここでは，その一つの事例として、ギリシャの喜劇詩人アリストパネースによって語られた寓話を取り上げることにする。アリストパネースは、『騎士』、『蜂』、『平和』、『鳥』，『福の 神』などの喜劇によって，イソップの寓話を語り、イソップの生涯について語っている。アリストパネースとイソップは架空の人物と人間の能力と特徴を持った動物を用いて、政治的、経済的で社会的な現実を風刺している。二人の目的は，聴衆のギリシャ人を教育して、彼らの考え方と振る舞いを改善することであった。そして、二人とも架空の物語を語ることによって社会的な問題を解決しようとした。アリストパネースにとってイソップの寓話はギリシャ人に対する大切な教育を提供するものであったので、 下記の『鳥』からの引用文が示すように、イソップの寓話を知らない者は無学であることを意味した。

「君が無学なのは、知りたがり屋でもなく、アイソーポスを
足繁く訪れることもなかったからだ」『鳥』行 471, p.243

『鳥』以外の喜劇でもアリストパネースはイソップのことを語っている。例えば、『蜂』において、何回もイソップの寓話と生涯について話している。そこで，『蜂』を事例に取り上げることにする。まず、『蜂』の内容を説明する。

『蜂』という喜劇は、紀元前 422 年にレーナイア祭で『プロアゴーン』という現存しない喜劇と一緒に初めて上演された[88]。レーナイア祭はガメーリオーンの月(現在の 1–2 月頃)に数日間催された酒神ディオニューソスの祭りで、前 440 年代に喜劇、前 430 年代に悲劇のコンテストが行われるようになった。喜劇は５人の作家が各自一篇、悲劇は２人の作家が各自２篇の作品をもって参加した。最高責任者はアルコーン•バシレウスと呼ばれた。

『蜂』は、父親と息子の関係を扱っている。父親と息子の関係をテーマとした喜劇は、前に『ダイタレイス』と『雲』という二つの喜劇があったが、『蜂』では、父親と息子

[88] Αριστοφάνης (1992) (pp.37-39)

の関係のイメージが違っている。『蜂』は、父親と息子の関係だけでなく、デーモスの法廷に参加するアテナイ人の考え方も話題にしている。

ペロポンネーソス戦争はアテネに新しい現実をもたらした。戦争によって引き起こされた破壊と失業のせいで、田舎の多くの人々が移住してアテネに集まった。戦争によって生まれた不安定な状態では、農民や職人として生産にたずさわっていた多くのアテナイ人が昔の仕事を断念して、生存のため、あるいは、裕福になるための近道として、アテネに集まったのである。彼らは公共の施設での仕事を探していた。その中で特に重要な施設は、エーリエアという法廷であった。エーリアステースの賃金は、ペリクレスの時代には２オボルであったが、クレオーンは紀元前 425 年に３オボルにした。このようにして、クレオーンはアテナイ人に仕事を与えたが、それは腐敗を生み出し、腐敗を拡大さることになった。こうしたことを扇動する人々は、自分の経済的・政治的な欲望にしたがってアテネの市民を搾取した。

アリストパネースはこうした状況を風刺した。彼は、こうした状況の責任は扇動者にあると考え、実際に彼の昔からの敵対者クレオーンを告発した。クレオーンに対するアリストパネースの告発は、紀元前 426 年の『バビロニオス』、紀元前４２５年の『アカルナイの人々』、紀元前 424 年の 『騎士』という喜劇で行われた。紀元前４２２年に『蜂』が上演された時には、クレオーンはアテネ市民に大きな影響を与えていた。スファクチリアの戦の後の紀元前 425 年以降、彼の威信が高まっていたのである。紀元前 423 年の春にはアテネとスパルタが和平条約を結んだので、アリストパネースは成熟したアテネ市民が責任を持ってアテネの法律を考えると思い、『蜂』のテーマとして「法律の力」を選んだ。

クレオーンは「蜂」の主役ではないが、アリストパネースは彼に何回も言及している。「ピロクレオーン」(「クレオーンが好きな人」という意味)と「ブデリュクレオーン」(「クレオーンを憎む人」という意味)という二人の主役の名前はクレオーンに対するアリストパネースの感情を表している。また、クレオーンが紀元前 425 年に扇動して、エクソネスのラベースという軍人を告発した「二つの犬の裁判」にも言及している。

4. 日本語への翻訳

Dale[89]は、「日本語の普通的な単語は、日本固有の伝統によって、特別なニュアンスを持っているので、日本人だけがそれらの意味を理解することができ、他の言語への翻訳はできない」と語っている。こうした考え方が日本と世界の間に目に見えない壁となってきた。Dale の日本人論によると、日本語の単語は特別なニュアンスを持っているが、昨今、多くの外来語が日本語に入ってきている。Backhouse[90]によれば、日本語の語彙の 6%は外来語である。しかし、Honna[91]はこの割合が 10%ぐらいであると言っている。それについては公式のレベレでも調べられていて、国語審議会では、外来語の過剰使用に対する警告を発している。特に、公文書の場合に、外来語になじみのない読者が混乱しているという[92]。

時代を通じて、日本語の中には、色々な外来語が入っているが、日本語への翻訳をするとき、翻訳者は多くの難しさを克服しなければならない。私は、イソップの寓話の翻訳を使いながら、最初の翻訳から始めて、ギリシャ語から日本語への翻訳という過程の難しさに関して説明しようと思う。

4.1. イソップと日本

イソップの寓話は、世界中で受け入れられている。おそらく彼の物語は、最初にラテン語に翻訳された。それはまた、その先駆として 7 世紀の作品の中にいくつか見られる。もちろん、彼の物語は、様々な言語に翻訳されている。例えば、『Kuang yi』というイ

[89] Peter Dale (1986) *The Myth of Japanese Uniqueness,* Croom Helm, London In Nanette Gottlieb (2005) *Language and Society in Japan*, Cambridge University Press, Cambridge (p.5)
[90] Anthony E. Backhouse (1993) *The Japanese Language: An Introduction*, Oxford University Press, Melbourne In Nanette Gottlieb (2005) (p.11)
[91] Nobuyuki Honna (1995) "English in Japanese Society: language within language" In J. Maher & K. Yashiro (eds.) *Multilingual Japan*, Multilingual Matters, Clevedon (pp. 45-62) In Nanette Gottlieb (2005) (p.11)
[92] 国語審議会(1995) "新しい時代に応じた国語施策について(Toward a language policy for a new era)" in 国立国語研究所 (1996) *国語年間 1995* (*Japanese Language Yearbook 1995*) 週栄出版、 東京 (pp.427-451) In Nanette Gottlieb (2005) (p. 12)

ソップの寓話が初めて中国語に翻訳されたのは、1625 年にニコラス・トリゴー(1610－1628)と中国人の Zhang Geng によって行われた翻訳であった。『Yishi yuyan 』という二番目の翻訳は、1840 年に、Sloth というペンネームを持っていたイギリス人のロバート・トムと Mr. Unenlightened と呼ばれたトムの先生という中国人によって行われた翻訳であった。1625 年の翻訳では、この翻訳が「チャンによって文章に記録され、トリゴーによって口頭で翻訳された」という記録がある。1840 年の翻訳では、『Unenlightened によって書かれ、 Sloth によって編集され、翻訳された』という。

日本に初めて来たヨーロッパ人はポルトガル人であった。1544 年に、ポルトガルの船が日本の南島に接岸した。翌年には、Francisco Xavier が日本人をキリスト教に改宗させるために、マカオから日本に到着した。彼は通訳者の日本人(ポルトガル語とスペイン語を話す三人の日本人)と一緒に来た。ポルトガル人は、長期間(約 50 年間)にわたって、軍事のノウハウとカトリックの教義を広げていった。1593 年には、イソップ物語の和訳をした。その目的は、いくつかの短縮された寓話を通して道義を教えることにあった。今までに多くの翻訳があることは、イソップの寓話が日本人の精神に合わせられてきたことを意味する。

特に、イソップの寓話が日本にもたらされたのは、ドイツのウルムで Steindwhel が 1477－78 年に出版した版を日本語に翻訳したものである。書名は『伊曾保物語』で、彼の名前さえ漢字で「伊曾保」を書かれた。イソップの寓話の日本語版は、多くの思慮深い削除が加えられているようである。必要とされたときにはいつも、説明及び論評が加えられる。例えば、文化的な等価性の障害を克服することが翻訳者に求められたときである。地理的な設定が同じままであるにもかかわらず、馴染みのないものがよく知られたものに変えられるがよくある。また寓話の中心は会話であるが、敬語のレベルによって動物の階層が表現されている。

古代ギリシャと日本の間には色々な社会的相違点がある。古代ギリシャでは、社会組織は個人に基づいていた。個人が世界を制御し、自主的な行動をして、自分の決定によって社会的抑制を変えた。それとは対照的に、古代日本の社会システムは、ギリシャよりも複雑で、個人は、家族、氏族、氏族の代表者に対して義務を負っていた。個人はグループのメンバーであり、個人の行為と意志決定はグループの規則に合わせるものであ

った。そうすることによって、グループの協調が個人の目標になった。一方、西洋の社会システムでは、個人はグループに依存しないと考えられていたので、対立、闘争、討論、競争などが起こる可能性があった。

このような相違点は言語の中に表れている。夫々の言語は別々のエートスを持っているが、エトスは、レキシコンに表されている。語彙は普遍的な特徴も持っているが、それぞれの言語が特別な特定ももっている。だから、A 言語から B 言語への翻訳するときは、翻訳者が色々な削除と変更しなければならない。本論文では、日本語に翻訳された文章を通じてこのような相違点について理解しようとすると思う。

4.2. イソップの『寓話』について

本研究のために使われた文献は現代の翻訳である。分析を行なう前に、夫々の翻訳について説明することが必要になると思う。

4.2.1. ギリシャ語の文献

- Λιάπα、 A. (1993) *Αίσωπος Μύθοι*、 Εξάντας、 Αθήνα：現在の版は３４５の寓話を含んでいる。それらの寓話はイソップ物語の古代の収集からきている。寓話のいくつかには、二、三の異なる版があるが、本書の作者は一つの版だけを選んでいる。序論は、F. De Labriole の記事(1977、『寓話』、Encyclopedia Universalis、vol. 6、パリ)に基づいて書かれている。なお、この本には、原典の現代ギリシャ語への翻訳も載っているが、当論文の対象として選んだ日本語訳の原本が古代ギリシャ語で書かれたものであるので、古代ギリシャ語で書かれた寓話を採用することにする。

4.2.2. 日本語の文献

- 翻訳 1. 中塚、哲郎 (2006)『イソップ寓話集・Αισώπειοι Μύθοι』岩波書店、東京：子供向けの人生訓話として世界中の人々に馴染み深いイソップの動物寓話で

はあるが、実は歴史上の人物としてのイソップが使った実証できる話は一つもない、いわば「イソポ風」寓話集であるが、そこには、読み手の立場によって様々な解釈が可能な、実に奥深い世界が展開されている。 本書は、『アエソピカ』の内、ギリシャ語の四七一話を全訳したものである。本書の訳者は、その各部の由来を次のように述べている。

第一部:『アウクスブルク校訂本(校訂本 I)』の寓話。

第二部:『校訂本 Ia』の寓話。

第三部:その他の写本から採られた寓話。

第四部:バブリオス起源の寓話。

第五部:『イソップ伝』に見える寓話。

第六部:偽ドシテオス『ヘルメネウマタ(解釈)』より採られた話。

第七部:アプトニオスの寓話集より採られた話。

第八部:『シュンティパス集』より採られた話。

第九部:ビザンツ期の四行詩から採られた話。

第十部:Codex Laurentianus 57.30 から採られた話。

第十一部:ギリシャ作家の作品から描出された話。

- 翻訳 2.　河野、与一(2009)『イソップのお話』岩波書店、東京：「イソップ－日本語文献」の作者の河野与一によると、『イソップのお話』という題名は正確に言えば『イソップ寓話集』ということになる。『イソップのお話』は、次のギリシャ語のテクストからの翻訳である。

  1. Fabulae Aesopicae collectae, Karl Halm, Teubner, 1901
  2. Aesopi Fabulae, Emile Chambry, “Les Belles Lettres”, 二冊本, 1925, 1926

河野は「ハルムの校訂本には 426 のお話があり、シャンブリの校訂本には 362 のお話がありますが、そのうちから少年文庫の読者にこれだけはぜひ読んでいただきたいという話 300 を選び出しました。省いたお話の主なものは、少年少女の読者に不適当と思われる大人のための話、形がはっきりととのっていないもの、教訓があまりにもこじつけであるものですが、殊に、ここに選んだ３００のお話のうちにも、

お話の一番しまいについている教訓が、今日の私たちの教え方からみて納得のいかないものも少なくありません。なかでも、強いものにははむかってはいけないといったような教訓が多く見えるのは、このイソップのお話のできた時代のふつうの人々が、いかにも惨めな暮らしをしていたからだと思われます。このイソップのお話の教訓については、皆さんが、これをそのまま、うのみにしないで、よく考えて読んでくださることを希望いたします。」と述べている。

つまり、この本は、古代ギリシャ語から翻訳された 300 の寓話を載せているが、その寓話をどう読むかという読み方に関して、訳者が一定の意見を述べているのである。

4.3. アリストパネースの『蜂』について

4.3.1. ギリシャ語の文献

アリストパネースの現存する喜劇には政治的な喜劇として『騎士』『蜂』『平和』『女の平和』があり、社会的な喜劇として『女の議会』『富の神』がある。これらの喜劇は当時の政界を風刺するものであった。本論文の実例として『蜂』という喜劇を使おうと思うが、その分析に入る前に、この劇の内容について説明しておいた方がよいだろう。

マラソンの戦に参加したアテナイ人ピロクレオーンは、クレオーンの庇護のもとにエーリエアというアテネの法廷で判事として働いていた[93]。彼は判事という仕事に誇りを持っていたので、裁判が大好きであった。反対に、彼の息子のブデリュクレオーンは、クレオーンのやり方に賛同できなかったので、父親を法廷に行かせないようにした。ブデリュクレオーンは、ピロクレオーンを家に閉じこめ、家に網をかぶせて、ソーシアスとクサンティアースという二人の奴隷に監視させた。裁判所の仲間が朝早くピロクレオーンの家に来て、「法廷に行こう」と呼びかけたところ、彼等はピロクレオーンが息子によって家に閉じ込められていることを知った。そこで、彼等はピロクレオーンを家から脱出させるように手助けしたが、ピロクレオーンは脱出できなかった。ピロクレオー

[93] Αριστοφάνης (1997) (pp.35-36)

ンは息子に話して、自分の仕事が重要であることを説明して、自分を自由にするように頼んだ。それから、ピロクレオーンとブデリュクレオーンの二人は、裁判について話し合った。ピロクレオーンは裁判の効力を主張し、ブデリュクレオーンは法廷の腐敗を主張した。この話し合いで、息子が父親を説得し、家の中で裁判をして、家の中のものを裁くことになった。それ以降、ピロクレオーンは息子の意見を尊重して、法廷での裁判をやめた。劇の最後で、ピロクレオーンは食事に招待され、お酒を飲んで乱暴し、売り女に告発された。

この劇には二つのテーマがある。それは、公共機関に関してのピロクレオーンとブデリュクレオーンの「意見の対立」と二人の「共存」である。『蜂』の主役はピロクレオーンである。彼は、穏やかな気性ではなく、頑固に主張する人であり、自分の雄弁を使って言論で自分の意見と権利を擁護しようとしている。それとは反対に、ブデリュクレオーンは、道理をわきまえた人であり、謙遜して自分の意見を語っている。

以上のように、『蜂』は社会的・政治的な喜劇である。アリストパネースは『蜂』の中で、政府、政治家の腐敗、政権を持っている人々の振る舞いと考え方を風刺している。

4.3.2. 日本語の文献

『蜂』の翻訳本として中務哲郎、佐野好則、久保田忠利の『ギリシャ喜劇全集』を研究対象として選んだ。この本には三つの喜劇の翻訳が載っている。古代ギリシャ語で書かれた『蜂』の翻訳は中務哲郎によって行われた。中務は解説の章で、アリストパネースとイソップの関係について次の２点のコメントを載せている。

1. 羊を驢馬に変えたことから「驢馬の陰のために戦う」という笑い話が生まれた(191 行の注参照)。これは『イソップ寓話集』にある話であるが、『蜂』は当時の社会におけるイソップ寓話の人気をよく伝えている。p. 352
2. 被告は裁判官の関心を得るために、冗談を言ったりイソップの滑稽な話を持ち出したりした(566 行)。ピロクレオーンはパン売り女をからかって、イソップの登場する話を即興で作る(1401 行)。ピロクレオーンが「ある時、デルポイの人たちがイソップを、神様の杯を盗んだとして罪に問うた」(1446 行以下)と語っている

のは、濡れ衣を着せられたイソップが死後に仇を晴らすことを誓ったように、無理無体な目に遭わされている自分もお前たちに報復するぞ、と言おうとしたのである。文芸作品のパロディや「もじり」はアリストパネースの最も得意とするところである。(p. 352)

このコメントからも分かるように、イソップに関する情報はアリストパネースの喜劇を通じて集めることができるのである。さらに，中務は解説の中で、翻訳の難しさについて次のように説明している。

1. プロロゴス(前口上)、パロドス(合唱隊入場の歌)、エピソディオン(歌と歌に挟まれた筋が進展する部分)、スタシモン(合唱隊の歌)と明確に場面を区切ることができる悲劇と違い、喜劇の場面割りは容易ではない。劇の各部分を表す翻訳不可能なテクニカルタームを再現しても意味がないので、本全集では便宜的、実際的な場面名称を与えることにした。その上で言うならば、『蜂』は主人公ピロクレオーンの変身を描くという目的に向けて、極めて明解に流れるように構成されている。(pp. 349–350)
2. アリストパネースの喜劇は、動きの面白さに劣らず言葉の面白さに依存していたはずであるが、翻訳でそれを伝えるのは不可能である。(p. 353)
3. 喜劇が前 5 世紀のアテーナイの社会と人物から切り離されてしまうと、その喜劇を理解することが困難になり、喜劇の命である言葉遊びが翻訳不可能になってしまう。それでも普遍化可能なテーマをもつ『リューシストラテー』などはたびたび芝居や映画になっているが、『蜂』の翻案は多くはないようである。(p. 354)

以上のように、古代ギリシャの喜劇を翻訳するには、翻訳者が色々な難しさを克服しなければならない。最大の難しさは喜劇のテーマにある。アリストパネースの喜劇は古代ギリシャの社会を風刺しているので、日本人の読者が古代ギリシャの歴史と社会について理解していなければ、喜劇のテーマも分からない。ただ、もし翻訳者がこの時代についての説明を挿入すれば、喜劇のテーマが分かるようになる。さらに、『ギリシャ喜劇全集』の翻訳者によると、二番目の難しさはアリストパネース独自の言語にあるという。アリストパネースは読者を楽しませるために、時々、自分で作った言葉を使ってい

る。このような場合に、翻訳者は文字通りの翻訳ではなく、その言葉の言外の意味を翻訳しなければならないのである。

以上に述べた翻訳者の説明を考慮して、当論文では原本と翻訳文についての文法的、状況的、語用論的、意図に関する、文体的、語彙的な分析を行うことにする。

5. 分析

翻訳について研究したい人は、まず、起点言語と目標言語について理解しなければならない。しかし、この知識は、言語についての知識だけではなくて、人々の考え方についての知識も含めてである。知識に導く媒体は三つである(cognitio intellectiva、cognitio intuitiva、 cognitio mystica)。昔から、人々は物事について理解するために、物語や神話を使っていた。多くの研究者は、かつての神話や寓話が現在の科学に似た役割を担っていたと言う。特に、人々は神話と寓話を通じて真理を発見しようとした。さらに、寓話は想像に基づく物語であるが、なんらかの真理を示している。これらの点を見て、Jourdan[94]という研究者は「Y a-t-il plus vrai que la légende?」 と言った。したがって、このような作品を通じて、研究者は当時の社会の価値観と人々の世界観を理解できる。これを考慮して、博士論文の対象として、寓話を選んだ。

5.1. イソップの『寓話』

古代から、色々な文芸作品にイソップの寓話と歴史についての話が載っている。ホメロスと同じように、イソップは自分の寓話を書き残さなかったが、彼の寓話は別の作家の作品を通じて有名になった。イソップの現存する寓話は何百とあるが、当論文では、時間的な制約から、全部の寓話の分析を行うことが不可能である。そこで、その中から四つの寓話を取り上げることにした。その選択は二つの基準に基づいて行った。第一の基準は、当論文の目的である「近代日本語について研究」に関連する基準として、近代日本語を使った翻訳の中から選ぶことにした。しかし、それに該当する翻訳が多過ぎることから、第二の基準として、アリストパネースによって語られた寓話の翻訳を選ぶことにした。アリストパネース以外の作家、例えば、ギリシャの歴史家プルタルコスの作品でもイソップの寓話を取り上げているが、そのイソップの寓話のスタイルがアリスト

[94] Βασίλης Βιτσαξής (2002) *Ο Μύθος: Σημείο αναφοράς της υπαρξιακής αναζήτησης*, Ελλήν, Αθήνα (p. 118)

パネースの作品と似ているので、それらの代表としてアリストパネースの作品の寓話を採用することにしたのである。二人とも、自然界の登場人物を使って、人々と社会の特徴を説明している。

以上により、次の５つの話を選定した。

1. 『鷲と狐』：アリストパネースの『鳥』という喜劇にある寓話
2. 『鷲と黄金虫』：アリストパネースの『平和』にある話
3. 『漁師』：アリストパネースの『騎士』にある話
4. 『ヘラクレスと富の神』：アリストパネースの『富の神』にある寓話
5. 『蜂』という喜劇の中のイソップについて話

当論文では、上記の５つの話について、ギリシャ語の原本と日本語への翻訳文を比較し、等価性という概念に基づいて、２つのテクストの文法的、語彙的、文体的、意図に関する、実際的な特性について分析することにする。

タイトル	古典
鷲と狐 ἀετὸς καὶ ἀλώπηξ	アリストパネース『鳥』行:651
鷲とセンチコガネ ἀετὸς καὶ κάνθαρος	アリストパネース　『平和』行:129
水を打つ漁師 ἁλιεὺς	アリストパネース　『騎士』　行:864
ヘラクレスとプルトス Ἡρακλῆς καὶ Πλοῦτος	アリストパネース　『福の神』　行:87
例一	アリストパネース　『蜂』行:564
例二	アリストパネース　『蜂』行:1257
例三	アリストパネース　『蜂』行:1401
例四	アリストパネース　『蜂』行:1448

5.1.1. 言語的な分析

例 1. 鷲と狐

原本:『イソップ：寓話』p. 30

ἀετὸς καὶ ἀλώπηξ φιλίαν πρὸς ἀλλήλους σπεισάμενοι πλησίον ἑαυτῶν οἰκεῖν διέγνωσαν βεβαίωσιν φιλίας τὴν συνήθειαν ποιούμενοι. καὶ δὴ ὁ μὲν ἀναβὰς ἐπί τι περίμηκες δένδρον ἐνεοττοποιήσατο、ἡ δὲ εἰς τὸν ὑποκείμενον θάμνον ἔτεκεν. ἐξελθούσης δέ ποτε αὐτῆς ἐπὶ νομὴν ὁ ἀετὸς ἀπορῶν τροφῆς καταπτὰς εἰς τὸν θάμνον καὶ τὰ γεννήματα ἀναρπάσας μετὰ τῶν αὐτοῦ νεοττῶν κατεθοινήσατο. ἡ δὲ ἀλώπηξ ἐπανελθοῦσα ὡς ἔγνω τὸ πραχθέν、οὐ μᾶλλον ἐπὶ τῷ τῶν νεοττῶν θανάτῳ ἐλυπήθη、ὅσον ἐπὶ τῆς ἀμύνης· χερσαία γὰρ οὖσα πετεινὸν διώκειν ἠδυνάτει. διόπερ πόρωθεν στᾶσα、ὃ μόνον τοῖς ἀσθενέσιν καὶ ἀδυνάτοις ὑπολείπεται、τῷ ἐχθρῷ κατηρᾶτο. συνέβη δὲ αὐτῷ τῆς εἰς τὴν φιλίαν ἀσεβείας οὐκ εἰς μακρὰν δίκην ὑποσχεῖν. θυόντων γάρ τινων αἶγα ἐπ᾽ ἀγροῦ καταπτὰς ἀπὸ τοῦ βωμοῦ σπλάχνον ἔμπυρον ἀνήνεγκεν· οὗ κομισθέντος ἐπὶ τὴν καλιὰν σφοδρὸς ἐμπεσὼν ἄνεμος ἐκ λεπτοῦ καὶ παλαιοῦ κάρφους λαμπρὰν φλόγα ἀνῆψε. Καὶ διὰ τοῦτο καταφλεχθέντες οἱ νεοττοὶ — καὶ γὰρ ἦσαν ἔτι ἀτελεῖς οἱ πτηνοὶ — ἐπὶ τὴν γῆν κατέπεσον. καὶ ἡ ἀλώπηξ προσδραμοῦσα ἐν ὄψει τοῦ ἀετοῦ πάντας αὐτοὺς κατέφαγεν.

ὁ λόγος δηλοῖ、ὅτι φιλίαν παρασπονδοῦντες、κἂν τὴν τῶν ἠδικημένων ἐκφύγωσι κόλασιν、ἀλλ᾽ οὖν γε τὴν ἐκ θεοῦ τιμωρίαν οὐ διακρούσονται.

翻訳 1:『イソップ寓話集』中務哲郎訳、第一部、p. 21

鷲と狐が友だちになって、近くに住むことにした。日々のつきあいで一層友情も固まる、と考えたわけだ.

こうして、鷲はとある高い木の天辺に巣を懸け、狐は根元の茂みにもぐりこんで、子を生んだ。ところがある時、狐が餌を探した出かけた隙に、食い物に困った鷲は、茂みに舞い降りるや、狐の赤ん坊をひっさらい、雛たちと一緒になって食べてしまった。

帰ってきた狐は、事の次第を悟ったが、子供を殺されたことにも増して辛かったのは、仕返しができないことだった。地上に住むものの悲しさで、飛ぶものを追うわけにはい

かないのだ。無力で手だてのない者にはこんなことでもするしかないのか、遠くから敵を呪っていた。

しかしこの鷲も、友情を裏ぎった罰を遠からず受けることになる。野原で生贄の山羊が焼かれている時、鷲が舞い降りて、火のついた腸を祭壇から失敬した。それを巣に持ち帰ったのはよいが、折から突風が吹きつけて、カサカサに乾ききった小枝の巣は、カッと燃え上がった。このため、まだ羽根も生え揃わぬ雛は焼かれ、地面に落ちてしまった。狐は駆け寄るなり、鷲の目の前で、雛を残らず食い尽くした。

友情の誓いを破る者は、たとえ無力な被害者からの懲らしめを逃れたとしても、天罰は免れぬ、ということをこの話は説き明かしている。

鷲と狐	**形式的な等価性** **Formal Equivalence**	**ダイナミックな等価性** **Dynamic Equivalence**
語用論的な情報 **Pragmatic Information**	**作家**：イソップ **テクストの型**：文化的な **ジャンル**：寓話	
状況的な情報 **Situational Information**		**言語**：原本－古代ギリシャ語 翻訳－現代日本語
文法的な情報 **Grammatical Information**	**1. 動詞的な用法** **1.1. 動詞** διέγνωσαν－考えた ἐνεοττοποιήσατο－巣を懸け ἔτεκεν－子を生んだ ἔγνω－悟った ἠδυνάτει－できないことだった ὑπολείπεται－するしかない	**1. 動詞的な用法** **1.1.動詞** κατεθοινήσατο－食べてしまった ἐλυπήθη－辛かった **1.2.分詞** ἀναβὰς－天辺に ὑποκείμενον－根元の οὖσα－もの θυόντων－生贄

κατηρᾶτο －呪っていた
ἀνήνεγκεν－失敬した
ἀνῆψε－燃え上がった
κατέπεσον－落ちてしまった
κατέφαγεν－食い尽くした
δηλοῖ－説き明かしている
ἐκφύγωσι－逃げれた
οὐ διακρούσονται－免れぬ

1.2. 不定詞

οἰκεῖν－住むこと
διώκειν－仕返し
ὑποσχεῖν－受けること

1.3. 分詞

σπεισάμενοι－なって
ποιούμενοι－した
ἐξελθούσης－出かけた
ἀπορῶν－困った
καταπτὰς－降りる
ἀναρπάσας－ひっさらい
ἐπανελθοῦσα －帰って来た
καταπτὰς－降りて
κομισθέντος－持ち帰った
ἐμπεσὼν －吹きつけて
καταφλεχθέντες－焼かれ
προσδραμοῦσα－駆け寄るなり

2. 名詞用法

παρασπονδοῦντες－破る者

2. 名詞的な用法

2.1.名詞

βεβαίωσιν－一層
ὄψει－目の前
θανάτῳ－殺されたこと
ἀσεβείας－裏ぎった
φλόγα－カッ
θεοῦ－天

2.2.分詞

τὰ γεννήματα－赤ん坊
τὸ πραχθέν－事
τῶν ἠδικημένων－無力な被害者

2.3.代名詞

ὅ μόνον－こんなことでもするしかない

3. 形容詞

περίμηκες－ある
χερσαία－地上に住む
πετεινὸν－飛ぶ
ἀσθενέσιν－手だてのない者
ἔμπυρον－火のついた
σφοδὸς－突風
λεπτοῦ －小
ἀτελεῖς－羽根も生え揃わぬ

2.1. 名詞

ἀετὸς －鷲

ἀλώπηξ －狐

συνήθειαν－つきあい

φιλίας－友情

δένδρον－木

θάμνον－茂み

νεοττῶν－子供

νομὴν－餌

τροφῆς －食い物

νεοττῶν－雛たち

ἀμύνης－仕返し

ἐχθρῷ－敵

δίκην－罰

αἶγα－山羊

κάρφους－枝

ἀγροῦ－野原

βωμοῦ－祭壇

σπλάχνον－腸

καλιὰν－ 巣

τιμωρίαν－罰

ἄνεμος－風

πτηνοὶ－雛

γῆν－ 地面

λόγος－話

κόλασιν－懲らしめ

2.2. 代名詞

αὐτῷ－この

τοῦτο－この

πάντας－残らず

4. 前置詞

ἐπί νομὴν－餌を

ἐκ κάρφους－枝の

ἐκ θεοῦ－天 (の) 罰

5. 接続詞

μὲν －鷲は

δέ－狐は

	3. 形容詞 ἀδυνάτοις－無力 μακρὰν－遠からず παλαιοῦ －乾ききった **4. 前置詞** ἐπί δένδρον－木に εἰς τὸν θάμνον－茂みに μετὰ τῶν νεοττῶν－雛たちと一緒に ἐπ’ ἀγροῦ－野原で ἀπὸ τοῦ βωμοῦ－祭壇から διὰ τοῦτο－このため ἐπί τὴν καλιὰν－ 巣に ἐπί τὴν γῆν－ 地面に ἐν ὄψει－目の前で **5. 接続詞** καὶ－と γάρ－で ὅτι－ということ κἄν－たとえ…としても	
語彙的な情報 **Lexical Information**	**多型(Polymorphism)：** κατεθοινήσατο－食べてしまった κατέπεσον－落ちてしまった κατέφαγεν－食い尽くした	**多型：** καταφλεχθέντες－焼かれ ἐξελθούσης－出かけた ἐκφύγωσι－逃げれた **多義：** δίκην－罰

	多義(Polysemy)： νεοττῶν－雛たち νεοττῶν－子供 πτηνοὶ－雛	κόλασιν－懲らしめ τιμωρίαν－罰は
文体的な情報 **Stylistic Information**	**1.**χερσαία－πετεινὸν 地上に住むもの－飛ぶもの **2.**θυόντων－生贄	**1.**πάντας αὐτοῦς κατέφαγεν－雛を残らず食い尽くした
意図に関する情報 **Intentional Information**	**原本と翻訳の教訓：** 天罰を逃げられない	

上表では、原本と和訳から収集した情報を「語用論的」「状況的」「文法的」「語彙的」「文体的」「意図」というカテゴリーによって７つに区分し、それぞれのカテゴリーについて原本と和訳の情報を「形式的な等価性」と「ダイナミックな等価性」によって分類している。

語用論的な情報: 最初のカテゴリーは語用論的な情報である。原本のタイトルが『イソップの寓話』、和訳のタイトルが『イソップの寓話集』であるから、両方の読者はタイトルによってその作品の内容が分かる。タイトルを見れば、その本がイソップによって語られた寓話からなることが理解できる。つまり、原本と和訳の読者はタイトルから語用論的な同じ情報を得ることができるのである。

原本と和訳のテクストのジャンルについての情報は語用論的な情報であり、形式的な等価性を持つ。二つのテクストは、作者がイソップであり、文化的なテクストであり、寓話のジャンルに属し、読者に楽しみと教訓を与えることを目標にしている点で全く同じである。語用論的なレベルでは、原本と和訳には形式的な等価性が存在するのである。

状況的な情報: 二番目のカテゴリーは状況的な情報である。二つのテクストの言語と時代を理解するためには、状況的な情報が必要になる。

原本の言語が古代ギリシャ語であり、和訳の言語が現代日本語であるから、原本と和訳は言語と時代が異なる。しかし、原本の読者は古代ギリシャ語を話し、和訳の読者は現代日本語を話しているので、両方の読者にとって原本と和訳の言語が簡単で分かりやすいことから、読者は一般的な人であろう。つまり、作品に使われた語彙・表現などが分かりやすく、専門的ではないので、読者は専門的な知識を必要としないのである。

二つのテクストの言語は分かりやすいが、原本を理解するためには読者が古代ギリシャ語に精通し、和訳の読者も日本語に精通していなければならない。原本を理解するためには、古代ギリシャ語の文法的規則・文体的表現とその時代に関する知識が必要であり、和訳を理解するためには、日本語の規則・表現と漢字に関する知識が必要である。つまり、テクストで使われた言語に精通していなければならないことから、原本と和訳の読者は教育を受けた人であろう。

以上のことから、二つのテクストについての状況的な情報は同じであることが分かった。二つのテクストの言語は専門的ではないが、二つのテクストを理解するためには、言語についての深い知識を持っていなければならない。こうしたことから、原本と和訳の状況的な情報には形式的な等価性があり、原本と和訳は、言語が違い、時代が異なるが、読者のレベルが同じなのである。

文法的な情報: 三番目のカテゴリーは文法的な情報である。これは原本と和訳の言葉の品詞についての文法的な情報であり、動詞・分詞・形容詞・代名詞・名詞の集合を形式的な等価性とダイナミックな等価性に基づいて分ける。形式的な等価性があるときは、原本と和訳の言葉が同じ意味と特徴を持つことになる。例えば、動詞の場合、形式的な等価性があると、原本の動詞が同じ意味を持っている日本語の動詞へ翻訳できる。一方、ダイナミックな等価性の場合には、原本と和訳の言葉が同じ意味を持っていて、文法的には異なる品詞となる。例えば、原本の分詞が名詞に翻訳されれば、ダイナミックな等価性となる。それについて述べる前に、日本語とギリシャ語の文法的な違いについて述べることにする。

日本語とギリシャ語には色々な文法的相違点がある。ギリシャ語の場合、動詞が人称によって変化するが、日本語の場合には変化しない。ギリシャ語では分詞がよく使われ

るが、日本語の場合には分詞の代わりに動詞・形容詞・副詞などを使う。ギリシャ語では形容詞が性別・数・格によって変化するが、日本語の形容詞にはそれがない。例えば、ギリシャ語の「λεπτός = 細い」という形容詞では、男性形・主格・単数の場合に「λεπτός」、女性形・属格・複数の場合に「λεπτῶν」となる。同じように、ギリシャ語の代名詞と名詞にも性・格・数の別がある。例えば、「δίκη = (この文脈では)罰 」という女性形の名詞が単数・主格では「δίκη」、単数・対格では「δίκην」、複数・主格では「δίκαι」となる。この相違点をふまえて、原本と和訳の文法的な等価性について述べる。動詞の場合、一般的には原本と和訳の間に形式的な等価性がある。例えば、

- διέγνωσαν－考えた
- ἐνεοττοποιήσατο－巣を懸ける
- ἔτεκεν－子を生んだ
- ἔγνω－悟った
- ἠδυνάτει－できないことだった
- οἰκεῖν－住むこと

しかし、時々、原本の動詞が異なる相の動詞に和訳されて、ダイナミックな等価性となる。例えば、

- κατεθοινήσατο－食べてしまった
- ἐλυπήθη－辛かった

分詞でも形式的な等価性がある。例えば、動詞として使われている分詞が同じ意味を持つ動詞に和訳される場合である。例えば、

- ἐξελθούσης—出かけた
- ἐπανελθοῦσα—帰って来た

名詞として使われている分詞でもダイナミックな等価性がある。例えば、

- τῶν ἠδικημένων—無力な 被害者

形容詞でも形式的な等価性がある。例えば、

- ἀδυνάτοις—無力で

ダイナミックな等価性もある。例えば、原本の形容詞は動詞のようになっている:

- περίμηκες—ある

- χερσαία－地上に住む

同じように、名詞の場合でも、形式的な等価性の例として、

- ἀετός—鷲が
- ἀλώπηξ—狐が
- ἐπί δένδρον—木に

ダイナミックな等価性の例として、

- συνήθειαν—つきあいで

語彙的な情報: 四番目のカテゴリーが語彙的な情報である。このカテゴリーでは、多型と多義という言語的な現象に従って原本と和訳から取った情報を分類する。多型とは一つの語が多くの言葉と一緒に使えることである。例えば、ギリシャ語の「κατά-」と日本語の「ーしまう」が多型語と呼ばれている。多義とは一つの語で多くの意味を持つ言葉のことである。例えば、ギリシャ語の「νεοττοί」が日本語の「雛たち」と「子供」に翻訳できるので多義語である。

原本の中の多型の例として「κατεθηνοίσατο、κατέφαγεν、κατέπεσον、καταφλεχθέντες、ἐξελθούσης、ἐκφύγωσι」という単語を取り上げる。これらの単語のうち、前の４つの単語には「κατά-」という接頭辞がつき、後の２つの単語には「ἐκ」がついている。「κατά-」は、前置詞として「によると」「に従って」「に反対して」「そば」「の間じゅう」などの意味を持ち、動詞の接頭辞として使われる場合には「下」と「～しまう」の意味を持っている。「κατά-」は「～しまう」の意味を持っているが、和訳では、「κατεθηνοίσατο、κατέφαγεν、κατέπεσον、καταφλεχθέντες」が「食べてしまった、落ちてしまった、食い尽くした、焼かれた」と翻訳された。従って、「κατεθηνοίσατο、κατέπεσον、κατέφαγεν」が形式的な等価性であり、「καταφλεχθέντες」がダイナミックな等価性である。「ἐξελθούσης(=から出かけた)と ἐκφύγωσι(から逃げた)」についても、「ἐκ」という接頭辞の意味が「から」であるが、和訳では「から」という単語を使わずに「出かけた」「逃げた」と翻訳したので、ダイナミックな等価性になる。

多義語の例として「νεοττῶν、πτηνοί」と「δίκην、κόλασιν、τιμωρίαν」について考えてみる。 上の表を見れば「νεοττῶν、πτηνοί」の場合に形式的な等価性があり、「δίκην、

κόλασιν、τιμωρίαν」の場合にダイナミックな等価性がある。「νεοττῶν、 πτηνοί」の意味が「雛たち」であり、「δίκην、κόλασιν、τιμωρίαν」の意味が「罰」である。和訳では、「νεοττῶν と πτηνοί」が「雛」として翻訳されたので、形式的な等価性があり、「δίκην、κόλασιν、τιμωρίαν」の翻訳として「罰」と「懲らしめ」という二つの言葉を使ったので、ダイナミックな等価性となる。

文体的な情報: 五番目のカテゴリーが文体的な情報である。それはテクストのスタイルについての情報である。

原本と和訳のテーマは鷲と狐の物語であるが、イソップはその物語を通じて友情という概念の重要性について説明しようとした。そのために、イソップは簡単な言葉を使いながら、面白くて楽しい話を創作した。話を面白くするために、擬人化、比較、比喩的な言葉などの特殊な表現を使った。例えば、「狐」と「鷲」という単語の代わりに「χερσαία=大地的な」と「πετεινόν=空的な」という形容詞を使った。さらに、イソップの寓話は、古代ギリシャ人向けの話であったので、その中には古代ギリシャの色々な特徴や要素が含まれている。例えば、『鷲と狐』では、神に捧げる生け贄という古代ギリシャの習慣に言及している。

文体的な観点から原本と和訳を見ると、二つのテクストには形式的な等価性がある。例えば、翻訳者は「χερσαία」と「πετεινόν」に「地上に住むもの」と「空を飛ぶもの」という単語を使い、「生け贄」という分かりにくい単語も使った。言い換えれば、原本の文体を守るため、翻訳者が、日常的なコミュニケーションであまり使われてない単語を選んだ。この二つの例から、原本と和訳には形式的な等価性があることが分かる。勿論、ダイナミックな等価性の例もある。例えば、原本では動詞の過去形が使われているが、翻訳では、時々、現在形、特に歴史的現在が使われている。原本の「συνέβη」という動詞は「になった」という過去の意味であるが、和訳では「になる」と翻訳されている。

意図に関する情報: 六番目のカテゴリーが意図に関する情報である。寓話の一つの特徴として、読者に社会的な価値を教えることがある。イソップも自分の寓話を通じて

ギリシャ人に色々な価値を教えようとした。『鷲と狐』のテーマは友情である。この物語は、人々に友人を尊敬し、友情を守らなければならないと主張し、そうしないと神の罰を受けるという物語である。古代ギリシャでは、 友情が大切な価値として考えられていた。だから、友情の重要性を示す多くの物語があった。例えば、ダモンとピティアス、アキレウスとパトロクロス、アレクサンダーとヘファイスティオン、オレステースとピラデースなどがあり、『鷲と狐』の目的も友情についての教訓を提供することにあった。

和訳を読むと原本と和訳の意図に関する情報が同じであることが分かる。和訳の読者も同じ教訓を得ることになる。

「友情の誓いを破るものは、たとえ無力な被害者からの懲らしめを逃れたとしても、天罰は免れぬ、ということをこの話は説き明かしている」。

要するに、意図に関するレベレで原本と和訳の形式的な等価性がある。

翻訳 2:『イソップの話』河野与一訳、p. 59

ワシとキツネが、仲よくしていたので、もっと仲よくするために、近所に家をもつことにしました。そこで、ワシはたかい木にのぼって巣をつくり、キツネはその下の草むらで子どもを生みました。ある日、キツネがえさをさがしに出かけたあと、ワシはたべものがなくなったので、草むらにおりてきて、キツネの子どもたちをさらい、それをじぶんの子どもにもわけて、たべてしまいました。キツネはもどってきて、そのことをしりましたが、じぶんの子どもたちの死んだのを悲しむよりも、かたきがとれないのをざんねんにおもいました。けれどもキツネは地面をあるくけものですから、羽のあるけものを追いかけることはできません。それに、よわくて力がありませんから、しかたなしに、遠くのほうにはなれて、この敵をのろっていました。

しかし、そう長くたたないうちに、そのワシにも友情をやぶった罰がやってきました。人々が畑でヤギを殺して神々にささげているとき、ワシはおりてきて、その祭壇から火のついているはらわたをさらって、巣に運んで行きました。するとひどい風がふいて、ほそい枯枝からあかるいほのおが燃えあがりましたので、そのとき、まだ羽の生えてい

なかったワシのひなは、焼けたまま、地面におちてきました。キツネはそこへかけつけて、ワシの見ているまえで、そのひなをみんなたべてしまいました。

友情をやぶった人々は、ひどいめにあわせたあいてがよわいために、その罰をのがれていても、そのうちには神さまの罰をまぬがれることができません。

ワシとキツネ	形式的な等価性	ダイナミックな等価性
語用論的な情報	作家：イソップ テクストの型：文化的な ジャンル：寓話	
状況的な情報		言語：原本－古代ギリシャ語 翻訳－現代日本語
文法的な情報	1. 動詞的な用法 1.1.動詞 ἐνεοττοποιήσατο－巣をつくり ἔτεκεν－子どもを生みました ἔγνω－しりました ἠδυνάτει－できません κατηρᾶτο－のろっていました ἀνήνεγκεν－さらって ἀνῆψε－燃えあがりました κατέφαγεν－たべてしまいました ἐκφύγωσι－のがれていて οὐ διακρούσονται－まぬがれる	1. 動詞的な用法 1.1.動詞 κατεθοινήσατο－たべてしまいました ἐλυπήθη－悲しむ κατέπεσον－おちてきました 1.2.不定詞 οἰκεῖν－家をもつこと 1.3.分詞 ὑποκείμενον－その下の στᾶσα－はなれて 2. 名詞的な用法 2.1.名詞 θανάτῳ－死んだの ἀμύνης－とれないの

1.2.不定詞

διώκειν－追いかけること

ὑποσχεῖν－やってきました

1.3.分詞

σπεισάμενοι－していた

ποιούμενοι－する

ἀναβὰς－のぼって

ἐξελθούσης－出かけた

ἀπορῶν－なくなった

καταπτὰς－おりてきて

ἀναρπάσας－さらい

ἐπανελθοῦσα－もどってきて

οὖσα－です

θυόντων－ささげている

καταπτὰς－おりてきて

κομισθέντος－はこんでいきました

ἐμπεσὼν－ふいて

καταφλεχθέντες－やけたまま

προσδραμοῦσα－へかけつけて

παρασπονδοῦντες－やぶった

2. 名詞的な用法

2.1 名詞

ἀετὸς －ワシ

ἀλώπηξ －キツネ

ἀσεβείας－やぶった罰

δίκην－罰

ὄψει－見ているまえ

2.2.分詞

τὸ πραχθέν－そのこと

τὰ γεννήματα－子どもたち

τῶν ἠδικημένων－よわい

2.3.代名詞

ὅ μόνον－しかたなし

3. 形容詞

περίμηκες－そこで

χερσαία－地面をあるくもの

πετεινὸν－羽のあるけもの

ἀσθενέσιν－よわくて力

ἀδυνάτοις－しかたなしに

ἔμπυρον－火のついている

ἀτελεῖς－羽の生えていなかった

4. 前置詞

ἐπί νομὴν－えさを

ἐπί τῷ θανάτῳ－死んだのを

ἐπί τῆς ἀμύνης－とれないのを

διὰ τοῦτο－そのとき

φιλίας－仲よく
δένδρον－木
θάμνον－くさむら
νομὴν－えさ
τροφῆς －たべもの
νεοττῶν－子ども
νεοττῶν－子どもたち
ἐχθρῷ－かたき
αἶγα－ヤギ
ἀγροῦ－畑
βωμοῦ－祭壇
σπλάχνον－はらわた
καλιὰν－ 巣
ἄνεμος－風
κάρφους－枝
φλόγα－ほのお
πτηνοὶ－ひな
γῆν－ 地面
κόλασιν－罰
τιμωρίαν－罰
θεοῦ－神さま

2.2.代名詞

αὐτῷ－そう
τοῦτο－その
αὐτοῦς－その

3. 形容詞

μακρὰν－長く
σφοδρὸς－ひどい

ἐν ὄψει－見ているまえで
ἐκ θεοῦ－神さまの

5. 接続詞

μὲν －ワシは
δέ－キツネは
ἀλλ’ οὖν γε－そのうちには

	λεπτοῦ －ほそい παλαιοῦ －枯 λαμπρὰν－あかるい πάντας－みんな **4. 前置詞** ἐπί δένδρον－木に εἰς τὸν θάμνον－くさむらで μετὰ τῶν νεοττῶν－子どもにも ἐπ’ ἀγροῦ－畑で ἀπὸ τοῦ βωμοῦ－祭壇から ἐπί τὴν καλιὰν－ 巣に ἐκ κάρφους－枝から ἐπί τὴν γῆν－ 地面に **5. 接続詞** καὶ－と γάρ－ですから κἄν－も	
語彙的な情報	**多型：** κατεθοινήσατο－たべてしまいました κατέπεσον－おちてきました κατέφαγεν－たべてしまいました ἐκφύγωσι－のがれていて **多義：**	**多型：** καταφλεχθέντες － やけたまま ἐξελθούσης－出かけた **多義：** γεννήματα－子どもたち πτηνοὶ－ひな δίκην－罰

	νεοττῶν－子ども νεοττῶν－子どもたち νεοττοὶ－ひな	κόλασιν－罰 τιμωρίαν－罰
文体的な情報	**1.**χερσαία－πετεινὸν 地面をあるくけもの－羽のあるけもの	**1.**πάντας αὐτοῦς κατέφαγεν－そのひなをみんなたべてしまいした **2.**θυόντων－神々にささげている
意図に関する情報	**原本と翻訳の教訓：** 天罰を逃げられらない	

語用論的な情報と状況的な情報: 一番目の和訳と同様、二番目の和訳でも語用論的な情報に関して形式的な等価性がある。原本(『イソップの寓話』)と和訳(『イソップの話』)のタイトルから二つテクストが文学的なテクストであることとその作者がイソップであることが分る。

状況的な情報に関しては二番目の和訳でもダイナミックな等価性がある。原本が古代ギリシャ語で書かれ、和訳が現代日本語で書かれていて、原本と和訳の言語は分かりやすい。しかし、一番目の和訳に比べると二番目の和訳の方が単純である。その理由は、この和訳の読者に子どもが想定されているからである。要すると、原本と一番目の和訳の場合、読者は使われた言語をよく知っていなければならないが、二番目の和訳の読者は日本語についての“基本”知識だけを持っていれば(例えば、多くの漢字を知らなくても)理解できるからである。和訳には、分かりにくい言葉がなく、漢字も少なくて、大人向けのテクストと子供向けのテクストに分かれている。そのことから、原本と和訳には状況的なレベルでダイナミックな等価性がある.

文法的な情報: 文法的な情報では形式的な等価性とダイナミックな等価性の両方がある。多くの動詞が形式的な等価性に従って翻訳されている。

- ἔτεκεν－子どもを生みました
- ἔγνω－しりました

ダイナミックな等価性に従って和訳されている動詞もある。

- οἰκεῖν－家をもつこと

原本のほとんどの分詞が形式的な等価性に従って翻訳されている。

- ποιούμενοι－する
- ἀναβὰς－のぼって
- ἐξελθούσης－出かけた

三つの分詞だけダイナミックな等価性に従って翻訳された。

- ὑποκείμενον－その下の
- στᾶσα－はなれて
- ἠδικημένων－よわい

ほとんどの形容詞が同じ意味を持つ日本語の形容詞に翻訳された。

- μακρὰν－長く
- σφοδρὸς－ひどい

副詞と動詞に翻訳された形容詞もある。

- περίμηκες－そこで
- ἔμπυρον－火のついている
- ἀτελεῖς－羽の生えていなかった

名詞の場合には形式的な等価性が多い。

- ἀετὸς －ワシ
- ἀλώπηξ －キツネ

ダイナミックな等価性もある。

- τῷ θανάτῳ－死んだのを
- τῆς ἀμύνης－とれないのを
- ἀσεβείας－やぶった罰

以上のことを纏めると、文法的なレベルでは形式的な等価性があり、ダイナミックな等価性もある。和訳を分かりやすくするため、翻訳者は原本の意味を守りながら、簡単な単語を選んだ。例えば、「περίμηκες」は「そこであるもの」という意味であるが、「そこで」という簡単な単語に訳した。

語彙的な情報: 語彙的なレベルでは多型語と多義語がある。多型語の場合、形式的な等価性が多い。

- κατεθοινήσατο－たべてしまいました
- κατέπεσον－おちてきました
- κατέφαγεν－たべてしまいました

ダイナミックな等価性もある:

- καταφλεχθέντες－やけたまま
- ἐξελθούσης－出かけた

文体的な情報: 原本に比べると和訳の方が平易な表現をしている。例えば、動詞を和訳するとき、文末表現に「–ます」と「–です」の形を使っている。名詞の場合には漢字と平仮名の代わりにカタカナを使い、漢字には読み仮名を付けている。そうすることによって、テクストを分かりやすくしている。例えば、「鷲」の代わりに「ワシ」と表現した。「生け贄」という習慣を説明するために、翻訳者は迂言法を使って、「神々にささげる」と表現した。翻訳者は原本の意味を守りながら、色々な文体的な変更をしているのである。従って、文体的な情報の場合にはダイナミックな等価性に基づいて和訳したと考えられる。

意図に関する情報: 原本と和訳の目的が友情の重要性を教えるということでは同じであるが、両者の意図に関する情報には形式的な等価性はなく、ダイナミックな等価性であると思われる。翻訳者は、その教訓を現在の日本人の考えに合わせ、分かりやすくして提供している。

例 2. 鷲とセンチコガネ

原本:『イソップ：寓話』p. 34

ἀετὸς λαγωὸν ἐδίωκεν. ὁ δὲ ἐν ἀπορίᾳ τῶν βοηθησόντων ὑπάρχων、ὃν μόνον ὁ καιρὸς παρέσχεν、κάνθαρον ἰδὼν τοῦτον ἱκέτευεν、ὁ δὲ παραθαρσύνας αὐτὸν ὡς ἐγγὺς ἐλθόντα τὸν ἀετὸν ἐθεάσατο、παρεκάλει μὴ ἀπάγειν αὐτοῦ τὸν ἱκέτην. κἀκεῖνος ὑπεριδὼν τῆς σμικρότητος ἐν ὄψει τοῦ κανθάρου τὸν λαγωὸν κατεθοινήσατο. ὁ δὲ ἀπ’ ἐκείνου μνησικακῶν διετέλει παρατηρούμενος τοῦ ἀετοῦ τὰς καλιὰς καί、εἴ ποτε ἐκεῖνος ἔτικτε、μετάρσιος αἰρόμενος ἐκύλιε τὰ ὠὰ καὶ κατέασσε、μέχρις οὗ πανταχόθεν ἐλαυνόμενος ὁ ἀετὸς ἐπὶ τὸν Δία κατέφυγεν καὶ αὐτοῦ ἐδεήθη τόπον αὐτῷ πρὸς νεοττοποιίαν ἀσφαλῆ παρασχεῖν. τοῦ δὲ Διὸς ἐν τοῖς ἑαυτοῦ κόλποις τίκτειν ἐπιτρέψαντος αὐτῷ ὁ κάνθαρος τοῦτο ἑωρακὼς κόπρου σφαῖραν ποιήσας ἀνέπτη καὶ γενόμενος κατὰ τοὺς τοῦ Διὸς κόλπους ἐνταῦθα καθῆκεν. ὁ δὲ Ζεὺς ἀποσείσασθαι τὴν κόπρον βουλόμενος ὡς διανέστη、 ἔλαθεν ἀπορρίψας τὰ ὠά. ἀπ’ ἐκείνου τέ φασιν、περὶ ὃν καιρὸν οἱ κάνθαροι γίνονται、τοὺς ἀετοὺς μὴ νεοττεύειν.

ὁ λόγος διδάσκει μηδενὸς καταφρονεῖν λογιζομένους、ὅτι οὐδεὶς οὕτως ἐστὶν ἀδύνατος、ὡς προπηλακισθεὶς μὴ δύνασθαι ἑαυτὸν ἐκδικῆσαι.

翻訳 1:『イソップ寓話集』中務哲郎訳、第一部、p. 23

鷲が兎を追っていた。兎には助けてくれる者とてなかったが、ただひとつ、センチコガネを見つけたものを幸い、これに救いを求めた。センチコガネは兎を励まし、鷲が近づいてくるのを見ると、救いを求めて来た者を連れ去ってくれるな、と頼んだ．それなのに鷲は、センチコガネの小さいのを侮って、目の前で兎を平らげてしまった。

それ以来、センチコガネは恨みを忘れず、鷲の巣を身振り続けて、鷲が卵を生もうものなら、飛んで行って、卵を落として割ってやった。どこへ行っても追い出されるので、とうとう鷲は、ゼウスの所へ逃げこんで、安全な巣造りの場所をお願いした。鷲はゼウスの使わし婢であったのだ。

ゼウスは自分の懐で卵を生むことを鷲に許したが、それを見ていたセンチコガネ、糞団子を作るなり飛びたって、ゼウスの懐の真上に来ると、ポトリと落とした。ゼウスは糞を振り払おうと立ち上がったとたん、うっかり卵を放り出してしまった。これ以来、センチコガネの出る季節には、鷲は巣を造らないということだ。

踏みつけにされていつか仇うちができないほど無力な者はない、ということをよく考えれば、一寸の虫を侮るべきでないことを、この話は教えてくれる。

鷲とセンチコガネ	形式的な等価性	ダイナミックな等価性
語用論的な情報	作家：イソップ テクストの型：文化的な ジャンル：寓話	
状況的な情報		言語：原本－古代ギリシャ語 翻訳－現代日本語
文法的な情報	1. 動詞的な用法 1.1.動詞 ἐδίωκεν－追っていた ἱκέτευεν－救いを求めた παρεκάλει－頼んだ διετέλει－やった ἐκύλιε－落として κατέασσε－割って κατέφυγεν－逃げこんで ἐδεήθη－お願いした ἀνέπτη－飛びたって καθῆκεν－落として γίνονται－出る διδάσκει－教えてくれる 1.2.不定詞 τίκτειν－卵を生むこと μὴ νεοττεύειν－巣を造らないということ 1.3.分詞	1. 動詞的な用法 1.1.動詞 ἐθεάσατο－見る ἔτικτε－卵を生もう κατεθοινήσατο－平らげてしまった ἔλαθεν－うっかり διανέστη－振り払おう φασιν－ということだ 1.2.不定詞 μὴ ἀπάγειν－連れ去ってくれるな παρασχεῖν－であったのだ ἀποσείσασθαι－立ち上がった ἐκδικῆσαι－仇うちが καταφρονεῖν－踏みつけにされて μὴ δύνασθαι－できない 1.3.分詞

ἰδὼν－見つけた
παραθαρσύνας－励まし
ἐλθόντα－くる
ὑπεριδὼν－侮って
αἰρόμενος－飛んで行って
ἐλαυνόμενος－行って
ἐπιτρέψαντος－許した
ἑωρακὼς－見ていた
ἀπορρίψας－放り出してしまった

2. 名詞

2.1.名詞

ἀετὸς－鷲
λαγωὸν－兎
κάνθαρον－センチコガネ
καλιὰς－巣
ὠὰ－卵
νεοττοποιίαν－巣造り
τόπον－場所
κόλποις－懐
κόπρου－糞
σφαῖραν－団子
Ζεὺς－ゼウス
λόγος－話

2.2.分詞

τῶν βοηθησόντων－助けてくれるもの

2.3.代名詞

τοῦτον－これ

ὑπάρχων－とてなかった
παρατηρούμενος－続けて
ποιήσας－作る
γενόμενος－来る
βουλόμενος－(振り払)おうと
λογιζομένους－考えれば
προπηλακισθεὶς－仇うち

2. 名詞的な用法

2.1.名詞

ἀπορίᾳ－とてなかった
σμικρότητος－小さいの
ἱκέτην－救いを求めて来た者

2.2.代名詞

ὅν μόνον－ただひとつ
κἀκεῖνος－鷲
μηδενὸς－ない
οὐδεὶς－ない

3. 形容詞

μόνον－ひとつ
ἐγγὺς－近づいてくる
μνησικακῶν－忘れず
μετάρσιος－真上に

4. 前置詞

ἐν ἀπορίᾳ－とてなかった
ἐπὶ τὸν Δία－ゼウスの所

	ἑαυτοῦ－自分の τοῦτο－それ ἐκείνου－これ **3. 形容詞** ἀσφαλῆ－安全な ἀδύνατος－無力な **4. 前置詞** κατὰ τοὺς τοῦ Διὸς κόλπους－ゼウスの懐の真上に **5. 接続詞** εἴ－なら	に πρὸς νεοττοποιίαν－巣造りの ἀπ᾽ ἐκείνου－これ以来 περὶ ὅν－には **5. 接続詞** δέ－兎、センチコガネ κἀκεῖνος－鷲は ὅτι－ことを
語彙的な情報	**多義：** τοῦτον－これ τοῦτο－それ ἐκείνου－これ μηδενὸς－ない οὐδεὶς－ない Δία－ゼウス Ζεὺς－ゼウス	**多義：** δέ－兎、センチコガネ
文体的な情報		**1.**ἱκέτευεν ・τὸν ἱκέτην－ 救いを求めた・救いを求めて来た者
意図に関する情報	**原本と翻訳の教訓：** だれでもを不当に扱わないということしなくてはいけない	

語用論的・状況的な情報:語用論的な情報では原本と和訳の間に形式的な等価性があり、状況的な情報ではダイナミックな等価性がある。

文法的な情報:文法的な情報では形式的な等価性とダイナミックな等価性の両方が使われている。形式的な等価性に基づいて翻訳されたものには、次のような動詞、分詞、代名詞、前置詞、接続詞がある。

- ἐδίωκεν — 追っていた
- ἐλθόντα — くる
- ἀετὸς — 鷲
- τοῦτον — これ
- ἀσφαλῆ — 安全な
- εἴ — なら

ダイナミックな等価性に基づいて翻訳されたものには、次のような 動詞、分詞、代名詞、前置詞と接続詞がある。

- ἐθεάσατο — 見る
- ποιήσας — 作る
- σμικρότητος — 小さいの
- κἀκεῖνος — 鷲
- ἐγγύς — 近づいてくる
- πρός νεοττοποιίαν — 巣作りの

語彙的な情報:多義の例として「ゼウス」という名詞を取り上げる。ギリシャ語の固有名詞は名詞として考えられているので、主格、属格、与格、対格、呼格の五つの格に変化する。ゼウスという名詞は、主格が「Ζεὺς」、属格が「Διός」、与格が「Διί」、対格が「Δία」、呼格が「Ζεὺ」になる。日本語では名詞の格変化がないので、和訳するときは格助詞を使って、「Ζεὺς、 Διός 、Διί、 Δία と Ζεὺ 」が「ゼウスが、ゼウスの、ゼウスに、ゼウスを、ゼウス」と翻訳される。

「τοῦτος、ἐκεῖνος」という指示代名詞と「δέ」という接続詞が多義になる場合がある。これらの言葉の意味が文脈によって決まるからである。例えば、「τοῦτος、ἐκεῖνος」は文脈に従って「これ、それ」と翻訳されている。「δέ」は冠詞と一緒に使われて代名詞になる場合があるが、日本語への翻訳では、「δέ」の代わりに名詞を使っている。

文体的な情報:文体的な情報では形式的な等価性とダイナミックな等価性の両方がある。例えば、原本の「ἱκετεύω-請う」と「ἱκέτης-請った人」という単語は、古代ギリシャでは特殊な意味を持っていて、神さまや他の人に保護や助けを求めることを「ἱκετεύω」と言い、そうする人を「ἱκέτης」と言った。ギリシャの社会では、「ἱκέτης」はゼウス[95]によって保護された者と考えられ、誰も「ἱκέτης」に損傷を与えてはならないという風習がある。もし、損傷を与えれば神さまによって罰せられると考えられている。もし、「ἱκετεύω」「ἱκέτης」を形式的な等価性に基づいて「頼む」「頼んだ人」と翻訳すると、原本の概念と社会的な風習が失われてしまう。この場合には、ダイナミックな等価性に基づいて翻訳しなければならない。

意図に関する情報:意図に関する情報には形式的な等価性がある。原本・和訳とも同じ意意図を表す情報を示しているからである。両テクストとも「皆が尊敬されなければならない」と述べている。古代ギリシャの市民社会は民主主義に基づいていたので、市民権を持ったメンバーは「お互いに尊敬し合う」という社会的概念があった。

翻訳 2:『イソップの話』河野与一訳、p. 220

ワシがウサギを追いかけていました。ウサギは、まわりにたすけてくれるものがだれも見あたらなかったので、ちょうどそこに一ぴきだけいたコガネムシに、たすけてくれとたのみました。コガネムシはウサギに安心しろといって、ワシが近くまできたのを見ると、これはじぶんのところへ命ごいをしにきたウサギだから、さらっていくなといい

[95] ゼウスが「ξένιος」見知らぬ人と「ἱκετήσιος—ἱκέσιος」請った人の保護者呼ばれていた。

ました。けれどもワシは、コガネムシのちょっぽけなのをばかにして、目のまえでウサギをたべてしまいました。コガネムシはそのときから、いつまでもそのうちみを忘れずにいて、ワシの巣を見つけだしては、ワシがたまごを生むたびに、空中へ舞いあがって、たまごをころがしておとしてはわりました。しまいにワシはどこにもいられなくなりました。けれどもワシは、ゼウスの神の使いの鳥でしたから、ゼウスのところににげていった、この神さまにたのんで巣をつくるのに安全な場所をもらうことにしました。そこでゼウスはじぶんのふところにたまごを生んでもいいといいましたが、コガネムシはそれを見つけると、けもののふんの玉をこしらえてよじのぼり、ゼウスのふところの中におとしました。そこでゼウスは、ふんの玉をはらおうとおもって立ちあがると、うっかりしてワシのたまごをおとしてしまいました。そのときから、コガネムシが出てくる時節には、ワシは巣を作らなくなったということです。

どんなに力のないものでも、けいべつされてしかえしをすることができないものはないと考えて、人をばかにしてはいけません。

驚とセンチコガネ	**形式的な等価性**	**ダイナミックな等価性**
語用論的な情報	**作家**：イソップ **テクストの型**：文化的な **ジャンル**：寓話	
状況的な情報		**言語**：原本－古代ギリシャ語 翻訳－現代日本語
文法的な情報	**1. 動詞的な用法** **1.1.動詞** ἐδίωκεν－追いかけていました ἱκέτευεν－たのみました ἔτικτε－たまごを生む ἐκύλιε－おとして	**1. 動詞的な用法** **1.1.動詞** ἐθεάσατο－見る παρεκάλει－いいました κατεθοινήσατο－たべてしまいました κατέασσε－生む

κατέφυγεν－にげていって

ἐδεήθη－たのんで

γίνονται－出てくる

ἀνέπτη－のぼり

καθῆκεν－おとしました

διανέστη－立ちあがる

ἔλαθεν－うっかりして

φασιν－ということです

1.2.不定詞

παρασχεῖν－もらうこと

τίκτειν－巣をつくるのに

ἀποσείσασθαι－はらおうとおもって

μὴ νεοττεύειν－巣を作らなくなった

ἐκδικῆσαι－しかえしをすること

1.3.分詞

ἐλθόντα－きた

παρατηρούμενος－見つけだして

αἰρόμενος－あがって

ἑωρακὼς－見つける

ποιήσας－して

βουλόμενος－はらおう

ἀπορρίψας－おとしてしまいました

λογιζομένους－考えて

προπηλακισθεὶς－ばかにして

διετέλει－いつまでも

ἐστὶν－すること

1.2.不定詞

μὴ ἀπάγειν－さらっていく

καταφρονεῖν－しかえし

μὴ δύνασθαι－できない

1.3.分詞

ἰδὼν－見あたらなかった

παραθαρσύνας－安心しろ

ὑπεριδὼν－ばかにして

ἐλαυνόμενος－舞

ἐπιτρέψαντος－もらうことにしました

2. 名詞的な用法

2.1.名詞

ἀπορίᾳ－なかった

σμικρότητος－ちっぽけな

2.2.代名詞

κἀκεῖνος－ワシ

ἐκείνου－そのとき

μηδενὸς－ないものでも

οὐδεὶς－ないもの

3. 形容詞：

μόνον－だけ

ἐγγὺς－近く

μνησικακῶν－忘れずにいて

2. 名詞的な用法

2.1.名詞

ἀετὸς－ワシ

λαγωὸν－ウサギ

ἱκέτην－命ごい

καλιὰς－巣

ᾠὰ－たまご

τόπον－場所

νεοττοποιίαν－巣をつくる

κόλποις－ふところ

κόπρου－けもののふんの

σφαῖραν－玉

Ζεὺς－ゼウス

2.2.分詞

τῶν βοηθησόντων－たすけてくれるもの

2.3.代名詞

ἑαυτοῦ－ じぶん

τοῦτο－それ

ἑαυτὸν－人

3. 形容詞

ἀσφαλῆ－安全な

ἀδύνατος－力のない

4. 前置詞

πρὸς νεοττοποιίαν－巣をつくるのに

ἐν τοῖς κόλποις－ふところに

μετάρσιος－空中へ

4. 前置詞

ἐν ἀπορίᾳ－なかったので

ἐπὶ τὸν Δία－ゼウスのところに

5. 接続詞

κἀκεῖνος－けれどもワシは

δέ－ウサギ、センチコガネ

εἴ－たびに

	ἀπ’ ἐκείνου－ そのときから περὶ ὅν－時節には	
語彙的な情報	**多義：** μηδενὸς－ないものでも οὐδεὶς－ないもの Δία－ゼウス Ζεὺς－ゼウス	
文体的な情報		**1.**ἱκέτευεν ・τὸν ἱκέτην－ たのみました・命ごい
意図に関する情報	**原本と翻訳の教訓：** だれでもを不当に扱わないということしなくてはいけない	

語用論的・状況的な情報:語用論的な情報では原本と和訳の間に形式的な等価性があり、状況的な情報ではダイナミックな等価性がある。

文法的な情報:文法的な情報では形式的な等価性がある。

- ἐδίωκεν — 追いかけていました
- ἐλθόντα — きた
- ἀετὸς — ワシ
- τοῦτο — それ
- ἀσφαλῆ — 安全な

ダイナミックな等価性もある。

- ἐθεάσατο — 見る
- σμικρότητος — ちっぽけな
- κἀκεῖνος — けれどもワシ
- ἐγγύς — 近く

- εἴ — たびに

語彙的な情報:代名詞は、ギリシャ語ではよく使われ、日本語ではあまり使われないことから、一般的にギリシャ語の代名詞は日本語では名詞に翻訳される。しかし、「μηδένας」「οὐδείς」という不定代名詞の場合には、両方とも「ない」と翻訳されているので、「μηδένας」と「οὐδείς」は多義語と考えられる。
文体的な情報:「ἱκετεύω」が「頼む」と翻訳され、「ἱκέτης」が「命ごい」と翻訳されているので、ダイナミックな等価性がある。

意図に関する情報:意図に関する情報には形式的な等価性がある。原本と和訳の教訓が「誰をも不当に扱ってはいけない」というものである。古代ギリシャが民衆主義の社会で、日本の中世社会が封建制度に基づく社会であったが、両方とも「尊敬」が社会的な地位に関係しない概念として考えられている。

例 3.　水を打つ漁師

原本:『イソップ：寓話』p. 60

ἁλιεὺς ἔν τινι ποταμῷ ἡλίευε. καὶ δὴ κατατείνας τὰ δίκτυα ὡς ἐμπεριέλαβεν ἑκατέρωθεν τὸ ῥεῦμα、προσδήσας κάλῳ λίθον ἔτυπτε τὸ ὕδωρ、ὅπως οἱ ἰχθύες φεύγοντες ἀπροφυλάκτως τοῖς βρόχοις ἐμπέσωσι. τῶν δὲ περὶ τὸν τόπον οἰκούντων τις θεασάμενος αὐτὸν τοῦτο ποιοῦντα ἐμέμφετο αὐτὸν ὡς τὸν ποταμὸν θολοῦντα καὶ μὴ ἐῶντα αὐτοὺς διαυγὲς ὕδωρ πίνειν. ὁ δὲ ἀπεκρίνατο˙„ἀλλ’ ἐὰν μὴ οὕτως ὁ ποταμὸς ταράσσηται、ἐμὲ δεήσει λιμώττοντα ἀποθανεῖν.“

οὕτω καὶ τῶν πόλεων οἱ δημαγωγοὶ τότε μάλιστα ἐνεργάζονται、ὅταν τὰς πατρίδας εἰς στάσεις περιάγωσιν.

翻訳 1:『イソップ寓話集』中務哲郎訳、第一部、p. 41

漁師が川で漁していた。まず、流れの両岸に差し渡して網を張っておき、紐にくくりつけた石で水を打った。不意をつかれて逃げる魚が、網にかかるという寸法だ。

ところが、これを見ていた近所の住民が、川を濁し住みきった水を飲めなくするものだ、と文句を言うので、漁師は答えて、

「しかし、こうやって川をかいまぜないと、俺さまが飢え死にせにゃならん」

このように国の場合でも、扇動政治家は祖国を内紛へと誘導する時、最も力を発揮するのだ。

水を打つ漁師	形式的な等価性	ダイナミックな等価性
語用論的な情報	**作家**：イソップ **テクストの型**：文化的な **ジャンル**：寓話	
状況的な情報		**言語**：原本－古代ギリシャ語 翻訳－現代日本語
文法的な情報	**1. 動詞的な用法** **1.1.動詞** ἡλίευε－漁していた ἐμπεριέλαβεν－差し渡して ἔτυπτε－打った ἐμπέσωσι－かかる ἐμέμφετο－分句を言う ἀπεκρίνατο－答えた μὴ ταράσσηται－かきまぜない ἐνεργάζονται－発揮する περιάγωσιν－誘導する **1.2.分詞**	**1. 動詞的な用法** **1.1.動詞** δεήσει－にゃならん **1.2.不定詞** πίνειν－飲めなくするもの ἀποθανεῖν－死に **1.3.分詞** μὴ ἐῶντα－(飲)めなくする λιμώττοντα－飢え死に **2. 名詞的な用法** **2.1.名詞** πόλεων－国

κατατείνας－張っておき

προσδήσας－くくりつけて

φεύγοντες－逃げる

θεασάμενος－見ていた

ποιοῦντα－する

θολοῦντα－濁し住みきった

2. 名詞的な用法

2.1.名詞

ἁλιεὺς－猟師

ποταμῷ－川

δίκτυα－網

ὕδωρ－水

ἰχθύες－魚

ῥεῦμα－両岸

κάλῳ－紐

λίθον－ 石

βρόχοις－網

τόπον－所

δημαγωγοὶ－扇動政治家

πατρίδας－祖国

2.2.代名詞

τοῦτο－これ

3. 前置詞

ἔν ποταμῷ－川で

4. 接続詞

στάσεις－内紛

2.2.分詞

τῶν οἰκούντων－住民

3. 形容詞

διαυγὲς－濁し住みきった

4. 前置詞

περὶ τὸν τόπον－近所の

εἰς στάσεις－内紛へ

	ἀλλ’ ー しかし ἐὰν ー と	
語彙的な情報	**多型：** ἐμπεριέλαβεν ー 差 し 渡 し て ἐμπέσωσι ー かかる **多義：** πατρίδας ー 祖国	**多義：** πόλεων ー 国
文体的な情報	**1.**δημαγωγοὶ ー 扇動政治家	
意図に関する情報	**原本と翻訳の教訓：** 政治家が力を発揮する	

語用論的・状況的な情報:語用論的な情報では形式的な等価性があり、状況的な情報ではダイナミックな等価性がある。

文法的な情報:文法的な情報は形式的な等価性に基づいて翻訳されている。

- ἡλίευε — 漁していた
- φεύγοντες — 逃げる
- άλιεὺς — 漁師
- τοῦτο — これ
- ἔν ποταμῷ — 川で
- ἐάν — と

ダイナミックな等価性もある。

- ἀποθανεῖν — 死に
- πόλεων — 国
- τῶν οἰκούντων — 住民
- εἰς στάσεις — 内紛へ

語彙的な情報:多型語の例として「ἐμπεριέλαβεν、ἐμπέσωσι」 を取り上げる。この二つの動詞の中に「ἐν」という接頭辞がある。「ἐν」の意味が「中」であるので、「ἐμπεριέλαβεν」の意味が「中に入れる」になり、「ἐμπέσωσι」の意味が「中に落とす」になる。しかし、「ἐμπεριέλαβεν」が「差し渡す」と翻訳され、「ἐμπέσωσι」が「かかる」と翻訳されている。接頭辞が翻訳されないで、言葉の意味に従って翻訳されているので、形式的な等価性ではなく、ダイナミックな等価性である。

文体的な情報:文体的な情報は形式的な等価性に基づいて翻訳されている。例えば、「δημαγωγός」が「扇動政治家」と翻訳されている。古代ギリシャでは、「δημαγωγός」がレトリックな表現として「政権を獲得しようとしている者」という意味で、「市民の指揮者」を表していたが、デモクラシーの時代からこの単語は悪い意味で使われるようになった。従って、「δημαγωγός」を「扇動政治家」とする翻訳は、形式的な等価性になる。

意図に関する情報:原本と和訳の両方が同じ意図の情報を示している。両方とも、政権を獲得したがっている政治家が市民をおだてて、うれしがらせる話を述べて、市民に「そうした政治家を信用してはいけない」という教訓を提示している。従って、意図に関する情報では形式的な等価性がある。

翻訳 2:『イソップの話』河野与一訳、p. 192

ひとりの漁師が、ある川で、漁をしていました。まず、川の両がわにとどくように、あみをはって、そのつなに石をむすびつけ、水をかきまわして、にげる魚があわててあみの目にひっかかるようにしました。そのそばに住んでいた人が、漁師がそうやっているのを見て、川をにごらせてきれいな水をのめなくしてはこまると、もんくをいいました。すると、漁師はこたえました。

「しかし、川がこういうふうににごらないと、わたしのほうが飢え死をしてしまう。」

ほうぼうの国で人々をおだてる政治家というものは、国にごとごとをおこそうとするときには、ちょうどこういうふうなことをします。

漁師	形式的な等価性	ダイナミックな等価性
語用論的な情報	作家：イソップ テクストの型：文化的な ジャンル：寓話	
状況的な情報		言語：原本－古代ギリシャ語 翻訳－現代日本語
文法的な情報	1. 動詞的な用法 1.1.動詞 ἡλίευε－漁をしていました ἐμπεριέλαβεν－とどく ἔτυπτε－ かきまわして ἐμπέσωσι－かかる ἀπεκρίνατο－こたえました μὴ ταράσσηται－いらない ἐνεργάζονται－おだてる περιάγωσιν－おこそうとする 1.2.不定詞 ἀποθανεῖν－飢え死をしてしまう 1.3.分詞 κατατείνας－はって προσδήσας－むすびつけ φεύγοντες－にげる	1. 動詞的な用法 1.1.動詞 ἐμέμφετο－いいました 1.2.不定詞 πίνειν－のめなくしては 1.3.分詞 μὴ ἐῶντα－(のめ)なくしては λιμώττοντα－飢え死を 2. 名詞的な用法 2.1.名詞 τόπον－そのさばに πόλεων－国 πατρίδας－国 δημαγωγοὶ－おだてる政治家 στάσεις－ごたごた

	θεασάμενος－見て θολοῦντα－にごらせて **2. 名詞的な用法** **2.1.名詞** ἁλιεὺς－猟師 ποταμῷ－川 δίκτυα－あみ ῥεῦμα－両がわ κάλῳ －つな λίθον－ 石 βρόχοις－あみの目 ὕδωρ－水 ἰχθύες－魚 **2.2.分詞** τῶν οἰκούντων－住んでいた **2.3.代名詞** τοῦτο－これ **3. 形容詞** διαυγὲς－きれいな **4. 前置詞** ἔν ποταμῷ－川で περὶ τὸν τόπον－そのそばに **5. 接続詞** ἀλλ’ －しかし ἐὰν－と	**3. 形容詞** τινι－ある **4. 前置詞** εἰς στάσεις－ごたごたを

語彙的な情報	**多型：** ἐμπεριέλαβεν－とどく ἐμπέσωσι－かかる	**多義：** πόλεων－国 πατρίδας－国
文体的な情報		**1.**δημαγωγοὶ－おだてる政治家
意図に関する情報	**原本と翻訳の教訓：** 政治家が力を発揮する	

語用論的・状況的な情報:語用論的な情報では形式的な等価性に基づいて翻訳され、状況的な情報ではダイナミックな等価性に基づいて翻訳されている。

文法的な情報:文法的な情報では形式的な等価性とダイナミックな等価性がある。形式的な等価性の例：

- ἡλίευε — 漁をしていました
- φεύγοντες — にげる
- άλιεὺς — 猟師
- τοῦτο — これ
- ἔν ποταμῷ — 川で
- ἐάν — と

ダイナミックな等価性の例：

- ἐμέμφετο — いいました
- πόλεων — 国
- τινι — ある
- εἰς στάσεις — ごたごた

語彙的な情報:多義語の例として「πόλις[96]」と「πατρίς」という単語を取り上げる。前者が「都市」という意味で、後者が「祖国」という意味であるが、両方とも「国」と翻

[96] 古代ギリシャでは、皆が一つの民族に属したが、それぞれの「πόλις」が別の政府があったので、別の州として考えられていた。

訳されている。翻訳者は、現代日本人の考えに基づいて翻訳し、読者に分かりやすくするため、二つの言葉を「国」と翻訳した。従って、「πόλις」と「πατρίς」の場合にはダイナミックな等価性になる。

文体的な情報:文体的な情報はダイナミックな等価性に基づいても翻訳されている。例えば、「πόλις」と「πατρίς」が「国」と翻訳され、「δημαγωγός」が「おだてる政治家」と翻訳されているが、これは今日の日本人の考え方に合わせて翻訳しているので、文体的にもダイナミックな等価性を使っていることになる。

意図に関する情報:原本と和訳の目標が同じであるので、意図の情報には形式的な等価性がある。原本・和訳の両方とも、「政治家は、政権を獲得するために、時々レトリックな表現を使い、市民をうれしがらせる」と述べて、市民に「そうした政治家の言葉を信じてはいけない」「政治家の話は論理的に判断しなさい」という教訓を教えることが目標になっている。

例 4.　ヘラクレスとプルトス

原本:『イソップ：寓話』p. 154

Ἡρακλῆς ἰσοθεωθεὶς καὶ παρὰ Διὶ ἑστιώμενος ἕνα ἕκαστον τῶν θεῶν μετὰ πολλῆς φιλοφροσύνης ἠσπάζετο. καὶ δὴ τελευταίου εἰσελθόντος τοῦ Πλούτου κατὰ τοῦ ἐδάφους κύψας ἀπεστρέψατο αὐτόν. ὁ δὲ Ζεὺς θαυμάσας τὸ γεγονὸς ἐπυνθάνετο αὐτοῦ τὴν αἰτίαν, δι᾽ ἣν πάντας τοὺς δαίμονας ἀσμένως προσαγορεύσας μόνον τὸν Πλοῦτον ὑποβλέπεται. ὁ δὲ εἶπεν˙ „ἀλλ᾽ ἔγωγε διὰ τοῦτο αὐτὸν ὑποβλέπομαι, ὅτι, παρ᾽ ὃν καιρὸν ἐν ἀνθρώποις ἦμην, ἑώρων αὐτὸν ὡς ἐπὶ τὸ πλεῖστον τοῖς πονηροῖς συνόντα.“

ὁ λόγος λεχθείη ἄν ἐπ᾽ ἀνδρὸς πλουσίου μὲν τὴν τύχην, πονηροῦ δὲ τὸν τρόπον.

翻訳 1:『イソップ寓話集』中務哲郎訳、第一部、p. 101

ヘラクレスは神の列に加えられ、ゼウスの館で歓待された時、一人一人の神様に実に愛想よく挨拶をしたのに、最後にプルトスは入って来ると、床に目を落とし、背中を向けてしまった。ゼウスがこれを訝って、どの神様にも機嫌よく語りかけながら、ひとりプルトスを白眼視するのはなぜか、と尋ねたところ、ヘラクレスの言うには、

「わたしが白い眼で見るのは他でもありません。人間の世界にいた時、あいつが大抵悪い奴らと一緒にいるのを見たからです」

連よく金持になっている性悪人間について、この話をすることができよう。

ヘラクレスとプルトす	形式的な等価性	ダイナミックな等価性
語用論的な情報	**作家**：イソップ **テクストの型**：文化的な **ジャンル**：寓話	
状況的な情報		**言語**：原本－古代ギリシャ語 翻訳－現代日本語
文法的な情報	**1. 動詞的な用法** **1.1.動詞** ἠσπάζετο－挨拶をした ἀπεστρέψατο－背中を向けてしまった ἐπυνθάνετο－尋ねた ὑποβλέπεται－白眼視する ἦμην－いた **1.2.分詞** ἑστιώμενος－館で歓待された εἰσελθόντος－入ってくる κύψας－床に…落とし θαυμάσας－訝って	**1. 動詞的な用法** **1.1.動詞** ἔγωγε－他でもありません εἶπεν－言う ὑποβλέπομαι－白い眼で見る λεχθείη－ 話をする **1.2.分詞** ἰσοθεωθεὶς－神の列に加えられ προσαγορεύσας－語りかけ συνόντα－一緒にいる

	ἑώρων－見た **2. 名詞的な用法** **2.1.名詞** Ἡρακλῆς －ヘラクレス Διὶ－ゼウス Πλούτου－プルトス θεῶν－神 φιλοφροσύνης－愛想よく ἐδάφους－床 Ζεὺς－ゼウス δαίμονας－神様 καιρὸν－時 ἀνθρώποις－人間の世界 λόγος－話 τύχην－運 τρόπον－ 性 **2.2.代名詞** ἕνα ἕκαστον－一人一人 αὐτοῦ－これ **3. 形容詞** μόνον－ひとり πονηροῖς－悪い πλουσίου－ 金持ち πονηροῦ－(性)悪 **4. 前置詞** κατὰ τοῦ ἐδάφους－床に ἐν ἀνθρώποις－人間の世	**2. 名詞的な用法** **2.1.名詞** γεγονὸς－これ αἰτίαν－なぜか ἀνδρὸς－人間 **3. 形容詞** ἕκαστον－一人一人 πολλῆς－よく τελευταίου－最後に πάντας－どの－ **3. 前置詞** παρὰ Διὶ－ゼウスの館で μετὰ φιλοφροσύνης－よく愛想を παρ’ ὅν－いた時 ἐπ’ ἀνδρὸς－人間について **4. 接続詞** δέ－ヘラクレス

	界に διὰ τοῦτο－からです	
語彙的な情報	**多型：** φιλοφροσύνης－愛想よく ἰσοθεωθεὶς－神の列に加えられ **多義：** θεῶν－神 δαίμονας－神様 ἀνθρώποις－人間 ἀνδρὸς－人間	
文体的な情報	**1.**ἰσοθεωθεὶς－神の列に加えられ	
意図に関する情報	**原本と翻訳の教訓：** 連よく金持になっている性悪人間	

語用論的・状況的な情報:語用論的な情報には形式的な等価性があり、状況的な情報にはダイナミックな等価性がある。

文法的な情報:文法的な情報は形式的な等価性に基づいて翻訳されている。

- ἐπυνθάνετο – 尋ねた
- εἰσελθόντος – 入ってくる
- Ἡρακλῆς – ヘラクレス
- Αὐτοῦ - これ
- Πονηροῖς – 悪い
- Διὰ τοῦτο – からです

ダイナミックな等価性もある。

- λεχθείη – 話をする
- αἰτίαν – なぜか
- ἀνδρός – 人間
- παρὰ Διὶ - ゼウスの館で
- δέ – ヘラクレス

語彙的な情報:多型語の例として「φιλοφροσύνη」と「ἰσοθεωθείς」を取り上げる。「φιλοσοφία、φιλολογία[97]」など、色々なギリシャ語の言葉には「φιλεῖν」という単語が入っている。「Φιλοφροσύνη」は「φιλεῖν」と「φρόνησις」に由来する。この単語の文字通りの意味は「優しい言葉を使って、人々に愛の気持ちを表現する」ということであり、日本語に翻訳すると「愛想よく」となる。従って、「愛想よく」という翻訳は、形式的な等価性に基づいている。一方、「ἰσοθεωθείς」は「ἴσος(=等しい)」と「θεός(=神)」に由来し、「神と等しくなる」という意味である。それを「神の列に加えられ」と翻訳したのは、ダイナミックな等価性に基づいている。

多義語の例として「θεός、δαίμονας、ἄνθρωπος、ἀνήρ」を取り上げる。「θεός、δαίμονας」の二つの単語の意味が両方とも「神」であり、両方とも「神」と翻訳されている。従って、その翻訳は形式的な等価性に基づく。一方、「ἄνθρωπος、ἀνήρ」の前者が「人」を意味し、後者が「人と男」を意味するが、原本では「ἄνθρωπος、ἀνήρ」の両方とも「人」を意味し、和訳では「人間」と翻訳されているので、形式的な等価性になる。従って、「θεός、δαίμονας、ἄνθρωπος、ἀνήρ」は形式的な等価性に基づいて翻訳されていることになる。

文体的な情報:文体的な情報では形式的な等価性がある。例として、「ἰσοθεωθείς」を取り上げる。古代ギリシャでは人間は神と同等ではなかったが、「ἰσοθεωθείς=神と等しい」という言葉が偉大な人に対する敬称として使われた。例えば、ホメロスがイリアス

[97]「Φιλοσοφία」の文字通り意味が「知識についての愛」であるが、日本語への翻訳が「哲学」である。同じように、「φιλολογία」の文字通り意味が「ロゴスについての愛」であるが、日本語への翻訳が「言語学」である。

のアキレウスについて語るとき、「ἰσοθεωθείς」を使っている。従って、「ἰσοθεωθείς」からヘラクレスが偉大な人であったことが分かるが、和訳でも「ヘラクレスは神の列に加えられる」と表現しているので、ヘラクレスが卓越した人であったことが分かる。従って、原本と和訳には形式的な等価性がある。

意図に関する情報:意図に関する情報は形式的な等価性に基づいて翻訳されている。原本・和訳とも「人間はいつでも道徳的な価値を尊重しなければならない」という同じ意図の情報を提示している。時には、「金持ちになる」という非倫理的な行為が必要であると考えられるが、そうすれば、社会の風習に反する者になってしまうと警告しているのである。

翻訳 2:『イソップの話』河野与一訳、p. 306

ヘラクレスが神さまのなかまに入れてもらって、食事のときにはゼウスのそばにすわり、神さまがたにおちいち、あいそうよくあいさつしました。ところが、一ばんあとから富の神がはいってくると、床のほうに目を伏せて顔をそむけました。それを見ておどろいたゼウスは、ヘラクレスに、どうしてほかの神々にはあんなにあいそうよくはなしかけながら、富の神だけにはいやな顔をするのかとききました。するとヘラクレスはいいました。

「いや、あの神にいやな顔をするのは、わたしがむかし、人間のあいだにおりましたじぶん、富の神が、たいていいつも悪い人間とばかりいっしょにいるのを見かけたからです。」

この話は、うんよく金もちにはなったけれども性質のよくない人にするといいのです。

ヘラクレスと富の神	形式的な等価性	ダイナミックな等価性
語用論的な情報	作家：イソップ テクストの型：文化的な ジャンル：寓話	

状況的な情報		言語：原本－古代ギリシャ語 翻訳－現代日本語
文法的な情報	**1. 動詞的な用法** **1.1.動詞** ἠσπάζετο－あいさつしました ἀπεστρέψατο－顔をそむけました ἐπυνθάνετο－ききました ὑποβλέπεται－目を伏せて εἶπεν－いいました ὑποβλέπομαι－いやな顔をする ἦμην－おりました **1.2.分詞** ἰσοθεωθεὶς－神さまのなかまに入れてもらった εἰσελθόντος－はいてくる θαυμάσας－見ておどろいた προσαγορεύσας－あんなにあいそうよくはなしかけながら ἑώρων－見かけた συνόντα－いっしょにいる **2. 名詞的な用法** **2.1.名詞** Ἡρακλῆς －ヘラクレス Διὶ－ゼウス	**1. 動詞的な用法** **1.1.動詞** ἔγωγε－いや λεχθείη－ いいのです **1.2.分詞** ἑστιώμενος－食事のことに κύψας－床のほうに…伏せて **2. 名詞的な用法** **2.1.名詞** γεγονὸς－それ αἰτίαν－どうして ἀνδρὸς－人 **3. 形容詞** πολλῆς－よく τελευταίου －一ばんあとから πάντας－ほかの μόνον－だけには πονηροῦ－よくない **4. 前置詞** μετὰ φιλοφροσύνης－あいそうよく

	θεῶν－神さま φιλοφροσύνης－あいそうよく Πλούτου－富 ἐδάφους－床 Ζεὺς－ゼウス δαίμονας－神々 ἀνθρώποις－人間 λόγος－話 τύχην－運 τρόπον－ 性 **2.2.代名詞** ἕνα ἕκαστον－いちいち αὐτοῦ－それ **3. 形容詞** πονηροῖς－悪い πλουσίου－ 金もち **4. 前置詞** παρὰ Διὶ－ゼウスのそばに κατὰ τοῦ ἐδάφους－床のほうに ἐν ἀνθρώποις－人間のあいだに διὰ τοῦτο－からです	ἐπ’ ἀνδρὸς－人にする παρ’ ὅν－むかし **5. 接続詞** δέ－ヘラクレス
語彙的な情報	**多型：** ἰσοθεωθεὶς－神さまのなかまに入れてもらった φιλοφροσύνης－あいそう	

	よく **多義：** θεῶν－神さま δαίμονας－神々 Διὶ－ゼウス Ζεὺς－ゼウス	
文体的な情報	**1.**ἰσοθεωθεὶς－神さまのなかまに入れてもらって	
意図に関する情報	**原本と翻訳の教訓：** 連よく金持になっている性悪人間	

語用論的・状況的な情報:語用論的な情報では形式的な等価性があり、状況的な情報ではダイナミックな等価性がある。

文法的な情報:文法的な情報では、ほとんどの場合に形式的な等価性がある。

- ἐπυνθάνετο – ききました
- εἰσελθόντος – はいてくる
- Ἡρακλῆς – ヘラクレス
- Πονηροῖς – 悪い
- Διὰ τοῦτο – からです

ダイナミックな等価性もある。

- λεχθείη – いいのです
- αἰτίαν – どうして
- ἀνδρός – 人
- δέ – ヘラクレス

語彙的な情報: 語彙的な情報で形式的な等価性のある多義語の例：

- θεῶν – 神さま
- δαίμονας – 神々
- Διὶ - ゼウス
- Ζεὺς – ゼウス

ダイナミックな等価性のある多義語の例：

- ἰσοθεωθεὶς – 神さまのなかまに入れてもらった
- φιλοφροσύνης – あいそうよく

文体的な情報:文体的な情報では形式的な等価性がある。例えば、原本でヘラクレスが偉大な人であったことを表すために、「神と等しくなった」と述べている。和訳でも、ヘラクレスが卓越した者であったので、「神さまの仲間に入った」と述べている。原本・和訳とも同じ意味の情報を提示している。

意図に関する情報:意図に関する情報には形式的な等価性がある。原本と和訳の教訓として、「人間の一つの大切な義務は道徳的な価値観を守ることである」と言っている。社会の風習に反しない者が皆に尊敬されるのである。

5.1.2. 文化的な分析

前章までで寓話についての言語的な分析を終わり、この章では寓話の文化的な分析を行う。古代ギリシャの寓話に表されている社会的・文化的な特徴や考え方について、古代ギリシャと日本の間での相違点と類似点を分析することにする。

例 1. 鷲と狐

・「友愛」と「天罰」の文化的な意義

寓話「鷲と狐」では、全く違う種類の動物である鷲と狐が友達になる。しかし、鷲が狐との友愛を尊重せず、狐の子供を食べてしまい、神に罰せられる。こうした内容の

「鷲と狐」を読むと、友人関係では友愛が大切であること、性格の異なる人間でも友人になれるが、友人関係を守るためには友愛を尊重しなければならないことが分かってくる。さらに、狐の子供を殺した鷲が天罰を受けたのと同じように、罪を犯すと神に罰せられることが分かる。古代ギリシャ人は、「ヒブリス（傲慢）にはネメシス（天罰）が下る」と考えていた。「ネメシス」はギリシャ神話の女神ネメシス[98]であり、人間が神に犯す無礼に対する神の憤りと罰を象徴する女神である。古代ギリシャ人は、人間が神々の規則を尊重しないと、ネメシスによって罰せられると考えていた。古代ギリシャの演劇は、「ヒブリスーネメシスーカタルシス」という型式に基づいていた。カタルシスとは、劇の中の英雄と観客の間に通じ合う霊魂（気持・心）である。英雄が過ちを犯せば、必ずネメシスによって罰せられる。ネメシスによるこうした教訓の産物として、カタルシスが生まれたのである。イソップは劇を書かなかったが、彼も教訓的な物語を作りたかったので、しばしば自分の寓話で「ヒブリスーネメシスーカタルシス」の形式を使っている。「狐と鷲」の場合には、鷲が友人を害して社会的な規則を尊重しなかったので、ネメシスによってに罰せられた。こうした寓話を通して、観客に友愛を尊重しなければならないことを教えているのである。

以上のように、「鷲と狐」の寓話から、ギリシャの社会では、「友愛を尊重する」「人間が過ちを犯せば、天罰を受ける」という二つの事が分かる。この二つの価値観は、ギリシャだけでなく、日本でも同じである。

例 2.　鷲とセンチコガネ

・「イケティス[99]」と「尊敬」の文化的な意義

「鷲とセンチコガネ」の寓話から「イケティス」という概念について教えられる。古代ギリシャでは、神などに助けを求める人を「イケティス」と呼び、皆がイケティスを守らなければならないという社会的な規則があった。犯罪者や悪人であっても、イケティスになれば守られたのである。

[98] ヘーシオドスの『神統記』によるとネメシスはニュクス(夜)という女神の娘であった。
[99] 哀願する人

「イケティス」について、アイスキュロスとエウリピデスも悲劇を書いている。アイスキュロスの『嘆願する女たち』(ギリシャ語で Iketides)では、ダナオスの 50 人の娘たちがダナオスの双子の兄弟の息子たちとの結婚を拒否するために、イケティスとして父と共にアルゴスへ逃れて、アルゴス王ペラスゴスに助けを求めた。アルゴス王は、息子たちが住むアイギュプトスの人々に攻撃されるのを恐れて、嘆願する娘たちを助けたくなかったが、イケティスの保護神であるゼウスの怒りが怖かったので、ダナオスと娘たちを守ることに決心した。そして、アイギュプトス人がアルゴスに向かってくると、アルゴス人はアイギュプトス人を追い返すことになった。

エウリピデスの悲劇では、テーベの王オイディプスがテーベを去った後に、ポリュネイケースとエテオクレースというオイディプスの二人の息子たちがテーベの王座をめぐって、テーベの縄張り争いを始めた。ポリュネイケースはアドラストスというアルゴス王の娘と結婚していたので、彼の側にアルゴス軍隊がついていた。しかし、ポリュネイケースとエテオクレースは二人とも死んでしまった。その後、クレオンがテーベの王になって、「侵略者を埋葬してはいけない」という法令を定めた。兄弟の母親は、息子たちを埋葬したいので、クレオンが定めた法令を覆してもらうために、イケティスとしてアテネ王テーセウスの所に行った。テーセウスは、最初のうちは助けたくなっかたが、彼の母親の話を聞いて、 嘆願する女たちを助けるとにした。テーセウスの助けのおかげで、死者は埋葬され、休息することができた。以上のように、二つの悲劇を見ると、古代ギリシャでは「イケティス」が守られていたことが分かる。

日本には、「イケティス」のような社会的・伝統的な規則がなかった。従って、「イケティス」という言葉を和訳するときには、二つの可能性がある。もし、カタカナで「イケティス」と訳せば、翻訳者はイケティスについてもっと詳しい説明を付けなければならない。漢字と平仮名で訳す場合には、翻訳者は「イケティス」の意味が分かるような日本語の表現を工夫しなければならない。

「尊敬」について、古代ギリシャ人は、全ての人々を尊敬しなければならないと考えていた。「尊敬」は、人間の社会的な地位などに関係のない価値観であり、皆の義務であった。一方、日本では、封建的な階級制度や儒教的な身分制度に基づく社会であった

ので、「尊敬」は大切な道徳的価値観ではあったが、階級や身分の違いによって尊敬の意味が違った。

例 3.　水を打つ猟師

・地理的な類似性

イソップは、面白い物語を分かりやすく語るために、ギリシャ人の日常的な生活を寓話の題材にした。例えば、寓話の主人公として、飾り屋・船員などの伝統的な仕事をしている人を選んだ。「水を打つ漁師」という寓話では、「デマゴーグ」という扇動政治家について話すために漁師を選んだ。ギリシャは、海の国であるので、漁師は最も一般的な仕事である。この物語を和訳するときに、主人公についての説明をする必要がない。ギリシャと日本は、遠く離れているが、両国とも海の国であり、同じ緯度にあるという地理的な類似性を持っているからである。

ギリシャは島の多い国であり、温帯気候の国である。冬は温和であり、夏は暑くて乾燥している。ギリシャには 2,500 の島があり、人が住んでいる島は 165 である。日本も島の多い国であり、温帯気候の国である。日本には、7,000 の島があり、その殆どが火山島である。以上のように、ギリシャと日本は地理的に類似した特徴を持っている。多くの研究者によると、気候は人間の外見と考えに影響を与えるという。気候によって人間の生き方が決まるので、気候は人間の文化に影響を与えるのである。そのために、両国は、仕事・食べ物・動物などの日常的なレベルでも色々な類似点があり、人間としての特徴も同じようになった。一般的に温帯気候の国は文化的な歴史が長いという特徴がある。

例 4.　ヘラクレスとプルトス

・神と人間の関係

イソップの寓話には、ギリシャの神話の色々な要素が入っている。「ヘラクレスとプルトス」の寓話には、ギリシャ神話のヘラクレスとオリンポス山の神々が登場する。ギリシャ神話には、「人間の社会」と「神々の社会」があり、二つの社会は離れているが、時々、神が人間の社会や人生に介入する。日本にも沢山の神話があり、多くの研究者によると、ギリシャ神話と日本神話の間には多くの類似点があるという。日本神話でも、神々が人間の世界を創造し，人間の社会や人生に介入して、人間を助けることもあれば、罰することもある。従って、古代ギリシャの「神と人間の関係」を和訳するときに、詳しい説明をする必要がない。

日本とギリシャには、 古代の天地創造から神々の誕生について書かれた書物がある。ギリシャでは、紀元前 700 年頃に古代ギリシャの詩人ヘーシオドスが『神統記』という叙事詩を書いた。『神統記』は、カオス(混沌、ギリシャ語で Χάος)からの天地創造、神々の系譜とその三代にわたる政権交代劇を表し、ギリシャ神話の世界観の原典とされる。カオスからニュクス(夜)、エレボス(冥界)が生まれ、ガイア(大地)からウーラノス(天空)が生まれた。そして、最初はウーラノスの時代、次にクロノス(時間)の時代、最後にゼウスの時代へと、三代にわたる神々の政権時代が書かれている。

日本にも、712 年に太安萬侶が撰録した日本最古の歴史書である『古事記』がある。『古事記』には、天地創造から神々の誕生と天皇家へと繋がる系譜が書かれている。『古事記』の天地創造の神話は、最初に混沌としていた世界が天と地に分れたことから始まる。それから、天の高天原に神が現れ、神の時代が何代か続いて、最後に伊弉諾と伊弉冉尊の夫婦神によって日本の国土が造られ、多くの神々が生まれた。

ギリシャと日本のこうした最古の歴史書を見ると、天地創造や神々の誕生に関して、二つの民族は同じように考えていたことが分かる。

5.2. アリストパネースの『蜂』

5.2.1. 言語的な分析

例　1

Φιλοκλέων: οἱ μέν γ’ ἀποκλάονται πενίαν αὑτῶν　καὶ προστιθέασι　564
κακὰ πρὸς τοῖς οὖσιν、ἕως ἄνἰὼν ἀν ισώσῃ τοῖσιν
ἐμοῖσιν·
οἱ δὲ λέγουσιν μύθους ἡμῖν、οἱ δ’ Αἰσώπου τι γέλοιον·
οἱ δὲ σκώπτουσ’、ἵν’ ἐγὼ γελάσω καὶ τὸν θυμὸν
καταθῶμαι.　567

ピロクレオーン:　ある者は己れの貧乏を楯に泣きごとを言い、実際以上に不幸を並べたてるから、遂にはわしの不幸にも匹敵するほどになる。
ある者は作り話をしてみせ、ある者はイソップの滑稽な話をする。
ある者は冗談で笑わせ、怒りを収めさせようとする。

例　I	形式的な等価性	ダイナミックな等価性
語用論的な情報	作家：アリストパネース テクストの型：文化的な ジャンル：喜劇	
状況的な情報		言語：原本－古代ギリシャ語 翻訳－現代日本語
文法的な情報	1.　動詞的な用法 1.1.動詞	1.　動詞的な用法 1.1.動詞

	ἀποκλάονται－泣きごと言い προστιθέασι－並べたてる γελάσω－笑わせ λέγουσιν－作り話をして、滑稽な話をする καταθῶμαι－怒りを収めさせようとする **1.2.分詞** ἄνἰὼν－匹敵する **2. 名詞的な用法** **2.1.名詞** πενίαν－貧乏 μύθους－作り話 Aἰσώπου－イソップ θυμὸν－怒り **2.2.代名詞** αὐτῶν－己れ ἐμοῖσιν－わし **3. 形容詞** κακὰ－不幸 γέλοιον－滑稽な **4. 前置詞** πρὸς－に **5. 接続詞** καὶ－てから	ισώσῃ－匹敵するほどになる σκώπτουσ’－冗談 **2. 接続詞** οἱ μέν－ある者 οἱ δὲ－ある者

語彙的な情報		**多義：** οἱ μέν－ある者 οἱ δὲ－ある者
文体的な情報		**1.**οἱ δὲ λέγουσιν μύθους ἡμῖν 、 οἱ δ’ Αἰσώπου τι γέλοιον˙οἱ δὲ σκώπτουσ’ […] ある者は作り話をしてみせ、ある者はイソップの滑稽な話をする。ある者は冗談で笑わせ[…]
意図に関する情報	**原本と翻訳の教訓:**イソップの寓話が裁判所に使われていたストラテジーとして考えられていた。	

語用論的・状況的な情報:語用論的な情報は、形式的な等価性に基づいて翻訳されている。原本と和訳は、作者がアリストパネースであり、文化的な悲劇のテクストであることなどの語用論的な情報が同じである。一方、状況的な情報にはダイナミックな等価性がある。

状況的な情報は、原本が古代ギリシャ語で書かれ、和訳が現代日本語で書かれていることなどである。

文法的な情報:文法的な情報では、形式的な等価性がほとんどである:

- γελάσω – 笑わせ
- Αἰσώπου – イソップ
- εμοῖσιν – わし
- πρὸς – に

語彙的な情報:多義語の例として「οἱ μέν」と「οἱ δέ」を取り上げる。 「μέν」と「δέ」は、ギリシャ語の対照的な逆接の接続詞であるが、冠詞と一緒に使われると名詞

になる。例えば、原本の「οἱ μέν」と「οἱ δέ」の意味は、「裁かれた人」という意味になる。和訳では、両方とも「ある者」と翻訳されているので、ダイナミックな等価性になる。

文体的な情報:アリストパネースは「イアンボス」と「トロカイオス」という韻律の二つの基本単位（メトロンという）を使った。『ギリシャ喜劇全集』[100]によれば 、イアンボスという韻律の脚は U — であるが、韻律のメトロンは X— U — (U は短い音節、—は長い音節、X はアンケプスと言い、短い音節でも長い音節でもよい)であり、これを複数回繰り返して一行を形成する。三回繰り返すイアンボストリメトロス「X — U — X — U — X —U—」は喜劇・悲劇の対話場面の主要な韻律である。一方、トロカイオス[101]という韻律の脚は— U であるが、韻律のメトロンは— U — X である。これを四回繰り返して一行を形成するトロカイオステトラメトロス「— U — X— U — X— U — X— U — 」(行末のアンケプスは欠けている)はアゴーンなどの場面で台詞の韻律として使われた。

喜劇の和訳で原本の韻律を守ることは難しいので、文体的な情報では形式的な等価性ではなく、ダイナミックな等価性になる。

意図に関する情報:意図に関する情報は形式的な等価性に基づいて翻訳されている。原本と和訳の両方とも、イソップの寓話が楽しくて教訓に満ちた有名な物語であったので、人々が色々な場面でそれらを活用していたという点では同じである。例えば、被告人が裁判官に自分の潔白を弁明するために、イソップの寓話を利用したが、原本・和訳とも裁判で使われたストラテジーについて同じ情報を提供している。

例　2

Βδελυκλέων:	οὔκ, ἢν ξυνῇς γ’ ἀνδράσι καλοῖς τε κἀγαθοῖς.	1257

[100] 野津、平田、橋本(2008)『ギリシャ喜劇全集 1』岩波書店、東京(p.3)
[101] Ibidem (p.12)

ἢ γὰρ παρῃτήσαντο τὸν πεπονθότα、
ἢ λόγον ἔλεξας αὐτὸς ἀστεῖόν τινα、
Αἰσωπικὸν γέλοιον ἢ Συβαριτικόν、
ὧν ἔμαθες ἐν τῷ συμποσίῳ· κᾆτ' ἐς γέλων
τὸ πρᾶγμ' ἔτρεψας、ὥστ' ἀφείς σ' ἀποίχεται. 1261

ブデリュクレオーン: 立派な紳士と一緒だとそうはならないのです。
その人たちが被害者から赦しを求めてくれるか、
あなたが自分で気の利いた話をして、
そう、イソップの滑稽な話とかシュバリスの笑い話とか、
宴会で習い覚えた話をして、一件を笑いごとにしてしまう。
これで相手も、あなたを許して立ち去るのだ。

例　II	形式的な等価性	ダイナミックな等価性
語用論的な情報	作家：アリストパネース テクストの型：文化的な ジャンル：喜劇	
状況的な情報		言語：原本－古代ギリシャ語 翻訳－現代日本語
文法的な情報	1.　動詞的な用法 1.1.動詞 παρῃτήσαντο－赦しを求めてくれる ἔμαθες－習い覚えた	1.　動詞的な用法 1.1.動詞 ξυνῆς－一緒だ 2.　名詞的な用法

	ἀποίχεται－許して **1.2.分詞** ἔλεξας－話をして γέλων－笑いごとにしてしまう ἀφείς－立ち去る **2. 名詞的な用法** **2.1 名詞** λόγον－話 συμποσίῳ－宴会 **2.2.代名詞** αὐτὸς－自分で **3. 形容詞** καλοῖς－立派な κἀγαθοῖς－紳士 ἀστεῖόν－ 気の利いた γέλοιον－笑い、滑稽な **4. 前置詞** ἐν τῷ συμποσίῳ－宴会で	**2.1.名詞** ἀνδράσι－紳士 **2.2.分詞** τὸν πεπονθότα－被害者 **3. 形容詞** Αἰσωπικὸν－イソップの Συβαριτικόν－シュバリスの
語彙的な情報	**多義:** γέλοιον－笑い、滑稽な	**多型：** ἔλεξας－話をして ἔτρεψας－立ち去る
文体的な情報		**1.**Αἰσωπικὸν γέλοιον ἢ Συβαριτικόν […] そう、イソップの滑稽な話とかシュバリスの笑い話とか[…]

意図に関する情報	**原本と翻訳の教訓:**イソップの寓話が教訓を持っている楽しい物語であったのでよく有名であった。	

語用論的・状況的な情報:語用論的な情報は形式的な等価性に基づいて翻訳され、状況的な情報はダイナミックな等価性に基づいて翻訳されている。

文法的な情報:文法的な情報では、形式的な等価性がほとんどである。

- ἔμαθες – 習い覚えた
- ἔλεξας – 話をして
- λόγον – 話
- καλοῖς – 立派な

ダイナミックな等価性もある。

- ἀφείς – のだ
- τόν πεπονθότα – 被害者

語彙的な情報:多型語の例として「ἔλεξας(話した) 、ἔμαθες(覚えた)」という動詞の過去形の用法を取り上げる。ギリシャ語では、動詞の過去形を作るとき、動詞の最初の文字が協和音の場合には「ε-」という接頭辞を付ける。しかし、日本語には過去の接頭辞がないので、ギリシャ語の過去形動詞を和訳するとき、「ε-」の接頭辞が「—た」という接尾辞に翻訳される。また、日本語では、時々、過去形の代わり「ーている」という現在時制を使う。例えば、原本の「ἔμαθες」は「習い覚えた」という意味であるが、「話をして」と翻訳している。つまり、動詞の過去形はダイナミックな等価性に基づいて翻訳されている。

文体的な情報:文体的な情報はダイナミックな等価性に基づいて翻訳されている。和訳では、原本の韻律を表現することができないので、原本の言語的な意味だけを表現し

ている。例えば、原本の「Αἰσωπικὸν」と「Συβαριτικόν」というアリストパネースによって使われた形容詞は、「イソップの」と「シュバリスの」と翻訳された。

意図に関する情報:原本と和訳の意図に関する情報が同じであるので、形式的な等価性に基づいて翻訳されている。二つのテクストの目標は、読者に楽しさと教訓を提供することである。その教訓は、人々が色々な場面でイソップの寓話を面白可笑しく話すことによって、困難な状況を変え得るということを教えてくれる。二つのテクストを読むと、イソップの寓話がそうしたことによく使われたことが分かる。

例　3

Φιλ.:	Αἴσωπον ἀπὸ δείπνου βαδίζονθ’ ἑσπέρας	1401
	θρασεῖα καὶ μεθύση τις ὑλάκτει κύων.	
	κἄπειτ’ ἐκεῖνος εἶπεν· ‘ὦ κύον κύον,	
	εἰ νὴ Δί’ ἀντὶ τῆς κακῆς γλώττης ποθὲν	
	πυροὺς πρίαιο, σωφρονεῖν ἄν μοι δοκεῖς.’	1405

ピ．：	ある晩、宴会帰りのイソップに、	
	厚顔で酔っぱらいの牝犬が吠えかかった。	
	そこでイソップが言うには、「この牝犬め、	
	その性悪の舌と引き替えに小麦を買ったなら、	
	ほんに賢い奴だと思えるのだがな」。	

例　III	形式的な等価性	ダイナミックな等価性
語用論的な情報	作家：アリストパネース テクストの型：文化的な ジャンル：喜劇	

状況的な情報		言語：原本－古代ギリシャ語 翻訳－現代日本語
文法的な情報	**1. 動詞的な用法** **1.1.動詞** ὐλάκτει－吠えかかった εἶπεν－言う πρίαιο－買った δοκεῖς－思える **2. 名詞的な用法** **2.1.名詞** ἑσπέρας－晩 Αἴσωπον－ イソップ πυροὺς－小麦 δείπνου－宴会 κύων－牝犬 κύον－牝犬 γλώττης－舌 **3. 形容詞** μεθύση－酔っぱらい κακῆς－悪 θρασεῖα－厚顔 **4. 前置詞** ἀντὶ τῆς κακῆς γλώττης－舌と引き換えに **5. 接続詞**	**1. 動詞的な用法** **1.1.不定詞** σωφρονεῖν－賢い奴だ **1.2.分詞** βαδίζονθ’－帰りの **2. 名詞的な用法** **2.1.代名詞** ἐκεῖνος－イソップ **3. 前置詞** ἀπὸ δείπνου－宴会 **4. 接続詞** κἄπειτ’－そこで

	εἰ－なら	
語彙的な情報	**多義：** ἐκεῖνος－イソップ Αἴσωπον－ イソップ	
文体的な情報		**1.**Αἴσωπον ἀπὸ δείπνου βαδίζονθ’ ἑσπέρας[…] ある晩、宴会帰りのイソップに[…]
意図に関する情報	**原本と翻訳の教訓:**犬についてイソップの物語りが話す前いつも考えなければならないことを教えてくれる。	

語用論的・状況的な情報:語用論的な情報では形式的な等価性があり、状況的な情報ではダイナミックな等価性がある。

文法的な情報:文法的な情報は、ほとんどが形式的な等価性に基づいて翻訳されている。

- εἶπεν – 言う
- κύων – 牝犬
- εἰ - なら
- ἀντί – 引き換えに
- κακῆς – 悪

ダイナミックな等価性に基づいて翻訳された単語もある。

- βαδίζονθ’ - 帰り
- ἐκεῖνος – イソップ

語彙的な情報:多義語の例として「ἐκεῖνος」という代名詞と「Αἴσωπος」という名前を取り上げる。原本では、「あの方」を意味する「ἐκεῖνος」という代名詞が「イソップ」という名詞の代わりに使われているが、和訳では「ἐκεῖνος」と「Αἴσωπος」の両方が「イソップ」と翻訳されている。ギリシャ語では、代名詞がよく使われるが、日本語では、ほとんどの場合に名詞が使われる。

文体的な情報:文体的にはダイナミックな等価性で翻訳されている。例えば、最初の行「ある晩、宴会帰りのイソップに」について考えてみる。原本では、トロカイオスのメトロンが使われているが、和訳では、原本の韻律が生かされていない。トロカイオスメトロンを使うとき、行の最初の音節が強くなり、最後の音節が弱くなる。つまり、原本ではトロカイオスメトロンによって「イソップ」という行の最初の単語が強調されるが、和訳では「イソップ」という単語を行の最後に置いて強調している。文体的にはダイナミックな等価性に基づいて翻訳されていることが分かる。

意図に関する情報:意図に関する情報には、形式的な等価性がある。原本と和訳は同じ意図に関する情報で共通している。アリストパネースはイソップの寓話を使いながら、教訓を提示しているのである。その教訓によると、 人間は、怒っていると、思考能力を失って、悪いことを話してしまうので、いつも話す前に、寓話の犬のように考えなければならないという。原本と和訳の目的は「いつも考えなさい」ということを教えることにある。原本と和訳の意図に関する情報、つまり目的が同じであるので、両者には形式的な等価性がある。

例　4

Φιλ.:	Αἴσωπον οἱ Δελφοί ποτ'—	1448
Βδ.:	ὀλίγον μοι μέλει.	
Φιλ.:	—φιάλην ἐπῃτιῶντο κλέψαι τοῦ θεοῦ.	
	ὁ δ' ἔλεξεν αὐτοῖς ὡς ὁ κάνθαρός ποτε—	

Βδ.: οἴμ’、ὡς ἀπολῶ αὐτοῖσι τοῖσι κανθάροις. 1452

ピ．：　ある時、デルポイの人たちがイソップを．．．．．

ブ．：　私にはどうでもよい。

ピ．：　神様の杯を盗んだとして昇に問うた。

イソップが彼らに語るには、昔、センチコガネが．．．．．

ブ．：　とほほ、あなたとセンチコガネで私を殺す気だ。

例　IV	形式的な等価性	ダイナミックな等価性
語用論的な情報	**作家**：アリストパネース **テクストの型**：文化的な **ジャンル**：喜劇	
状況的な情報		**言語**：原本－古代ギリシャ語 翻訳－現代日本語
文法的な情報	**1.　動詞的な用法** **1.1.動詞** ἔλεξεν－語る ἐπῃτιῶντο－昇に問うた **1.2.不定詞** κλέψαι－盗んだ **2.　名詞的な用法** **2.1.名詞** Αἴσωπον－イソップ Δελφοί－デルポイの人たち φιάλην－杯	**1.　動詞的な用法** **1.1.動詞** μέλει－どうでもよい ἀπολῶ－殺す気だ **2.　接続詞** δ’－イソップ

	θεοῦ－神様 κάνθαρος－センチコガネ κανθάροις－センチコガネ **2.2.代名詞** μοι－私 αὐτοῖς－彼ら	
語彙的な情報	**多義：** ποτε－ある時 ποτε－昔	
文体的な情報		**1.**Αἴσωπον οἱ Δελφοί ποτ'[…] ある時、デルポイの人たちがイソップを[…]
意図に関する情報	**原本と翻訳の教訓:**デルポイの人が窃盗罪でイソップを告発した。	

語用論的・状況的な情報:語用論的な情報は形式的な等価性に基づいて翻訳され、状況的な情報はダイナミックな等価性に基づいて翻訳されている。

文法的な情報:文法的なレベルでは、ほとんどが形式的な等価性である。

- ἔλεξεν – 語る
- θεοῦ - 神様
- κανθάροις – センチコガネ
- μοι – 私

ダイナミックな等価性もある。

- δ'- イソップ
- μέλει – どうでもよい

語彙的な情報:多義語の例として「πότε」という副詞を取り上げる。この言葉には、「あるとき」と「昔」の二つの意味がある。和訳では、最初の「πότε」を「ある晩」と訳し、二番目の「πότε」を「昔」と訳しているので、原本と和訳の間には形式的な等価性がある。

文体的な情報:文体的な情報ではダイナミックな等価性がある。例えば、最初の行「ある時、デルポイの人たちがイソップを．．．」について考えてみる。原本ではトロカイオスのメトロンを使っているが、和訳ではメトロンを生かしていない。しかし、トロカイオスメトロンであれば行の最初の単語が強調されるので、原本では「イソップ」が協調されているが、和訳では、「イソップ」という単語を行の最後に置いて強調している。従って、文体的な情報はダイナミックな等価性に基づいて翻訳されていることが分かる。

意図に関する情報:意図に関する情報は形式的な等価性に基づいて和訳されている。つまり、原本と和訳が提示する情報は同じである。アリストパネースはイソップの生活についての情報を読者に提示したかったのであり、原本の読者はイソップがデルポイ人によって告発されたということを教えられる。同様に、和訳の読者も同じ情報を取得している。原本と和訳の目的がこの事件についての情報を読者に提供することであるので、意図に関する情報は形式的な等価性に基づいて翻訳されていることが分かる。

5.2.2. 文化的な分析

アリストパネースの『蜂』は、政治的な喜劇として、古代ギリシャの社会と政治のシステムについて色々な要素を含んでいる。従って、この喜劇から古代ギリシャ人の考え方と価値観について、幾つかの情報を得ることができる。

例 1

・「裁判」の文化的な意義

古代ギリシャには、強力な法律制度があった。アリストパネースは、『蜂』を通じて、その法律制度の強い点と弱い点について述べている。『蜂』を読むと、裁判で裁かれる人の振る舞いが分かる。裁判では、裁判官に強く訴えるために、色々な戦略を使った。

一番よく使われた戦略は、面白い話を楽しく話すこと、裁判官の同情をひくために自分の不幸を述べることであった。ただ、裁判官は、自分の職務を忘れずに、法律に基づいて裁判をする義務があった。また、人々は裁判官の決定を尊重しなければならなかった。

古代ギリシャには色々な裁判所があった。古代アテネでは、アレイオス・パゴス評議会[102]、プリュタネイオン[103]などの有名な法廷があり、評議会[104]と民会[105]なども司法権をもっていた。スパルタでは、民会が刑法関係の犯罪の裁判を行い、民会から選ばれた監督官が政治犯罪の裁判を行った[106]。家族法についてはスパルタ王自らが裁判を行った[107]。このように、ギリシャの法律制度の歴史は非常に古いのである。

---

[102] 中務、佐野、久保田(2008)「アクロポリス北西のアレイオス・パゴスの丘で開かれたのでこう称する。アテーナイに古くからある法的機関で、貴族政時代には最も大きな権力をもつ政治機関でもあった。民主政が整うとともに、その役割は削減され、主な役割は計画的殺人、傷害、放火などに関する裁判を行うことであった。評議員となるのはアルコーン職経験者で、終身制。評議員数灼 150 人。」(p. 3)

[103] Ibidem 「ポリスの中心的な公共の建物。公共の炉があり、国賓の接待なども行われた。中央の役所であるとともに市の公会堂、迎賓館。」(p. 14)

[104] Ibidem 「民会(エックレーシアー)で扱う議題をあらかじめ議論し、準備する。10 部族(ピューレー)からそれぞれ 50 人ずつ選ばれた 500 人から成る。前 5 世紀半ばに 30 歳上の市民のうちの希望者から抽選で選ばれた。任期は 1 年で、連続しなければ 2 回までは再任が許された。前 5 世紀末までには評議員に日当が支給されるようになった。」(pp. 13-14)

[105] Ibidem 「市民権をもつ成人男子全員が参加、発言、投票できる、アテーナイの最高議決機関。議題は国政全般にわたり、大抵の採決は挙手により行われる。1 プリュタネイア(1 年の 10 分の 1)につき 4 回、したがって年に 40 回召集され、4 回のうち 1 回は「主要民会」とされる。通常、アクロポリス西方のプニュクスの丘で開催される。前 4 世紀には出席者に日当が支給された。民会にかけられる議題は事前に評議会(評議会＝ブーレー)で議論され、準備される。」(p. 15)

[106] 民会員は 30 人であった。毎年民会から 5 人の監督官が選ばれた。

[107] 古代スパルタでは、二人の王がいた。

日本では、中国の「律令制度」(中国の秦が定めた「古律令」と言われる法律制度で、「刑法」を主体とする)を導入して、6 世紀頃に倭国(日本の古代国家)で法律に基づく裁判が行われたという記録が「筑紫国風土記」にある。それが日本で最初の裁判記録である。その後、中国の唐の律令制度を導入して、689 年に「飛鳥浄御原令」が作られ、701 年に「大宝律令」が制定された。それ以降の中世では、国主や領主の支配者たちが裁判官となり、道徳的な規律に基づて裁判を行っていたが、実質的には支配者の権利や利益を守ることが裁判の判断基準になっていた。江戸時代になると、江戸や大阪の大都市に町奉行という役職が置かれるようになり、奉行の呼び出しを受けた訴訟人、付添人が法廷に入り審理を受けた。その審理の基準になったのは「公事方御定書百三か条」であった。町奉行は裁判所であると同時に警察でもあった。明治維新の後、西洋の法律制度を手本にして、日本の法律制度が近代化された。1889 年(明治 22 年)に、君主権が強いプロイセン憲法を模倣した大日本帝国憲法が発布され、それにより司法権は天皇の名において法律により裁判所が行使することが定められた[108]。

従って、裁判制度については、古代ギリシャと日本では大きく違うので、『蜂』のようなテクストを和訳するときに、翻訳者はギリシャの裁判制度について詳しい説明を付けなければならない。

例 2

・「シンポジウム」の文化的な意義

古代ギリシャのシンポジウムは、現代のシンポジウムとは違う。それは、男性だけの懇親会であり、ダンサーと売春婦以外の女性は参加できなかった。「シンポジウム」という単語は「συν-友に」と「πίνειν-飲む」から来ている。この単語の最初の意味は「宴会」であったが、次第に文語体で使われる単語になって、哲学者が「シンポジウム」について著作するようになった。例えば、プラトンの『シンポジウム』、クセノフ

[108] Retrieved October 10, 2010 from: http://www.court-law-office.gr.jp/tokusyu/13-10.htm

ォンの『シンポジウム』、プルタルコスの『七賢人の饗宴(七賢人のシンポジウム)』などである。

『蜂』の中の「シンポジウム」は、「懇親会」の意味であり、二つの部分に分けられる。

- 「シンポジウム」の最初の部分では、シンポジウムに参加した男性が食事をし、それから、アルコールを飲んだ。勿論、食事中にはワインを飲み、アルコールを飲んでいるときには、色々なアペタイザーを食べた。古代ギリシャ人は、アペタイザーとして栗、豆と蜂蜜のデザートなどを食べ、そうすることによって、飲む時間を長くしていた。
- 「シンポジウム」の二番目の部分では、参加した男性たちが遊び、談笑した。最初に、ディオニューソスにお神酒を捧げ、その後で、参加者が色々なゲーム[109]をしたり、談笑したりして楽しんだ。さらに、男の楽しみのために、女のダンサーと曲芸師が宴会に招かれた。

古代ギリシャでは、男性だけで、食べたり、飲んだり、話したりする「シンポジウム」が大切な会であると考えられていた。このような宴会は、ギリシャの社会だけの特徴ではなく、日本でも、宴会は男性だけのもので、芸者以外の女性は参加できなかった。ギリシャと日本の宴会から分かることは、両国とも女性よりも男性の権利が強く、男性が支配する社会であった。社会的な規則や習慣についても同じことが言える。。

例 3

・「コミュニケーション」と「論理」の文化的な意義

ギリシャ人の文化は「論理重視」「低文脈」の文化であり、日本人の文化は「関係重視」「高文脈」の文化であると考えられている。その考えに従えば、コミュニケーションにおいて、ギリシャ人は、話し手が自分の感情や意見の全てをできるだけ論理的に表

[109] 古代ギリシャで有名なゲームにコタブス(cottabus)というゲームがあった。そのゲームは、飲んだワインの量を競い合うゲームであった。Retrieved October 5, 2010, from: http://www.britannica.com/EBchecked/topic/139793/cottabus

現するので、その言語的な情報が聞き手に直接的に伝わる。一方、日本人は、話し手が聞き手との関係を損なわないように注意しながら、聞き手が知っていることは省略して、自分の感情や意見を控えめに表現するので、聞き手は話し手が言っていること以外の非言語的な情報をキャッチしながら聞くことになる。こうしたコミュニケーションの仕方の違いは、ギリシャ人社会と日本人社会の文化の違いに起因するものである。ギリシャ人は、論理を重視して、直線的に結論に結びつけるように努力して話し、コミュニケーションは、感情を抜きにして、知的で客観的な情報交換をすることであると考えている。一方、日本人は、聞き手との人間関係を重視して、背後関係を注意しながら婉曲的・暗示的に話し、コミュニケーションは聞き手との主観的・感情的な関係を確かめるための情報交換であると考えている。日本人は、自分の属する集団や仲間と対立することを避ける文化を持っているので、コミュニケーションにおいても、意見の対立や論争を避けるのである。このように、ギリシャ人と日本人は、両者の文化の違いから、「コミュニケーション」の仕方や目的が違うのである。

「論理」という概念は哲学の専門用語としてもよく使われる。「論理」は、ギリシャ語の「logiki」(理論)と「logos」に由来し、「考えるの能力」を意味する。科学としての「論理」は、人間の考える能力について研究することであり、多くの研究者が色々な理論を作った。アリストテレスによると、「論理」は特定の科学ではなく、全ての研究を行うために必要な技法であるという。研究者は「論理」に基づいて、真実の「理論」を探求するのである。

アリストパネースの『蜂』を読むと、ギリシャ人のコミュニケーションの一番大切な規則が分かる。それは、話す前に、話の論理を頭で考えることである。アリストパネースは、『蜂』の中で、「論理」という科学についてではなく、「考える能力」について話している。アリストパネースは、「この能力がコミュニケーションの成功のために、必要で大切なツールである」と言っている。

以上のことから、「コミュニケーション」の仕方と「論理」との関係について、ギリシャと日本では違うことが分かる。

例 4

・社会的な責任感

アリストパネースは、自分の喜劇でギリシャ社会とギリシャ人の振る舞いを風刺した。彼の目的は、喜劇を通じて、ギリシャ人に道徳的な教訓を与えることであった。アリストパネースは、『蜂』の中で、イソップの例を使いながら、「ギリシャ人には責任感がない」と述べている。『蜂』では、「デルポイ人が自分たちの罪をイソップにかぶせるために、共謀して、イソップが神様の杯を盗んだとして罪に問うた(行 1450)」という話を挙げて、ギリシャ人の欠点である「共謀」についての教訓を示している。

「共謀」は多くの悲劇にもある。『縛られたプロメテウス』[110]では、アイスキュロスが人間と共謀して神々から火を盗もうとした。『アガメムノーン』[111]という悲劇では、クリュタイムネーストラーがアガメムノーンを殺すためにアイギストスと共謀した。『供養する女たち』[112]では、オレステースがクリュタイムネーストラーとアイギストスを殺すために、エーレクトラと共謀した。同じように、ソフォクレースの『エーレクトラ』[113]では、エーレクトラがクリュタイムネーストラーを殺すために妹と共謀しようとした。エウリピデスの『エーレクトラ』[114]では、エーレクトラがオレステースと共謀して、クリュタイムネーストラーとアイギストスを殺してしまう。エウリピデスの『タウリスとイピゲネイア』[115]では、イピゲネイアが女神アルテミスの偶像のためにオレステースと共謀した。喜劇にも「共謀」がある。アリストパネースの『女だけの祭』[116]では、女たちがエウリピデスに対して共謀しようとした。以上のように、古代ギリシャの劇を見ると、「共謀」はギリシャ人の弱点であることが分かる。

一方、日本の社会は集団主義に基づいているので、「責任感」を重要視する。集団のためには個人を犠牲にしてでも責任を果たそうとする。そうすることが個人の義務でもあると考えられている。

---

[110] アイスキュロスの『縛られたプロメテウス』の上演年代は分からない。
[111] アイスキュロスの『アガメムノーン』は紀元前 458 年に上演された。
[112] 『供養する女たち』はアイスキュロスの最初(紀元前 490 年頃)の悲劇であった。
[113] ソフォクレースの『エーレクトラ』の上演年代は分からない。
[114] エウリピデスの『エーレクトラ』は紀元前 413 年に上演された。
[115] ソフォクレースの『タウリスとイピゲネイア』の上演年代は分からない。
[116] アリストパネースの『女だけの祭』は紀元前 411 年に上演された。

結論

当論文のテーマは、古代ギリシャ語で書かれたテクストと近代・現代日本語に翻訳されたテクストを比較分析することであり、その目的は、原本と和訳の比較分析から、ギリシャ人と日本人の考え方や価値観の相違点と類似点を解明することである。当論文の研究対象として、イソップの寓話を選定した。イソップの生涯についての情報は少なく、イソップ自身は自分の寓話を記録しなかったが、他の作家がイソップの寓話を記録していたことから有名になった。 イソップの寓話を初めて取り上げたのは、プラトン、アリストテレス、ヘロドトス、アリストパネースであった。アリストパネースは、イソップに感服し、イソップの寓話が大切な教訓を含んでいると考えていた。アリストパネースは『蜂』『鳥』『平和』などの喜劇でイソップに言及している。そうしたことから、当論文では、古代ギリシャ語から近代日本語への翻訳についての研究の対象として、アリストパネースの作品に載っているイソップの寓話を取り上げることにした。

イソップの寓話とその和訳を比較分析する方法として、翻訳の理論が必要になった。その理論の目的は、和訳の善し悪しを評価するのではなく、古代ギリシャ語の原本と近代日本語への和訳の相違点と類似点を分析し、解明することである。つまり、古代ギリシャ語で書かれた原本を和訳する場合に、簡単に和訳できるものと、和訳が難しいのものを究明するための理論が必要であった。

しかし、ギリシャ語から日本語への翻訳に関する理論は見つからなかった。そこで、別の言語で使われていた理論を採用し、その理論の概念をギリシャ語から日本語への翻訳に当てはめることにした。

まず、Baker の理論から、翻訳における「等価性」の概念を採用した。「等価性」は、よく批判されてきた概念であるが、ギリシャ語と日本語の場合にも使えると考えた。次に、Nida の理論から、「形式的な等価性」と「ダイナミックな等価性」という二つの概念を採用した。「形式的な等価性」に基づく翻訳とは、翻訳者が原本の単語の意味と同じ意味の単語を使って翻訳することである。例えば、原本の動詞を和訳するときに、その動詞と同じ意味の日本語の動詞がある場合である。一方、「ダイナミックな等価性」に基づく翻訳とは、翻訳者が原本の意味を日本語で表現するために、原本とは異な

る品詞の単語や表現方法を使って翻訳することである。例えば、原本の動詞の意味を翻訳するために、同じ意味の副詞を使って翻訳する場合である。

Baker と Nida の理論の概念を使って原本と和訳を比較分析する場合に、両テクストの情報の分析方法として、Delisle と Tatilon の理論を使い、情報を次の六つのカテゴリーに分けて分析することにした。

1. 語用論的な情報:テクストの実用面で役に立つ情報
2. 状況的な情報:テクストが生まれた時代の状況に関する情報
3. 文法的な情報:テクストの言語の文法に関する情報
4. 語彙的な情報:テクストの言語の語彙に関する情報
5. 文体的な情報:テクストの文章スタイルについて情報
6. 意図に関する情報:テクストの作者が読者に伝えたいと意志している情報

当論文では、上記の情報区別に従って、ギリシャ語の原本に基づいて情報を区別し、原本の情報と和訳の情報を比較分析した。

当論文の研究対象としては、二つの文化的テクストを選んだ。散文のテクストとして「寓話」、詩のテクストとして「喜劇」の二つである。古代ギリシャ語から近代日本語への翻訳では、翻訳者が色々な難しさを克服しなければならないが、文化的テクストを和訳するときには、比較的容易に翻訳できる。その理由は、ギリシャと日本では、神話や演劇などの文化的な伝統があり、ギリシャ語と日本語の文化的な作品が多くあるからである。日本語の作品でも、比喩とか擬人法などの文学的な効果をねらった表現がよく使われているので、ギリシャ語の特殊な表現でも、それと対応する和訳の表現を見つけやすいのである。もちろん、ギリシャ語と日本語の間の言語的な差異による限界があることは言うまでもない。

さらに、原本は古代ギリシャ語で書かれたテクストであり、和訳は近代・現代の日本語のテクストで、二つのテクストは異なる時代のものであるが、両方のテクストの目的は同じである。それは、読者を楽しませ、読者に道徳的な教訓を与えることである。その目的を達成するために、両テクストは簡単でわかりやすい言葉を使っている。そのために、読者は作者の伝えたいと思っていることが分かるのである。

ギリシャ語を日本語に翻訳するときに生じる困難は、両言語の構造の違いに起因することが多い。言語の構造として、ギリシャ語は屈折言語に属し、日本語は膠着言語に属している。屈折言語の構造をもつギリシャ語は、名詞の格が名詞自体の屈折によって主格、属格、与格、対格などに変化し、動詞の法（直説法、接続法、希望法、命令法など）と時制（過去、現在、未来など）が動詞自体の屈折によって決まる。一方、膠着言語の構造をもつ日本語は、名詞の語幹に格助詞が膠着して名詞の格を表し、動詞の語幹に接辞が膠着して動詞の活用形を表す。このように、ギリシャ語と日本語は言語構造が違うために、ギリシャ語と同じ言語構造をもつ他のヨーロッパ語に翻訳する場合と比較すると、日本語への翻訳は言語構造の違いを克服するための困難を伴うのである。

ギリシャ語と日本語の時間表現についても、時間の概念に違いがあるために、単純な翻訳ができない。ギリシャ語の時間表現は、発話時を基点（＝現在）にして過去・現在・未来の絶対的な時制（テンス）を表現することが基本になる。一方、日本語の時間表現は、出来事の局面（アスペクト）、即ち、出来事が完了前／完了後のどの局面にあるのかを表すことが基本になる。日本語の動詞の時間表現にはル形「—る」とタ形「—た」があるが、表現する出来事の時制が過去か未来かに関係なく、出来事が完了前の局面にあるときはル形を使い、出来事が完了後の局面にあるときはタ形を使うのである。このように、ギリシャ語と日本語の時間表現は、違った概念に基づいているので、それを翻訳するときには、ギリシャ語の時間表現の意味をくみとって、それと同じ意味になるような日本語の時間表現に翻訳しなければならない。

時間表現の翻訳の例として、能動相の動詞「λύω=解く」について、次の表に示す。ギリシャ語の能動相の動詞には「現在」「未完了過去」「未来」「アオリスト」「現在完了」「過去完了」の六つの時制がある。「未完了過去」は、行為が過去に進行中であったことを表し、「アオリスト」は、行為が過去に一回だけ行われたことを表す。

能動相

動詞の時制	ギリシャ語	日本語
現在	λύ-ω	−る、—ている

未完了過去	ἔ-λυ-ον	—ていた
未来	λύ-σ-ω	−るだろう、—ているだろう
アオリスト	ἔ -λυ-σ-α	—た
完了	λέ-λυ-κα	
過去完了	ἐ-λε-λύ-κειν	

ギリシャ語の動詞の現在は、日本語ではル形に翻訳する場合とテイル形に翻訳する場合がある。テイル形は動作が進行中であることを表す。未完了過去は日本語では「—ていた」と翻訳される。ギリシャ語の動詞の未来は、日本語ではル形に翻訳される。日本語の状態動詞の現在と未来の両方ともル形に翻訳されるが、現在か未来かは文脈によって判断される。アオリストは日本語ではタ形に翻訳される。日本語にはギリシャ語の現在完了と過去完了に当たる動詞の形はないが、他の語を動詞に膠着させることによって、現在完了と過去完了の意味になるように翻訳する。現在完了の「解いてしまった」は、「解き」という動詞の連用形に「て」＋「しまっ」＋「た」という三つの形態素を膠着させることによって、現在完了の意味になる。過去完了の「解いてしまっていた」は、「解き」という動詞の連用形に「て」＋「しまっ」＋「て」＋「い」＋「た」という五つの形態素を膠着させることによって、過去完了の意味になる。このように、動詞の時制の翻訳では、ギリシャ語と日本語の言語構造の違いから、ダイナミックな等価性に基づく翻訳が必要になる。

次の表は、ギリシャ語の中動／受動相の動詞「λύομαι=解かれる」について、六つの時制の和訳を示している。

中動動相

動詞の時制	ギリシャ語	日本語
現在	λύ-ομαι	−る、—ている

未完了過去	ἔ -λυ-όμην	—ていた
未来	λύ-σ-ομαι	−るだろう、—ているだろう
アオリスト	ἔ -λυ-σ-άμην	—た
完了	λέ-λυ-μαι	
過去完了	ἐ-λε-λύ-μην	

受動相

動詞の時制	ギリシャ語	日本語
現在	λύ-ομαι	−られる、—られている
未完了過去	ἐ-λυ-όμην	—られていた
未来	λυ-θή-σ-ομαι	−られるだろう、—られているだろう
アオリスト	ἐ-λύ-θην	—られた
完了	λέ-λυ-μαι	
過去完了	ἐ-λε-λύ-μην	

ギリシャ語の中動相と受動相の動詞についても、翻訳方法は能動相の動詞と同じである。

次に、動詞の法と時制の関係について、ギリシャ語と日本語の対応表を示す。ギリシャ語には、直説法、接続法、希望法、命令法の四つの法がある。

能動・中動・受動相

動詞の法	ギリシャ語	日本語
直説法	現在、未完了過去、未来、	現在、過去、未来

	アオリスト、完了、過去完了	
接続法	現在、アオリスト、完了	ない
希求法	現在、未来、アオリスト、完了	ない
命令法	現在、アオリスト、完了	現在

ギリシャ語では、現在、アオリスト、現在完了の時制は全ての法で使える。日本語では、直説法、希望法、命令法が使われているが、接続法は使われていない。
ギリシャ語には動詞的な用法として不定詞と分詞がある。不定詞と分詞で使われる時制を次の表に示す。

能動・中動・受動相

別の動詞的な用法	**ギリシャ語**	**日本語**
不定詞	現在、未来、アオリスト、完了	ない
分詞	現在、未来、アオリスト、完了	ない

日本語にはギリシャ語の不定詞にあたる用法はあるが、分詞の用法はない。ギリシャ語の分詞は動詞とか名詞などを使って和訳される。ギリシャ語の不定詞を和訳するときに、不定詞が物を表す場合には「―もの」と和訳され、不定詞が行為を表す場合には「―こと」と和訳されている。しかし、不定詞の場合でも、分詞と同じように、名詞に和訳される場合もある。
上記の表を見ると、ギリシャ語の動詞の用法は日本語の用法と比べると多岐にわたっていることが分かる。これは言語構造の違いによるものである。ギリシャ語は屈折言語の

構造から、動詞の用法が動詞自体の屈折によって多岐に分かれているのである。日本語は膠着言語の構造から、動詞の後に膠着する語によって動詞の用法を使い分けている。代名詞の場合でもギリシャ語と日本語の相違点がある。ギリシャ語では代名詞をよく使うが、日本語では代名詞をあまり使わない。日本語では名詞を繰り返して使ったほうが自然な文章になる。そのために、古代ギリシャ語から翻訳するときに、翻訳者は、ギリシャ語の代名詞を名詞に変えて翻訳している。

ギリシャ語の名詞は、格と数によって変化し、日本語の名詞は、格助詞が名詞に膠着して格変化を表す。例えば、ギリシャ語の主格名詞を和訳する場合には「は」と「が」という助詞を使い、属格の名詞の場合には「の」を使い、与格の名詞の場合には「に」を使い、対格の名詞の場合には「を」を使うのが一般的である。呼格の名詞を和訳するときには、下位の者に対しては「め」を使い、上位の者に対しては「よ」を使っている。複数の名詞を和訳するときには、「たち」を使っている。従って、格と数によって変化するギリシャ語の名詞を日本語に翻訳するときには、日本語の格と数を表す単語を名詞に付加することによって翻訳することになる。しかし、時々、この付加する単語を省略することがあるが、その場合は文脈によって名詞の格と数が分かるのである。次の表は、ギリシャ語の「ゼウス」という名詞を和訳した例を示している。

格	ギリシャ語	日本語
主格	ὁ Ζευς	ゼウスは、が
属格	τοῦ Διός	ゼウスの
与格	τῷ Διί	ゼウスに
対格	τόν Δία	ゼウスを
呼格	ὦ Ζευ	ゼウスめ、よ

従って、ギリシャ語では、名前の形が変わってくる。しかし、日本語では、全部の格が同じである。言い換えれば、全部の格の名詞が「ゼウス」と訳されている。そうするので、ギリシャ語から和訳するとき、多義語が多くなる。

接続詞と前置詞についても相違点がある。ギリシャ語では接続詞と前置詞がよく使われる。例えば、ギリシャ語の文では、等位と従位の接続詞がよく使われるが、日本語ではあまり使われない。日本語では複数の文を関連させる場合に、動詞のテ形をよく使っている。前置詞についても、ギリシャ語では、複雑な意味を表す前置詞を使うが、日本語では、簡単な助詞を使っている。例えば、ギリシャ語では「そばに」と「上に」を前置詞によって使い分けているが、日本語では両方とも「に」と翻訳している。

ギリシャ語の特徴として、前置詞が単語の接頭辞になっている単語が多い。例えば、「ἐν=中に」と「ἐκ=から」という前置詞が色々な単語の接頭辞として使われている。ギリシャ語には単語の中に前置詞が入っている単語が多いために、多型語が多いのである。日本語でも接頭辞の「お」をつけて丁寧さを表す言葉があるが、ギリシャ語の前置詞に相当する語を接頭辞にしている言葉は日本語にはない。ギリシャ語の多型語を和訳する場合には、意味だけに基づいて翻訳すればよい。ギリシャ語の多義語を和訳する場合も、意味だけに基づいて翻訳すればよいが、翻訳された日本語は多義語ではなくなる。例えば、「ἐκ-φεύγω=から出る」「ἐξ-έρχομαι=から来る」という多義語は、「逃げる」「出る」と翻訳されているので、多義語ではない。

文体と韻律についても相違点がある。ギリシャ語から日本語に翻訳するときに、翻訳者が苦労することは、原本の文体をどのように翻訳するかということである。文化的なテクストでは、原本のスタイルも翻訳しなければならない。テクストが散文であれば、スタイルはさほど重要ではないが、テクストが喜劇・悲劇などの詩であれば、文体的なレベルで翻訳しなければならない。

ギリシャの悲劇・喜劇の韻律と日本の詩の韻律には根本的な違いがある。

「ギリシャ喜劇は、悲劇と同様、全体が韻文で書かれており、対話の場面も散文の話し言葉ではない。古典ギリシャ語の韻律は長い音節(記号では—)と短い音節(記号では□)の組み合わせからできている(長短いずれでもよい位置は X で示す)。韻律の基本単位メトロンを示す名称と、それを何度繰り返すのかを示す名称(二回はディメトロス、三回はトリメトロス、四回はテトラメトロス、五回はペンタメトロス、六回はヘクサメトロスなど)とを組み合わせることによってそれぞれの韻律は区別される。」(野津寛、平田松吾、橋本隆夫、2008:4)

日本語の伝統的韻律は、モーラ(拍)を最小単位として、5 拍・7 拍を基本とする七五調・五七調などである。ギリシャ語の詩と日本語の詩では韻律が全く違うのである。従って、ギリシャの詩の韻律を守って日本語に翻訳することはできない。

当論文の研究対象とした翻訳は、現代日本人向けのテクストである。原本と和訳は、異なる言語、異なる時代、異なる社会のテクストであるが、両者の意図に関する情報、即ち、目的と読者に伝えようとした教訓は同じであった。両者とも、「人を尊敬する」ことがお金や社会的な地位にまさる価値観となっていて[117]、それに反すると天罰から逃げられないと考えていた[118]。古代ギリシャの社会は民主主義集団であり、日本の近代社会は封建社会であったが、原本と和訳の両方とも同じ価値観と概念を共有していた。

古代ギリシャ語から日本語への文化的なテクストを翻訳するときに、翻訳者は、まず、二つの言語と文化についての深い知識を持って、原本の時代と社会を理解しなければならない。その上で、日本の社会と読者に合わせて翻訳し、読者に原本のメッセージを伝えなければならない。そうした翻訳をする上で問題となるのは、ギリシャ語と日本語の言語的な構造の違いと文体的な違いを翻訳でどのように克服するかということである。翻訳者は、こうした違いをよく理解して、原本と和訳の意味が同じになるように、ギリシャ語から日本語への変換をしなければならない。

以上のことをまとめると次のようになる。文化的なテクストの翻訳は、原本の意味と文体を翻訳することである。翻訳者の目的は、原本の読者と和訳の読者が同じメッセージを読み取って、 同じような影響を受けることである。そうするために、翻訳者は目標言語と文化に対して敏感でなければならない。成功した翻訳とは、翻訳らしくなく、原本だと思われるような翻訳である。文化的なテクストの翻訳は、独創的な作業なのである。

[117] 「鷲とセンチコガネ」と「ヘラクレスとプルトス」の教訓
[118] 「鷲と狐」の教訓

後書き

イソップの寓話を研究することによって読者は思慮分別や常識の価値基準を学びながら、架空の世界へと飛び回る旅をすることができる。イソップの寓話が誕生して 2600 年以上経過しているが、今なお、この寓話と道徳は、社会的な意味を持っている。また、このことは世界中でイソップの寓話が頻繁に翻訳されていることによって立証されている。それらの翻訳について重要なのは、読者が慣習化された翻訳と、より創造的な翻訳を取捨選択することができるという点である。

確かに、「慣習化された翻訳」では翻訳者が、可能な限り原本の言語の形式と内容を文字通り、また、意味をなすように再現することを試みる。しかしながら、そのような翻訳は、テクストを完全に理解できるものにするために、多数の脚注が必要となるだろう。そしてこの形式の翻訳、つまり慣習化された翻訳は、目標言語の読者が自分自身を起点言語の話者とできるだけ完全一致させることを可能にするものとして作られている。それと同時に、習慣や考え方及び表現の方法について可能な限り理解することが予定されている。対照的に、創造的な翻訳の場合では、翻訳された文章の読者とメッセージの関係性は、原文の読者とメッセージの関係性と、事実的に同じであるべきである。そして、読者自身の文化の文脈にできる限り合わせる形で、目標言語による表現が自然であることを目指す。即ち、それは受容者がメッセージを理解するために、原文の文脈における文化の形式を理解していることを強調するのではない。

最後に、これらの翻訳のおかげで、今日になってもなお、読者は短い寓話を通じて貴重な人生の教訓集を簡単に読むことができる。そして、多くの寓話では、動物を登場させて、最後的には、教訓を明確に記述している。2600 年以上前から、様々な人々が、寓話や物語に読む価値があることを認めている。私はそれに何も加えることができない。私はただ、人々が考えるよりも多くの作品が存在し、それが巧みに書かれているという点を強調するのみである。

参考文献

洋書

Αίσωπος (1993) *Μύθοι*, Μτφ. Αγνή Λιάπα, Εξάντας, Αθήνα

Ames, R., Chan, S.W., Ng, M. (eds.) (1991) *Interpreting Culture through Translation*, Chinese University Press, Hong Kong

Anderson, C., Urquhart, A.H. (eds.) (1984) *Reading in a Foreign Language*, Longman, London

Αριστοφάνης (1997) *Σφήκες*, Μτφ. Κώστας Τοπούζης, Επικαιρότητα, Αθήνα

Αριστοφάνης (1992) *Σφήκες*、 Μτφ. Τάσος Ρούσσος、 Κάκτος、 Αθήνα

Austin, J.L. (1962) *How to do Things with Words*, MA：Harvard University Press, Cambridge

Βαγενάς, N. (1989) *Ποίηση και Μετάφραση*, Στιγμή, Αθήνα

Baker, M. (1992) *In Other Words: A Coursebook on Translation*, Routledge, London & New York

Baker, M. (ed.) (2001) *Routledge Encyclopedia of Translation Studies*, Assist. Kirsten Malmkjær, Routledge, London & New York

Barnstone, W. (1993) *The Poetics of Translation: History, Theory, Practice*, Yale University Press, New Haven & London

Barnwell, K. (1980) *Introduction to Semantics and Translation*, Summer Institute of Linguistics, High Wycombe

Bassnett, S. (1980) *Translation Studies*, Routledge, London & New York

Bassnett, S., Lefevere, A. (eds.) (1990) *Translation, History and Culture*, Pinter, London & New York

Beaugrande, R. de, Dressler, W. (1981) *Introduction to Text Linguistics*, Longman, London & New York

Bell, R. (1991) *Translation and Translating: Theory and Practice*, Longman, London & New York

Benjamin, A. (1989) *Translation and the Nature of Philosophy: A New Theory of Words*, Routledge, London & New York

Biber, D., Conrad, S., Reppen, R. (1998) *Corpus Linguistics: Investigating Language Structure and Use*, Cambridge University Press, Cambridge

Βιτσαξής, B. (2002) *Ο Μύθος: Σημείο αναφοράς της υπαρξιακής αναζήτησης*, Ελλήν, Αθήνα

Blum-Kulka, S. (1981) "The study of translation in view of new developments in discourse analysis: the problem of indirect speech acts" in *Poetics Today* 2, 4:89-95

Boase-Beier, J. (2006) *Stylistic Approaches to Translation*, St Jerome Publishing, Manchester & Kinderhook

Bowen, D., Bowen, M. (eds.) *Interpreting: Yesterday, Today and Tomorrow*, NY: State University of New York at Binghampton, Binghampton

Catford, J.C (1965/2000) *A Linguistic Theory of Translation*, Oxford University Press, London

Caxton, W., Gascoigne, C., Robb, B. (1984) *Aesop's Fables in Caxton's original illustrated Edition*, Hamish Hamilton, London

Chesterman, A. (1997) *Memes of Translation*, John Benjamins, Amsterdam & Philadelphia

Comte, A. (1851) *Système De Politique Positive Où Traité de Sociologie, Instituant La Religion De L' Humanité*, L. Mathias, Paris

Davie, D. (1975) *Poetry in Translation*, The Open University Press, Milton Keynes

Delisle, J. (1980) *L' Analyse du discours comme méthode de traduction*, University of Ottawa Press, Ottawa

Delisle, J. (1998) *La traduction raisonnée, Manuel d'initiation à la traduction professionnelle anglais-français, Méthode par objectifs d'apprentissage*, éd. Presses de l'Université d'Ottawa, Ottawa

Draskau, J. (1987) *The Quest for Equivalence : On Translating Villon*, Atheneum, Copenhagen

Ducrot, O. (1972) *Dire et ne pas dire*, Hermann, Paris

Duff, A. (1989) *Translation*, Oxford University Press, Oxford

Easthope, A. (1991) *Literary into Cultural Studies*, Routledge, London & New York

EU-High Level Scientific Conference Series, *Challenges of Multidimensional Translation: Conference Proceedings*, MuTra 2005

Fahet, E. (1989) *The Medici Aesop*, trans. Bernard Mc Tigue, Harry N. Abrams Inc Publishers, New York

Fawcett, P. (1997) *Translation and language: linguistic theories explained*, St. Jerome, Manchester

Frawley, W. (ed.) (1984) *Translation: Literary, Linguistic, and Philosophical Perspectives*, University of Delaware Press, Newark

Gambier, Y. "La Retraduction, Retour et Détour" *META* 39.3, Sept. 1994:413

Gentzler, E. (2001) *Contemporary Translation Theories*, Multilingual Matters LTD, Clevendon, Buffalo, Toronto & Sydney

Gottlieb, N. (2005) *Language and Society in Japan*, Cambridge University Press, Cambridge

Graham, J.F. (ed.) (1985) *Difference in Translation Theories*, NY:Cornell University Press, Ithaca

Guenthner, F., Guenthner-Reutter, M. (eds.) (1978) *Meaning and Translation: Philosophical and Linguistic Approaches*, Duckworth, London

Gutt, E. (2000) *Translation and Relevance: Cognition and Context*, St Jerome, Manchester

Halliday, M.A.K., Hasan, R. (1976) *Cohesion in English*, Longman, London

Hanford, Stanley-Alexander (1954) *Fables of Aesop*, Penguin Books, Harmondsworth, Middlesex

Hartmann, R.R.K. (1980) *Contrastive Textology*, Julius Groos, Heidelberg

Hatim, B. (1997) *Communication Accross Cultures: Translation Theory and Contrastive Text Linguistics*, Exeter University Press, Exeter

Hatim, B., Mason, I. (1990) *Discourse and the Translator*, Longman, London & New York

Hatim, B., Mason, I. (1997) *The Translator as Communicator*, Routledge, London & New York

Hatim, B., Munday, J. (2004) *Translation*, Routledge, Abdigon, Oxon, Canada

Hewson, L., Martin, J. (1991) *Redefining Translation: The Variational Approach*, Routledge, London & New York

Holmes, J.S. (ed.) (1970) *The Nature of Translation: Essays on the Theory and Practice of Literary Translation*, Mouton, The Hague & Paris

Holmes, J.S. (1988) *Translated! Papers on Literary Translation and Translation Studies*, Rodopi, Amsterdam

Holub, R.C. (1984) *Reception Theory: A Critical Introduction*, Methuen, London & New York

Honig, E. (1985) *The Poet's Other Voice: Conversations on Literary Translation*, University of Massachusetts Press, Amherst

Horguelin, P. (1981) *Anthologie de la manière de traduire*, Linguatech, Montreal

Horton, D. (1994) “Literary Translation Between Equivalence and Manipulation: Lawrence Norfolk’s Lemprière’s Dictionary in German”, *Neophilologus* 78:175-194

House, J. (1977) *A Model for Translation Quality Assessment*, Gunter Narr, Tübingen

House, J. (1997) *Translation Quality Assessment: A Revised Model*, Gunter Narr, Tübingen

James, C. (1980) *Contrastive Analysis*, Longman, London

Keene, D. (ed.) (1955) *Anthology of Japanese Literature*, Grove Press, New York

Keene, D. (1987) *Dawn to the West: Japanese Literature in the Modern Era*, Henry Holt & Co, New York

Keene, D. (1988) *The pleasures of Japanese Literature*, Columbia University Press, New York

Kelly, L.G. (1979) *The True Interpreter: A History of Translation Theory and Practice in the West*, St Martin’s Press, New York

Κεντρωτής, Γ. (2000) *Θεωρία και πράξη της μετάφρασης*, Δίαυλος, Αθήνα

Κουτσιβίτης, Β. (1994) *Θεωρία της Μετάφρασης*, Πανεπιστήμιο Αθηνών, Αθήνα

Kuhiwczak, P., Littau, K. (eds.) (2007) *A Companion to Translation Studies*, Multilingual Matters LTD, Clevendon, Buffalo, Toronto & Sydney

Lakoff, G. (1987) *Women, Fire, and Dangerous Things*, University of Chicago Press, Chicago

Landers, E. C. (2001) *Literary Translation; A Practical Guide*, Multilingual Matters LTD, Clevendon, Buffalo, Toronto & Sydney

Larose, R. (1992) *Théories contemporaines de la traduction*, Presses de l'Université du Québec, Québec

Lee, D. (1992) *Competing Discourses: Perspective and Ideology in Language*, Longman, London

Leech, G. (1981) *Semantics: the study of Meaning*, Penguin, Harmondsworth

Lewis, J.E. (1996) *The English Fable, Aesop and Literary Culture 1651-1740*, Cambridge University Press, Cambridge

Lyons, J. (1981) *Language and Linguistics*, Cambridge University Press, Cambridge

Livingstone, R.W. (1938) *Portrait of Socrates: Being the Apology, Crito and Phaedo of Plato in an English Translation*, Clarendon Press, Oxford

Malone, J.L. (1988) *The Science of Linguistics in the Art of Translation: Some Tools from Linguistics for the Analysis and Practice of Translation*, State University of New York Press, Albany

Moore, M. (1954) *The Fables of La Fontaine*, Macmillan, New York

Mounin, G. (1963) *Les problèmes théoriques de la traduction*, Gallimard, Paris

Μπατσαλιά, Φ., Σελλά-Μάζη, Ε. (1997) *Γλωσσολογική Προσέγγιση στη Θεωρία και τη Διδακτική της Μετάφρασης*, Προλ. Γεώργιος Μπαμπινιώτης, Έλλην, Αθήνα

Munday, J. (2001) *Introducing Translation Studies: Theories and Applications*, Routledge, London & New York

Neubert, A., Shreve, G.M. (1992) *Translation as Text*, Kent State University Press, Kent Ohio, USA

Newmark, P. (1981) *Approaches to Translation*, Pergamon, Oxford & New York

Newmark, P. (1987) "The use of systemic linguistics in translation analysis and criticism" In R. Steele & T. Threadgold (eds.) *Language Topics: Essays in Honor of Michael Halliday*, John Benjamins, Amsterdam & Philadelphia

Newmark, P. (1989) *A Textbook of Translation*, Pergamon, Oxford & New York

Nida, E.A. (1964) *Toward a Science of Translating*, E.J. Brill, Leiden

Nida, E.A. (1969) *The Theory and Practice of Translation*, E.J. Brill, Leiden

Nida, E.A. (2002) *Contexts in Translating*, John Benjamins Publishing Company, Amsterdam

Nida, E.A., Taber, C.R. (1969) *Exploring Semantic Structures*, Wilhelm Fink, Munich

Oittinen, R. (1993) *I am Me - I am Other: On the Dialogics of Translating for Children*, University of Tampere, Tampere

Oseki-Depre, I. (1999) *Theories et pratiques de la traduction litteraire*, Armand Colin, Paris

Parks, T. (1998) *Translating Style: The English Modernists and their Italian Translations*, Cassell, London & Washington

Pasternak, B. (1959) *I Remember*, Pantheon, New York

Robinson, D. (1991) *The Translator's Turn*, Johns Hopkins University Press, Baltimore

Saint André, J. (2003) "Retranslation as Argument: Canon、 Formation、 Professionalization、 and International Rivarly in 19th Century Sinological Translation", *Cadernos de Tradução*, Vol. 1, No 11:59-93

Sapir, E. (1949) *Language*, Harcourt Brace, New York

Schulte, R., Biguenet, J. (eds.) (1992) *Theories of Translation*, University of Chicago Press, Chicago & London

Selver, P. (1966) *The Art of Translating Poetry*, Jon Baker, London

Simon, S. (1996) *Gender in Translation: Cultural Identity and the Politics of Transmission*, Routledge, New York & London

Snell-Hornby, M. (1988/revised 1995) *Translation Studies: An Integrated Approach*, John Benjamins, Amsterdam & Philadelphia

Snell-Hornby, M., Pöchhacker, F., Kaindl, K. (eds.) (1994) *Translation Studies: An Interdiscipline*, John Benjamins, Amsterdam

Snell-Hornby, M., Jettmarova, Z., Kaindl, K. (eds.) (1996) *Translation as Intercultural Communication*, John Benjamins, Amsterdam & Philadelphia

Sperber, D., Wilson, D. (1986) *Relevance: Communication and Cognition*, Basil Blackwell, Oxford

Steiner, G. (1975) *After Babel: Aspects of Language and Translation*, Oxford University Press, London

Stubbs, M. (1996) *Text and Corpus Analysis*, Blackwell, Oxford

Tatilon, C. (1986) *Traduire pour une pédagogie de la traduction de la traduction*, Préface: Georges Mounin, éd. GREF, Toronto

Venuti, L. (1995) *The Translator's Invisibility: A History of Translation*, Routledge, London

Venuti, L (ed.) (2000) *The Translation Studies Reader*, Routledge, London & New York

Vinay, J.P., Darbelnet, J. (1977) *Stylistique Comparée du Français et de l'Anglais: Méthode de Traduction*, Didier, Paris

Warren, R. (ed.) (1989) *The Art of Translation: Voices from the Field*, Northeastern University Press, Boston

Wilss, W. (1996) *Knowledge and Skills in Translation Behavior*, John Benjamins, Amsterdam & Philadelphia

Wittgenstein, L. (1974) *Philosophical Grammar*, University of California Press, Berkeley

Wrenn, C.L. (1968) *The Idea of Comparative Literature*, Modern Humanities Research Association, Chicago & London

Zipes, J., Pickering, S. (2004) *Aesop's Fables*, Signet Classics, Penguin Books, New York

和書

岩谷智 (1998)『イソップ風寓話集』国文社、東京

海老沢有道(1991)『キリシタン南蛮文学入門』教文館、東京

植西聡 (2007)『ヘタな人生論よりイソップ物語』河出書房新社、東京
河野与一 (2007)『イソップのお話』岩波書店、東京
小堀桂一郎 (2005)『イソップ寓話』講談社、東京
小峰和明(2001)『説話の森：中世の天狗からイソップまで』岩波書店、東京
小堀桂一郎(1978)『イソップ寓話 : その伝承と変容』中央公論社、東京
新熊清(2008)『翻訳文学のあゆみ：イソップからシェイクスピア』世界思想社、京都
新村出(1934)『イソップ』岩波書店、東京
新村出、山本光雄(1942)『イソップ寓話集』岩波書店、東京
新村出、柊源一(1993)『切支丹文学集』平凡社、東京
鈴木範久(2006)『聖書の日本語:翻訳の歴史』岩波書店、東京
田中敬義(1879)『伊蘇普喩言:北京官話』渡部温、東京
田中達三郎、若菜蝴蝶園、Townsend、George Fyler(1891)『伊蘇普物語：寓意勸懲』有斐閣、東京
中務哲郎 (2006)『イソップ寓話集・Αισώπειοι Μύθοι』岩波書店、東京
中務哲郎、佐野好則、久保田忠利 (2008)『ギリシャ喜劇全集 2』岩波書店、東京
二宮フサ (2006)『イソップ童話』(上、下)　偕成社、東京
古田裕清(2004)『翻訳語としての日本の法律用語:原語の背景と欧州的人間観の探究』中央大学出版部、八王子
武藤禎夫(2000)『伊曾保物語 : 万治絵入本/ [イソップ原著]』岩波書店、東京
武藤禎夫 (2006)『伊曾保物語』岩波書店、東京
柳父章(1976)『翻訳とはなにか:日本語と翻訳文化』法政大学出版局、東京
山本光雄(1974)『イソップ寓話集』岩波書店、東京
渡辺温(1873)『伊蘇普物語, 6 巻』尚古軒浦吉、沼津
渡辺温、谷川、恵一(2001)『通俗伊蘇普物語』平凡社、東京

インターネット

http://www.anukrit.net

http://www.asjapan.org

http://www.dubloislc.net

http://en.wikipedia.org/wiki/Fable

http://ja.wikipedia.org/wiki/大日本帝国憲法

http://www.court-law-office.gr.jp/tokusyu/13-10.htm

http://www.fairytalescollection.com

http://tomsdomain.com/aesop/townsendpreface.htm

http://www.wwnorton.com/nrl/english/nacl/Timeline_8th.htm

http://www.brittanica.com/EBchecked/topic/13793/cottabus

索引

名前

A

Accursius Bonus *39*

Aesop *7-10, 14, 31-33, 35-37, 39-42, 49, 51-57, 59-62, 66, 70-72, 76, 78-80, 84, 85, 89, 90, 93, 94, 97, 98, 102, 107, 109-120, 121-124, 128-130, 139*

Aischylus *108, 129*

Aphtonius *39*

Aristophanes *8, 9, 31, 44-50, 55-60, 111, 113, 114, 117, 121, 124, 128-130*

Aristotle *42, 128, 130*

B

Backhouse Anthony Edgar *51*

Baker Mona *10, 22, 23, 29, 30-32, 34, 130, 131*

Barnstone Willis *15*

C

Catford J.C. *19,20*

Cicero *11*

Comte Auguste *42*

Croxall Samuel *39*

D

Dale N. Peter *51*

Darbelnet Jean *18*

De Labriole Fierre *53*

Delisle Jean *10, 22-25, 32-34, 131*

Dionysus *45, 49, 127*

G

Gambier Yves *14*

H

Halliday Michael M.A.K. *18*

Hatim Basil *8, 18*

Homer *35, 59, 101*

Honna Nobuyuki *51*

Horace *11*

House Julianne *18*

J

Jadmon *37*

Jakobson Roman *20*

Jourdan Jean Baptiste *59*

K

Kade Otto *17*

L

L'Estrange Roger *39*

M

Mason Ian *8, 18*

Munday Jeremy *20*

N

Nevelet Isaac Nicholas *39*

Newbery John *39*

Newmark Paul *8*、*21*

Nida Eygene *10, 21-23, 27-29, 32-34, 130, 131*

P

Phalereus Demetrius *35, 39*

Planudes Maximus *39*

Platon *39, 126, 130*

Q

Quintillian *11*

S

Snell-Hornby Mary *15, 17*

Socrates *39, 48*

Sophocles *129*

Steindwhel *52*

T

Tatilon Claude *10, 22, 23, 25-27, 32-34, 131*

Terence *11*

V

Van de Broeck Raymond *22*

Venuti Lawrence *14*

Vinay Jean Paul *18*

X

Xanthus *36*

Xavier Francisco *52*

Z

Zinodōra *44*

Zhang Geng *52*

専門用語

A

Acceptability・受容性 *13, 21, 31*

Adaptation・適応 *18, 21*

Agōn・アゴーン *46, 114*

Analysis・分析

Error・エラー *22*

Hearer oriented・聞き手指向 *30*

Speaker oriented・話し手指向 *30*

Anaphora・照応 *24*

Areios Pagos・アエリオス・パゴス *125*

B

Brevity・簡潔 *25, 43*

C

Chaos・カオス *110*

Chorus・コロス *46, 47*

Coherence・首尾一貫性 *25*

Comedy・コメディ、喜劇 *9, 31, 45-50, 55-57, 60, 111, 114, 115, 118, 122,124, 128-131, 137*

Compensation ・補償 *21*

Concentration・集中 *25*

Context・文脈 *17, 23, 24, 30, 68, 84, 127, 133, 136, 139*

Continuum・連続 *12*

Contrastive Analysis/CA・対照分析 *18, 19*

Correspondence・対応

Formal・形式的な *19*

Culture・文化

A Culture・A 文化 *27*

B Culture・B 文化 *27*

High Context・高文脈 *127*

Low Context・低文脈 *127*

Culture-specific・文化的な (特著性) *18*、*29*

D

Dialect・方言 *9*

Demagogue・デマゴーグ *109*

Drama・劇 *9, 31, 45, 46, 48, 55-57, 107, 110, 129*

E

Ecclesia・民会 *125*

Economy・節約 *25*

Eforoi・監督官 *125*

Eksodos・エクソドス *46, 47*

Epeisodion・エピソード *46*

Equivalence・等価性 *8, 11, 15-22, 24, 28, 29, 60, 130*

Dynamic・ダイナミックな *21, 28, 33, 34, 62, 66-70, 72, 76-78, 80, 83-85, 88-90, 92-94, 96-98, 100-102, 105, 106, 111, 113-115, 117, 118, 120-124, 130, 131, 133*

Formal・形式的な *19, 21, 28, 33, 34, 62, 66-72, 76-78, 80, 83-85, 88-90, 92-94, 96-98, 100-102, 105, 106, 111, 113-115, 117, 118, 120-124, 130, 139*

Functional・機能的な *18*

In Difference･違いの中の *11, 21*

Lexical・語彙的な *17, 20*

Null・無効な *17*

Non-equivalence ・非等価性 *29*

One-to-one・一対一 *17*

One-to-part-of-one・一対部分 *17*

Optional・選択的な *17*

Proximate・近似的な *17*

Textual・文章的な、テクストの *19*、*29*

Translational・翻訳の *19*

Erebus・エレボス *110*

Explicitation・明示 *18*

F

Fabula *38, 54*

Field・領域 *29*

Sub-field・部分領域 *29*

H

Hyponym・下位語 *30*

I

Iambus・イアンボス *46, 114*

Idiom・慣用語 *30*

Iketes・イケティス *107, 108*

Implication・音示 *18*

Implicature・包含 *25*

Information・情報

Anaphoric・前方照応 *26*

Diachronic・通時的な *26*

Dialectic・理論的な *26*

Geographical・地域的な *26*

Grammatical・文法的な *34, 62, 67, 68, 72, 76, 77, 80, 83, 85, 88, 90, 92, 94, 96, 98, 100, 103, 105, 111, 113, 115, 117, 119,120, 122, 123, 131*

Intentional・意図に関する *33, 34, 66, 70, 71, 76, 78, 82, 84, 88, 89, 92, 93, 96, 97, 100, 102, 105, 106, 113, 114, 116, 118, 120, 121, 123, 124, 131, 138*

Lexical・語彙的な *34, 58, 60, 65, 69, 75, 78, 82, 83, 88, 89, 92, 93, 96, 100, 101, 104, 105, 113, 116, 117, 120, 123, 131*

Pragmatic・語用論的な *34, 62, 66, 72, 76, 80, 83, 85, 88, 90, 92, 94, 96, 98, 100, 102, 105, 111, 113, 115, 117, 118, 120, 122, 123, 131*

Situational・状況的な *34, 62, 66, 67, 72, 76, 80, 83, 85, 88, 90, 92, 94, 96, 98, 100, 103, 105, 111, 113, 115, 117, 118, 120, 122, 123, 131*

Stylistic・文体的な *26, 34, 66, 70, 76, 78, 82, 84, 88, 89, 92, 93, 96, 97, 100, 101, 105, 106, 113, 114, 116, 117, 120, 121, 123, 124, 131, 137, 138*

K

Katharsis・カタルシス *107*

Kōmos・コモス *46*

Kōmastis・コマスティス *46*

Klerouchoi・クレールーコイ *44*

L

Language・言語

L1 *16*

L2 *16*

A Language・A 言語 *13, 14, 24, 26, 27, 53*

B Language・B 言語 *13, 14, 24, 26, 27, 53*

C Language・C 言語 *13, 14*

SL *17, 18*

TL *17, 18*

Source-・原本言語、起点言語 *17, 21, 26, 27, 29, 30, 59, 139*

Target-・目標言語 *13, 15-18, 20, 22-30, 59, 138, 139*

Langue・ラング、言語 *17, 19*

Lexicalization・語彙化 *30*

Loan-word・外来語 *30, 51*

Logos・ロゴス *128*

Logiki・論理 *127, 128*

M

Meaning・意味

Figurative・比喩 *30*

Literal・文字通り *30*

Memorization・暗記 *24*

Morpheme・形態素 *20, 133*

O

Ōde・オード *46*

Orchestra・オルケーストラー *46*

P

Parabasis・パラバシス *46, 47*

Paraphrase・意訳 *33*

Parodos・パロドス *46, 57*

Parole・パロール *19*

Polymorphism・多型 *65, 69, 75, 78, 92, 93, 96, 100, 101, 104, 116, 117, 137*

Polysemy・多義 *65, 69, 75, 78, 82- 84, 88, 89, 92, 96, 100, 101, 105, 106, 113, 116, 120, 123, 136, 137*

Prologos・プロロゴス *46, 57*

Prytaneion・プリュタネイオン *125*

R

Referent・指示対象 *16, 19*

Reproduction・複製 *22, 24*

S

Shift・シフト *20*

Category・カテゴリー *20*

Level・レベル *20*

Syntagme・連辞 *18*

Super-ordinate・上位語 *30*

System・システム

Micro-・微小システム *19*

T

Text・テクスト

Literary・文化的な *13, 62, 66, 72, 80, 85, 90, 94, 98, 102, 111, 115, 118, 122, 131, 137, 138*

Original・原本、原典 *8-13, 17-21, 23-34, 53, 58, 60-62, 66-72, 76-78, 80, 82-85, 88-90, 92-94, 96-98, 100-103, 105, 106, 111, 113-118, 120-124, 130, 131, 137-139*

SLT *22, 23*

Source Text・起点言語のテクスト *22, 23*

TLT *13, 22*

Target Text・目標言語のテクスト *13, 22, 23*

Tragedy・悲劇 *45-49, 57, 108, 113, 114,129, 137*

Translatability・完全な翻訳 *11*

Translation・翻訳

Conventionalized・慣習化された *12、13*

Covert・密かな翻訳 *18*

Diasemiotic・通記号的な *12*

Full・全翻訳 *19*

Hyposemiotic・下記号的な *12*

Inspirational・創造的 *12*

Interlingual ・言語間的な *12*、*13*、*20*

Intersemiotic・記号間的 *12*、*20*

Intralingual ・言語内的な *12*、*20*

Intrasemiotic・記号内的な *12*

Isosemiotic ・同記号的な *12, 13*

Literal・文字通り *18, 58, 139*

Overt・明白な *18*

Partial・部分的な *19*

Rank-Bound・同ランクの *20*

Relay・リレー *13, 14*

Restricted・限定的な *20*

(Restricted) Phonological・音韻的な *20*

(Restricted) Graphological・書記素的な *20*

Retranslation・再翻訳 *14, 15*

Supersemiotic・超記号的な *12*

Total・全体的な *20*

Unbounded・無制限の *20*

Word to Word・文字通り *18, 58, 139*

U

Untranslatability・翻訳の不可能性 *11*

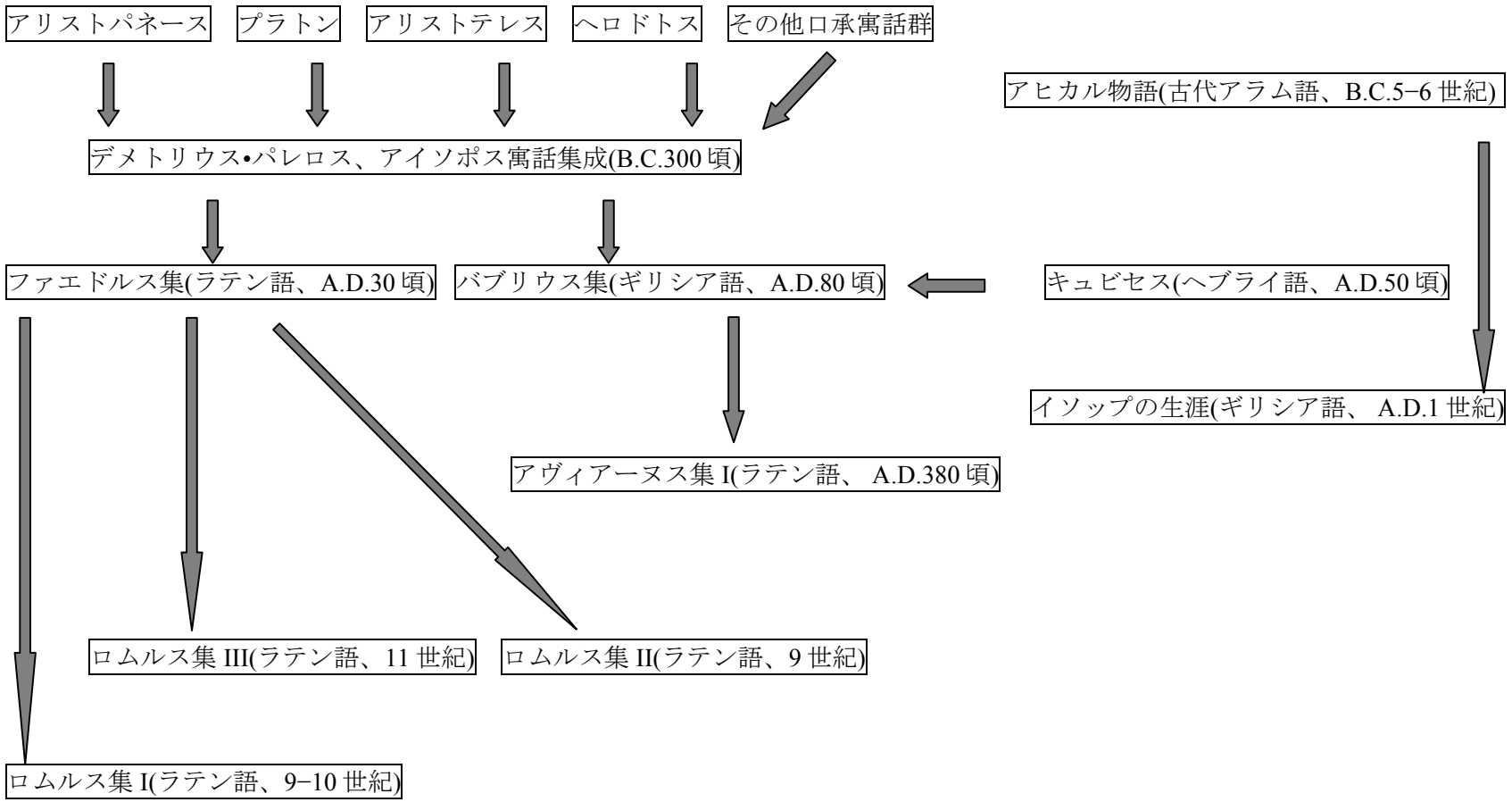
Uranus・ウーラノス *110*

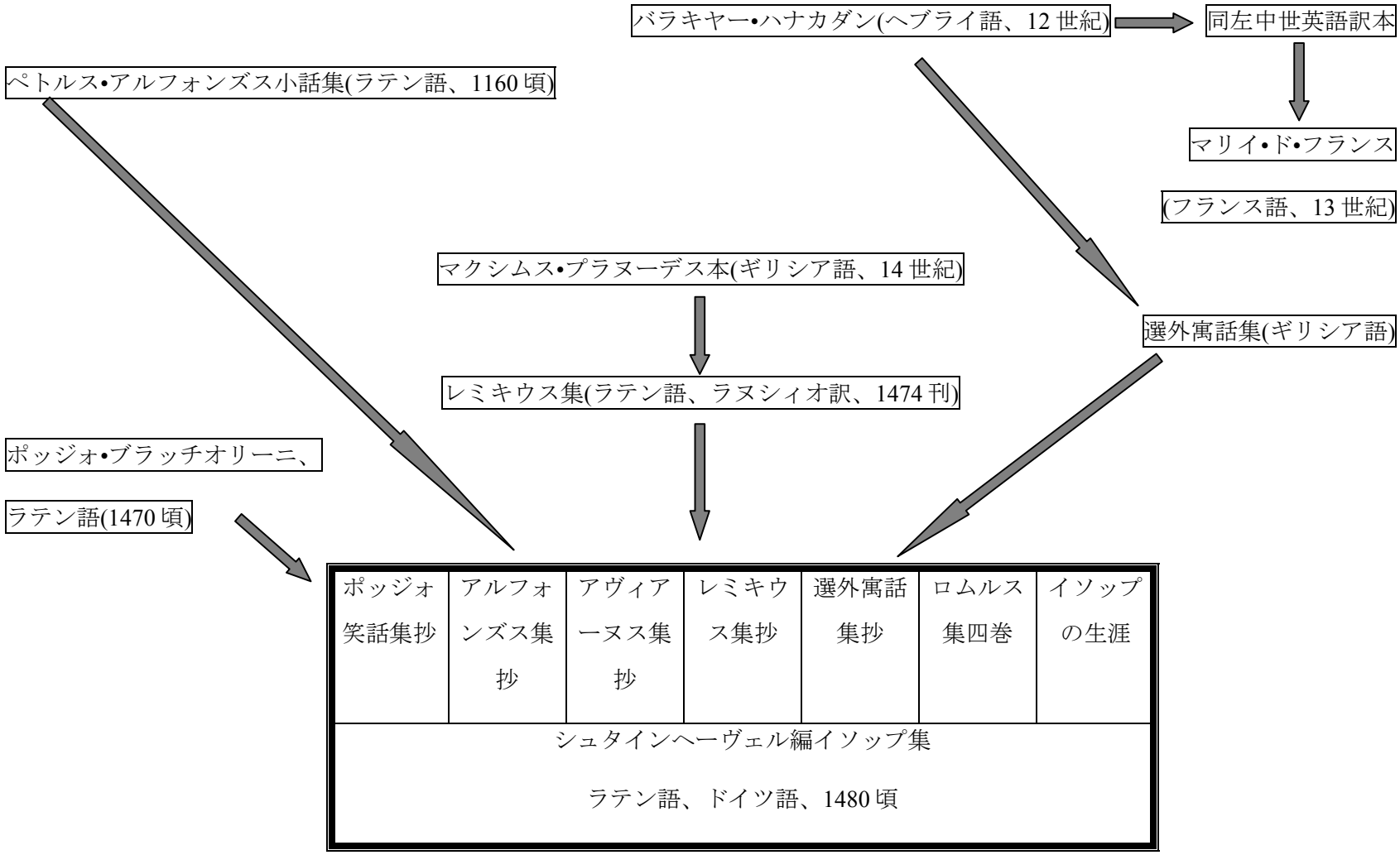
V

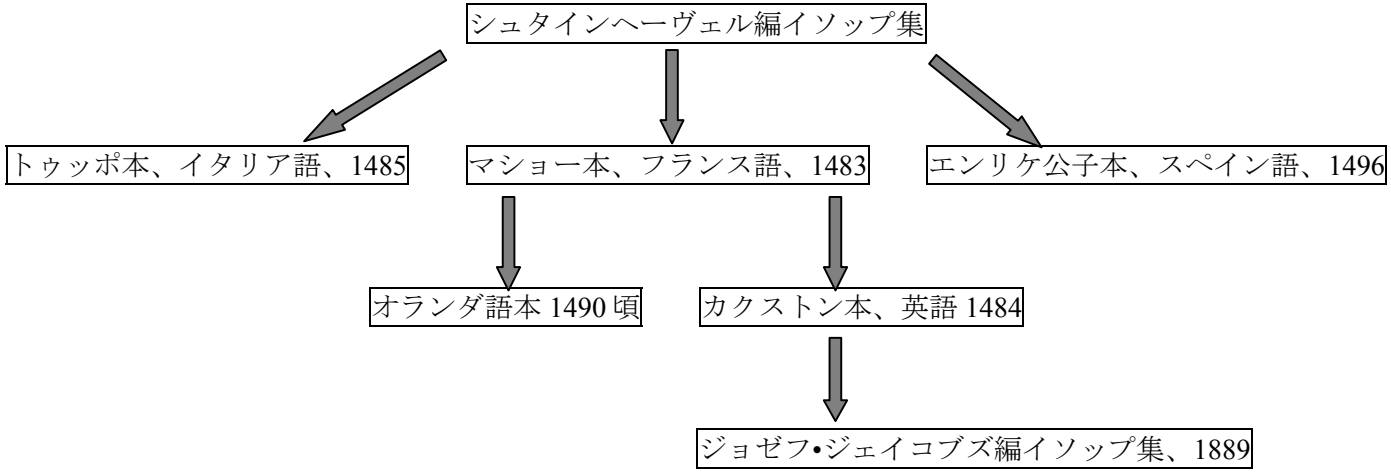
Vouloir Dire・言おうとすること *8, 23, 24, 33, 34*

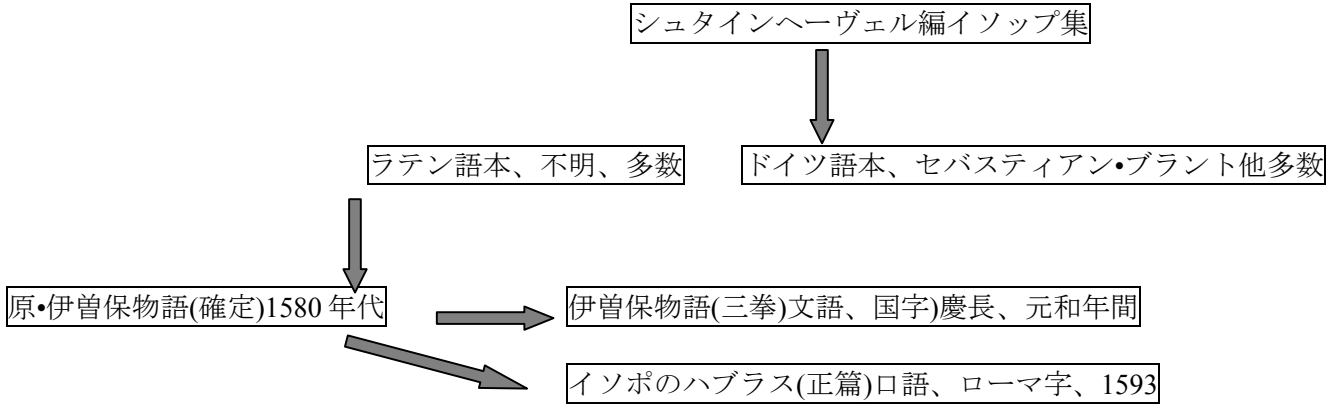
Voulē・評議会 *125*

イソップ寓話伝承系統略図




バラキヤー•ハナカダン(ヘブライ語、12 世紀)
同左中世英語訳本
マリイ•ド•フランス
(フランス語、13 世紀)
ペトルス•アルフォンズス小話集(ラテン語、1160 頃)
マクシムス•プラヌーデス本(ギリシア語、14 世紀)
選外寓話集(ギリシア語)
レミキウス集(ラテン語、ラヌシィオ訳、1474 刊)
ポッジォ•ブラッチオリーニ、
ラテン語(1470 頃)
ポッジォ笑話集抄
アルフォンズス集抄
アヴィアーヌス集抄
レミキウス集抄
選外寓話集抄
ロムルス集四巻
イソップの生涯
シュタインヘーヴェル編イソップ集
ラテン語、ドイツ語、1480 頃


シュタインヘーヴェル編イソップ集
トゥッポ本、イタリア語、1485
マショー本、フランス語、1483
エンリケ公子本、スペイン語、1496
オランダ語本 1490 頃
カクストン本、英語 1484
ジョゼフ•ジェイコブズ編イソップ集、1889


シュタインヘーヴェル編イソップ集
ラテン語本、不明、多数
ドイツ語本、セバスティアン•ブラント他多数
原•伊曽保物語(確定)1580 年代
伊曽保物語(三拳)文語、国字)慶長、元和年間
イソポのハブラス(正篇)口語、ローマ字、1593